

◇ミツバチと蜂蜜の真情報シリーズ◇

日本の養蜂よもやま話

編著者 白 佐 俊 憲（蜂蜜研究家・文筆家）

監修者 正 倉 一 文（随筆春秋事務局長）

発行元 随筆春秋ポータル（電子書籍）

有料印刷委託先 製本直送ドットコム

初版発行 2025（令和7）年12月10日

はじめに

本書は「ミツバチと蜂蜜の真情報シリーズ」の1冊である。

特徴は、電子書籍の特色を活かして、新しい情報を採り入れた増補改訂版を必要に応じて比較的容易に発信し続けられるところにある。

各方面からの発表により、各種の新しい真情報・資料の提供を受け、それを反映させ、できるだけ真情報源であり続けたいと願っている。

したがって、各冊・各部分の構成に「おわりに」や「まとめ」がない。各冊は各テーマの下、気軽に読めるよう少ない分量にしているが、更新を重ねて豊富にしていきたい。分量が増えれば、分冊し冊数増や新テーマ立項や編成換えを行い柔軟に対応したい。

閲覧自由の無料開放の電子書籍にするので、任意の「検索語」を入力すれば、即座に知りたい、読みたい部分にたどり着ける。「国立国会図書館デジタルコレクション」及び「同サーチ」に全冊の登録を依頼するので、全冊の「検索」も可能である。ダウンロードもあっという間にできるから、手元に揃えておけば印刷もできて便利である。

印刷された書籍の形で読みたい人向けに、印刷委託先も用意している。こちらは、各自手配で1冊から作製するため有料である。

編著者が80歳代になって始めた「8」を横にした無限大「∞」の信念で「夢」に向かう「勇往邁進」である。今後も情報収集に努め、真情報を社会に提供し、全国へ、未来へと発信し続けたい。

2025（令和7）年11月30日

編著者

＜冒頭注＞

- (1) 「はちみつ」「ハチミツ」「蜂蜜」の表記は、書名・法規・引用など特別な場合を除いて、原則「蜂蜜」に統一した。同様に、「みつばち」「ミツバチ」「蜜蜂」は、原則「ミツバチ」に統一した。
- (2) 「敬称」の類は、一部の例外を除いて省略した。
- (3) 年号は、原則、西暦（和暦）を併記する形に統一した。
- (4) 素原稿の多くは、「渡辺碧水」の筆名で公募『蜂蜜エッセイ』や本名で新聞に載せた投稿に追加・修正・再編集・合作を加えたものである。これについての掲載題名・年月日などはほとんど省略した。
- (5) 各章の記述には、独自性を持たせたので、話題・内容が接近・類似する場合は、記述・表現内容が重複したり、異なったりする部分がいくつも含まれる。
- (6) 本書の内容に関する疑問・質問には対応できないことを、予めお伝えしておく。

＜同類姉妹書＞ 随筆春秋ポータル発行、電子出版

- ◎既刊『どうなる「第3のみつ」』2024年8月3日発行、全192ページ。
- ◎既刊＜ミツバチと蜂蜜の真情報シリーズ＞ B 5 判
 - ①『蜂蜜愛食者の基礎知識』2025年2月15日発行、全146ページ。
 - ②『蜂蜜は生涯健康常備薬』2025年3月15日発行、全144ページ。
 - ③『蜂蜜関連よもやま話』2025年4月20日発行、全148ページ。
 - ④『世界の蜂蜜よもやま話』2025年6月25日発行、全148ページ。
 - ⑤『日本の養蜂歴史概要』2025年8月10日発行、全152ページ。
 - ⑥『都市養蜂の深掘り話』2025年11月15日発行、全174ページ。

目 次

はじめに.....	1
「養蜂」の前時代は「蜜猟」	4
ミツバチと共に百余年.....	28
北海道での越冬養蜂.....	37
先達を訪ね養蜂を知る.....	49
師匠と尊敬された元養蜂家.....	56
高校生の養蜂が教科書に掲載.....	66
震災復興に新蜂蜜を推奨.....	84
伝道放送に養蜂家が出演.....	108
増える日本ミツバチ飼育.....	119
〔考究〕 蜂場権の慣行.....	133
奥付・付記.....	151



「養蜂」の前時代は「蜜獵」

「養蜂」以前の「蜜獵」

歴史的に、「養蜂時代」の前は「蜜^{みつりよう}獵時代」と位置づけられる。

ところが、音声で聞けば「密獵・密漁」と間違われ、漢字で示せば「蜜蠟（みつろう＝ミツバチが巣を作るための材料で、働きバチが分泌するロウ）と間違われやすい用語であったためか、一般にほとんど普及しないで、死語化してしまっている。

今日の国語辞典類には載せられていないから、一般に知られていないことは当然とも言えるが、養蜂分野の専門用語の1つである。

「蜜獵」とは、端的に言えば、食用のために人が野生ミツハチの巣から蜂蜜を採取する行為を指す。具体的には、自然環境の中で生息している野生のミツバチの巣を探し出して、蜂蜜を得るために、その巣を壊したり、巣からハチを追い出したりする作業も含められる。

これを生業にしている人を「蜜獵家」という。

発展段階的には、おおむね「養蜂」以前の原始的な蜂蜜収集の方法と位置づけることができる。技術的に未熟な段階での破壊的蜂蜜採取法と言えよう。

蜜獵は本来、生業として継続性を維持するためには、自然な環境への影響や、ハチの生態系の維持に配慮しながら行われなければならない。しかし、原始的段階においては、蜜獵は無秩序に頻繁に行われた

ために、ハチの群を減少させたり、巣を完全に消滅させたり、生態系のバランスを崩してしまったりした場合が少なくなかった。

昔の蜜猟は、ハチの巣を破壊して、ハチの食べ物を人が横取りする野蛮な行為であった。だが、継続的に経験を積み重ねるにつれて、地域によっては様々な形で採取法に配慮や工夫も加え、存続させるようになっていった。

持続的な採集を可能にするために、近代の伝統的な蜜猟では、ハチの巣に近づく際に煙を焚^たいてハチを落ち着かせたり、巣を壊さないで蜂蜜を採取する技術を取り入れたり、意識的に巣の一部を残したり、巣造り用の樹木を残したりして、ハチの群れを保護する配慮もされてきた。安全な道具や技術を用いて、より効率的に、より容易に蜂蜜を採取するように、創意工夫もなされてきた。

「蜜猟」とは表現するが、これには蜂蜜の採取だけでなく、ハチの巣から得られる他の物質（蜜蝋、ローヤルゼリー、プロポリスなど）の採取・利用も含まれる。また、人々の生活と密着した歴史を持つ行為であり、文化的な側面も持っている。

なお、英語で言えば（和製英語の感があるが）、「蜜猟」は（“honey hunting”（ハニーハンティング））あるいは“honey hunt”（ハニーハント））、そして「蜜猟家」は「“honey hunter”（ハニーハンター）」となろう。（“honey hunter”は最も直接的な表現で、より具体的な職業や役割を表す場合は、“honey scout”（蜂蜜探索者）や“honey collector”（蜂蜜採取者）とするほうが適切なこともある）

養蜂が盛んな現代でも外国の一部地域では延々と続いている蜜猟は、自然と人間の関係を表す1つの側面であり、環境保護や持続可能な資

源利用という観点からも、改めて見直されるべきである。現に積極的に保護事業が進められている地域もある。

現代のハニーハンティング

このように、発展段階は世界的に見て、養蜂以前は、人々は野生のミツバチの巣を探して歩き、見つけた巣房を採取して、その中から直接的に熟成された蜂蜜を得て食べていた。

そして、長い歴史の過程の中で試行錯誤を重ねながら、ミツバチを人の管理下に置いて家畜化し、比較的自由に容易に効率的に飼育し、さまざまなミツバチ産品を得られるように、継承と創意工夫をとおして養蜂の知識・技術の普及・向上・発展・確立を成し遂げてきた。食用に、薬用になどと、有効な産品の実用的活用の用途も広げてきた。

「蜜獵」の言葉は、かろうじて現代に残された。「蜜獵とは、一般的に、ミツバチの巣から蜂蜜や蜜蝋を採取する全般的な行為をいう。特に、野生のハチの巣房から蜂蜜や蜜蝋を採集する行為を指す」と。

ただし、意味する内容を変えながらも、日本語として現代も使われる用語に「ハニーハンティング、honey hunting」がある。本来、「ハニー(蜂蜜、honey)」+「ハンティング(狩り、探し求めること、hunting)」を意味する言葉である。また、それをする人の「ハニーハンター、honey hunter」も同様によく使われる。

現代の「ハニーハンティング」については、どんな仕事をしている人が「ハニーハンター」と呼ばれているかを探してみるとわかりやすい。主に次の3つの意味合いの人があげられる。

◎野生のミツバチの巣を探し求め、その巣から蜂蜜を直接採取する人。

(伝統のハニーハンター)

◎産地に出向き直接蜂蜜を仕入れる担当者(バイヤー)。(最新のハニーハンター)

◎ある分野で能動的・情熱的に活動する人。(上の2つの仕事をする人には欠かせない人格でもある)

野生の蜂蜜を採取するハニーハンター

1 番目の意味のハニーハンターとは、人の立ち入らない秘境の地で危険を冒してまでも野生のミツバチの巣から蜂蜜を採取し暮らしを立てる人のことである。この場合は、「ハニー(蜂蜜)」+「ハンター(狩をする人)」の意味合いが非常に強い。

彼らの活動は、①崖に作られた巨大な野生のハチの巣から蜂蜜を採る。②高い木や岩山に登り、野生のハチの蜂蜜を採集する。③断崖絶壁を縄梯子なわばしごで降り、宙吊りのまま野生のハチの巣に向かい、蜂蜜を採る。

現代の活躍の舞台は、ヒマラヤ奥地など、人の立ち入らない秘境とされる地である。かれらの使う道具はかごなどの簡単なものと縄梯子である。古くから続く原始的な方法が延々と継承されてきている。この種のハニーハンティングとしては、外国の例しか見当たらない。

2021(令和3)年2月20日、NHKテレビ30分番組は「超密着!世界の凄ワザキング〜スケール感ハンパない“世界の匠”の凄ワザを目撃!〜」を放映した。ヒマラヤの奥地・秘境地帯で働く「ハニーハンター」の紹介である。

予告編は伝えた。「スケール感ハンパない! 世界の過酷な現場で働く“凄ワザ”キングに密着。『驚くべき仕事ぶり』と『壮大な絶景』を

ハラハラドキドキ堪能する！ ネパールの山岳地帯で命がけの蜂蜜狩りをする『ハニーハンター』。足場の悪い山道を分け入り、勘を頼りに、巨大なハチの巣を探し当てる。巣があるのは目もくらむような断崖絶壁。命を支えるのは1本の簡素な縄梯子だ。村の暮らしを支える貴重な収入源。果たして大収穫となるか？」。

現代は養蜂活動が世界的に主流であるが、古くからの伝統を継承するハニーハンターも存在するわけである。舞台は日本でないにしても、日本人が深く関わっている例もある。緒方陽一があげられる。

◎緒方陽一（愛称：緒方ポニィ）

日本人の例には、画家・造形デザイナーから転向した緒方陽一のように、この1番目の仕事に力点を置くハニーハンターもいる。

緒方の活躍は、2023（令和5）年5月28日、毎日放送（MBS）製作著作／TBS系全国ネットのドキュメンタリーテレビ番組『情熱大陸』に「蜂蜜ハンター／緒方陽一／カンボジアの人々と守る神秘の味！野生の味とパワーに魅せられた男」として登場した。『毎日新聞』でも特集が組まれた。その記事は次のように伝えている。

「緒方が扱うのは、カンボジアのジャングルに自生する“東洋ミツバチ”の蜂蜜。一般的に養蜂に用いられる“西洋ミツバチ”が1種類の植物の蜜を集めるのに対して、何種類もの蜜をランダムに集めるその蜂蜜は、年ごとの森の実りによって複雑に味を変える。カシューナッツやライチの風味を感じるものから、糖度が低くコーヒーのような苦味を感じるものまで様々だ。緒方は毎年、ハチの繁殖期となる3月～7月をカンボジアで過ごし、現地で暮らす人たちとともに森に分け入って採取し

た蜂蜜を、調合・熟成する。短いものでも3か月、長いものでは10年以上かけて仕上げた蜂蜜は、日本の有名菓子店だけでなく、ミシュランの星付き寿司店やフレンチレストランからも引く手あまたという」

緒方陽一については、補足説明も少し加えておきたい。

小学校時代のあだ名「緒方ポニィ」を愛称とする画家の緒方陽一は、ジャングルを舞台に「森と共存」する野生蜂蜜の探究者でもある。

画家として活動していた緒方は、訪れたカンボジアで「東洋ミツバチ」がつくる野生蜂蜜の味に強く心を動かされ、人生が転換した。29歳の時だった。その後、2011（平成23）年にカンボジアに移住し活動を開始した。以来、カンボジアの少数民族と共にジャングルへ分け入り、「森の神秘」と共に蜂蜜を採るようになった。

森に分け入るためには、部族からの深い信頼を得る必要があり、1年以上にもおよぶ交渉の末にようやく入山許可を得たという綿密な関係構築の記録がある。

採集方法は徹底して持続可能性を尊重する。巣全体を奪うのではなく、3分の1だけを採取し、残した部分から新たな女王蜂が巣を再生するアプローチを重視している。さらに苦労しながら森に入り、蜂蜜を採取する間は現地の食生活を取り入れてジャングルで暮らす（昆虫やトカゲを食べるなど）ことも特徴として報告されている。

毎年3～7月、ジャングルで採蜜を続ける。採取後は、数か月～10年以上の熟成期間を経て蜂蜜を完成させ、日本のレストランや菓子店にも評価される高品質な商品に仕上げる、まさに「野生の味をアートにする」アプローチである。これらの諸活動は、2025（令和7）年の現時点も継続中と判断される。

外国の伝統的なハニーハンティング

本格的な例が日本では見当たらないのなら、外国ではどうか。探し当てた例をいくつか以下に順不同であげてみたい。

◎ ネパールのヒマラヤハニーハンティング……ネパールでは、ヒマラヤ山脈の断崖絶壁に巣を作るヒマラヤオオミツバチから蜂蜜を採取する。原住民のグルン族やケーワット族が伝統的におこなっている。ハニーハンティングは、伝統的な技術を受け継ぐリーダーを中心に、村の男性たちが協力して行われる。ハニーハンターは、自然やハチに関する知識が豊富で、自然の恵みを生活に取り入れている。村人にとって得られた蜂蜜は、食用や薬、そして貴重な収入源となる。現金収入は村の公共のために活かされてきた。

B Sテレビ東京の番組『Beeワールド』は、2021（令和3）年12月9日、「ヒマラヤオオミツバチのハニーハンティング篇」を放映した。解説には「人類は太古より、野生のミツバチの巣から蜂蜜を得るハニーハンティングをおこなってきました。ネパール北部、ヒマラヤ山脈を望む地では、今もその風習が残っています。10月下旬、アルズンさんをリーダーとする総勢12人が、ヒマラヤオオミツバチに挑みます。出発前には必ず、これまで犠牲になったハンターたちの鎮魂と、安全祈願を行います。これまで何人もの方が亡くなったそうですが、それでもハンティングを続けるのは、彼らにとって蜂蜜が貴重な栄養源となるからです。巣を見つけると、縄梯子を数人がかりで崖の上から垂らします。命綱は、腰に巻いた細い縄だけです。火のついた草木を受け取り、この煙でミツバチをおとなしくさせたら、いよいよ巣の捕獲に挑みます！

無事に獲れるのでしょうか？ 続きは次回！」とあった。

というわけで、同年12月16日、「ヒマラヤオオミツバチのハニーハンティング 後篇」が放映された。「村人たちは、高さ70メートルの断崖絶壁にある、^{どうもう}獰猛なヒマラヤオオミツバチの巣を狙います。煙でミツバチを追い払ったら、いよいよ巣の捕獲をスタートします。1メートルもの大きさの巣を捕獲するため、まず長い竿を使ってロープを巣に通します。切り取った巣が下に落ちないための支えになるのです。それを終えたら、いよいよミツバチの巣を切り離しにかかります。しかし、不安定な縄梯子での作業は、なかなか思うように行きません。格闘する中、ようやく巣の捕獲に成功しました。収穫した蜂蜜は1キロほどです。すぐに村に持ち帰り、村人たちに振る舞います。村人たちの笑顔と健康のために。受け継がれる決死のハニーハンティング」とあった。

◎ インドのハニーハンティング……国連とインド政府が支援し、森林保護と少数部族の保護を目的に、少数民族の原住民が事業としてハニーハンティングをおこなっている。産地のメルガートは、インドのほぼ中央部デカン高原の奥地に位置する。マハラシュトラ州とマディヤプラディッシュ州との境界を挟んだこの地域では、人々が古来の方法で野生ミツバチ（ロックビーと呼ばれる非常に大きい種類）の蜜を採取する仕事と農業とを兼業して生活している。この地域での野生黒蜂蜜採取の歴史は古く、紀元前にさかのぼる。ハニーハンターは、ベンガルタイガーが生息する動物保護区内で、危険をおかし、高い木や岩山に登り、野生の黒蜂蜜「ハンティングハニー」を採取している。蜂蜜の黒い色は、森の恵みをたっぷりと含んだ花々の花粉を取り除かず、そのまま使っ

ていることによる。

ロックビーは、熱帯、亜熱帯地域の樹木の高いところ、25～30メートルの所にコロニーを作る。断崖絶壁の敵が近寄りにくいような所や、城の城壁、民家などにも巣を作る。ハンティングは夜行われることが多く、トラなどの猛獣や毒蛇に襲われることもあり、高い木や崖から転落して死傷することもある、危険な冒険のような仕事であった。ハンターたちは、現在、CBRTI（中央ミツバチ調査訓練研究所）などの支援と指導の下、衛生的に採取し取り扱うよう教育を受け、マニュアルに沿って作業をおこなっている。

◎ インドネシア・スマトラ島のハニーハンティング……中部のテッソ・ニロ国立公園やその周辺には、世界最大のミツバチ「オオミツバチ」が
巣を作る背の高い木が500本ほど自生している。高いものでは85メートルにも達するこの "蜂蜜の木" は、現地ではシアランと呼ばれ、そこから採れる蜂蜜は村の人々の大切な収入源となっている。しかし、周辺の森では伐採が進み、また、村の人々の蜂蜜採取の方法も危険を伴うものであった。オオミツバチは気性が非常に荒く、集団で人を執拗に追いかけて刺すことで知られる。その攻撃はスズメバチ以上に激しいもので、これまで村の人々は防護服も命綱もつけずに作業をしていた。オオミツバチの巣の採集は、ハチの活動が比較的穏やかな夜に行われる。暗闇の中、シアランの木に登って行う作業は常に危険を伴う。

そこでWWF（世界自然保護基金）は、2004（平成16）年からテッソ・ニロでの森林保全活動の一環として、国立公園の周辺の村の人々が移住者に土地の権利を売ったり、園内で違法伐採や違法な農園経営に

関わることを防ぐため、森の保全を通じて収入が得られる仕組みづくりに取り組んだりしてきた。蜂蜜生産への技術支援も行われている。こうした取り組みは、同様の課題を抱えるボルネオ島（カリマンタン）にも広がり始めている。

◎ オーストラリアのアボリジニのハニーハンティング……オーストラリアのアボリジニ（先住民族の総称）は、クモの糸を使ってハリナシバチの巣を見つけ、蜂蜜を採取する。これは、彼らにとって重要な食料源であり、文化の一部でもある。

B S テレビ東京の番組『Beeミュージアム～ミツバチのいる風景』は、オーストラリア編として、2014（平成26）年3月26日に「アボリジニとハリナシバチ」を、同4月2日に「アボリジニのハニーハンティング」を放映した。その解説は、前者では「狩猟採集民であるアボリジニにとって、ハリナシバチは神聖なもの。蜂蜜は食料であるだけでなく、貴重な贈り物や、絵の具、楽器にも使用する、なくてはならないものです。ヤンディーナ村に住むガビガビ族のリンドンさんは、祖先神であるハリナシバチを讃え、ダンスでハンティングの伝統を伝えています」とあった。後者では「バンダバーグに暮らすアボリジニのハニーハンティングは伝統的な方法で行われます。それは上空数十メートルを飛ぶハリナシバチに蜘蛛の巣をつけて追跡するというもの。わずか数ミリのハリナシバチを追いかけた先に巣を発見。木を切ることなく、洞をくりぬいて巣をとりだします」とあった。

同じB S テレビ東京の番組『Beeワールド』は、2018（平成30）年5月3日に、オーストラリア篇「アボリジニとハニーハンティング」を

放映した。その予告解説には「今回は、オーストラリア東部にある緑豊かな村に暮らす先住民・アボリジニの親子を訪ねます。父親のデイビスさんが息子のズィークさんに、アボリジニに伝わるハニーハンティングを教えます。その方法は一風変わっていて、捕まえたハリナシバチの後ろ脚にクモの巣を付け逃がすという方法。見失わないようにハリナシバチの後を追いかけると、やがて巣にたどり着くのです。古から伝わるアボリジニのハニーハンティングを紹介します」とあった。

最近の文献としては、川崎和也（静岡大学地域創造教育センター）の論文「アボリジニ社会における狩猟採集活動の現在—オーストラリア北部ティウィの事例から—」（『静岡大学地域創造教育研究』第4号、p.21～35、2023（令和5）年4月12日発行）がある。

◎ バングラデシュのマングローブ林のハニーハンティング……バングラデシュでは、シュンドルボンという世界最大のマングローブ林で、ハニーハンティングが行われている。これは、塩害で農業が難しい地域の人々にとって、貴重な収入源となっている。

2024（令和6）年6月5日、NHKBSテレビの番組「Asia Insight：激動のアジアを市民の目線で描くドキュメンタリー」で「密林のハニーハンター～バングラデシュ～」を放映した。解説概要には「バングラデシュ南西部にある世界最大のマングローブ林シュンドルボン。毎年4～5月、1,000人もの男たちが野生のハチの巣から蜂蜜を採取する。その活動に密着した。シュンドルボンに隣接する村に暮らすアダム・アリ・ガジさん。40年の経験を持つベテランのハニーハンターだ。4月1日、孫や仲間と6人のチームを組み、今年初めてのハニーハンディン

グに向かった。広大な密林でハチの巣を探し出し、火をたいてハチを追
い払いながら、蜂蜜を採取する。塩害により農業に適さない沿岸地域で、
ハニーハンティングは貴重な収入源。わずか2か月のシーズンに、家族
の生活がかかっている」とあった。

古来延々と続く、世界各地の秘境で命懸けで野生の蜂蜜を採取する
「ハニーハンター」たちに共通する精神は、何であろうか。彼らに共通
するハニーハンター精神のおおよその要素を次にまとめてみた。

◎勇気と覚悟……極限状態での採蜜は生命の危険と隣り合わせである。
命懸けで挑むその姿勢に、勇気と覚悟が如実に表れている。

◎自然への敬意と共生意識……単なる収穫ではなく、自然（蜂・環境）
とのバランスを最優先にする。次世代のために巣を残したり（例えば、
蜜の一部は放置）、煙で蜂を刺激しすぎないように調整したりする。これ
は、自然と共に生き、害を与えない、持続可能性を重視するという強い
倫理観の表れである。

◎技術と伝統の継承……幼いころから経験を積み、世代を超えて技術
や儀式を伝えている。伝統と儀式、採蜜技法が深く結びついており、そ
れ自体がアイデンティティとして継承されている。一部には、独自の詠
唱や祈りを伴う採蜜儀礼が行われている。

◎コミュニティの絆とチームワーク……危険な作業は個人で行うので
はなくチーム内で分担しながら遂行され、強固な信頼関係と連帯感で
支えられている。協力し合う中で喜びや仲間意識が育まれる。

◎精神的な試練と巡礼性……ハニーハントは時に儀式的で神聖な意味
合いを帯び、精神的な試練であり、自己成長の道でもある。祈りや儀式

を欠かさず、成功は神や自然への感謝として捧げられる。

このように、ハニーハンターたちの精神は「ただの採蜜業者」以上のものであり、自然・伝統・コミュニティ・自己という多層的な価値観が融合された、非常に豊かな文化体験でもある。

産地に出向き蜂蜜を仕入れるハニーハンター

2 番目の意味のハニーハンターとは、企業において蜂蜜の仕入れを行うバイヤー (buyer) のことである。新しい時代のビジネス型ハニーハンターといえる。日本をはじめ、世界中の生産地・養蜂家を訪ね、蜂蜜を仕入れる仕事をする人で、企業や店舗で取り扱う蜂蜜製品を買い付ける、仕入れや管理をする職種の人である。この場合は、「ハニー (蜂蜜)」+「ハンター (何かをねらってあさり歩く人)」の意味合いが強い。仕入れと品質管理にこだわる「蜂蜜のプロ」市川拓三郎が、その代表例としてあげられる。

◎市川拓三郎 (本名：市川拓)

京都市中京区所在の「株式会社金市商店」(1930 (昭和5) 年創業、創業者：市川末吉) の3代目社長・市川拓三郎 (本名：拓) は、自ら「ハニーハンター」を名乗っている1人として知られる。市川のプロフィールには、世界中にあるまだ見ぬ蜂蜜を求めて、1年間に食べる蜂蜜は300種類以上、移動距離は地球1.3周分に当たる約52,000kmを超える、とある。その精神は、産地・養蜂家を直接訪ねることで、蜂蜜がどのような環境で、どのように採られているかを、自らの目と舌で確かめる。

養蜂家との直接交渉を重視し、その場で即決買付けする理由は、信頼関係構築と品質確保のためである。そうして仕入れた「安心・安全で高

品質な蜂蜜」だけを顧客に届けるのだという強い信念に基づく。

市川は、1984（昭和59）年、京都府生まれ。関西大学在学中にバックパッカー（リュックサックを背負って個人で低予算の旅行をする人のこと）で世界中を旅し、卒業後は輸入食品の会社に勤める。2009（平成21）年に家業である金市商店に入社。蜂蜜の仕入れや製造責任者などを経て、2017（平成29）年に32歳で代表取締役社長に就任。国内外の養蜂家を訪ねて蜂蜜を仕入れ、「ハニーハンター」を名乗って発信活動にも取り組む。養蜂家訪問・仕入活動自体はそれ以前からおこなっていたのであるが、2020（令和2）年の春から「ハニーハンター」を公式に名乗り始めたとされている。

2025（令和7）年1月14日、自社ホームページの最新の「経営戦略」に「目指せ、蜂蜜界の『さかなクン』／ハニーハンターを名乗り、450種もの蜂蜜を集めた京都・老舗企業の社長とは」と題するインタビュー記事が載った。その中から2、3を紹介しておく。

——社長に就任して、最初は苦労されていたとのことでした。当時の状況を教えてください。

1年目は会社経営が思うように行かず、自分を責めていました。でも周りは、「よくやってるよ」という思いで見えてくれていて、「それほど悩まなくてもいいか」と吹っ切れてきました。

そこからですね、「失敗しても会社が潰れなければいい」というスタンスに変わったのは。私も含め、従業員が会社で損失を出したとしても、10万円や100万円であれば怖くなくなり、チャレンジできるようになりました。

小さい会社だからこそ、スピード感を持ってやりたい。ただ、相談や会議を減らして自分で勝手に決めることは良しとしませんでした。

よく会社の中で言うのは、「多数決では決めない。多数決をとった結果を見て私が決めます」。社長の役割は、会社を潰すような致命的な失敗を防ぐこと。それ以外は自由にやればいいし、社長就任や事業継承を重く考えないようにしています。

——社長就任後、金市商店の課題や強みは見えてきたのでしょうか。

一番の課題は、社内がバラバラだったことです。仲が悪くはないけれど、みんな好き勝手に動き、番頭さんのような人がいない。他の会社でよくある「年配の人にモノ言わないといけない」という苦労はなかった反面、人が育っていないので旗振りが必要でした。

強みだと思ったのは、京都で長くやってきた歴史です。商売を支えてきてくれた町の人や取引先の人たちの存在を感じ、続けていかなくてはいけないと強く思いました。

50年ほど前の少しダサいパッケージの商品をあえて残し、店の外観も、昔の写真を引っ張り出してさまざまな場面で使っています。古いお客さんに思い出してもらえし、会社の歴史があることの証明にもなります。

——養蜂家を訪ねて蜂蜜を仕入れる「ハニーハンター」としての発信もされています。始められた契機は。

2020（令和2）年に、蜂蜜を販売する直営ショップ「ミールミィ」本店をリニューアルし、会社のコンセプトを前に出すお店に大きく変えたことがきっかけです。

蜂蜜以外の商品をなくし、「シングルオリジンハニー」という新しい

コンセプトの商品を加えました。この蜂蜜がいつ、どこで取れたかをパッケージに表示し、商品に通し番号をつけたのです。

業界では、複数の養蜂家さんから買った蜂蜜を合わせて、例えば「アカシア」のような1つの商品にして品質をブレにくくすることがよくありますが、この商品は違います。

蜂蜜は、とれた時季や気候、どの花の蜜を集めたのかなどによって、味も香りも色も異なります。黒色に近く濃厚な味のものや、透明でさわやかな甘さのものまで。現在は450ほど通し番号があります。

こうした1つ1つの蜂蜜のストーリーや採取する苦労をお客さんに伝えたいと思い、「ハニーハンター市川拓三郎」の活動を始めました。目指すは、蜂蜜界の「さかなクン」です。

業界を知らない人が蜂蜜を語るケースは多いけれど、そうではなく、知識があって生産者を知っている人間として発信したかった。社会的な意味もあるし、会社のブランディングとしても重要です。蜂蜜の作り方のレクチャーや、子ども向けに蜂蜜絞り体験もしています。

リニューアルしたお店のコンセプトは「蜂蜜のテーマパーク」です。「蜂蜜を売って利益を上げるお店」ではなく、「蜂蜜を楽しんでもらうお店」にしたかった。そうすれば、きっとお客さんは買ってくれるはず。ディズニーランドでも、楽しければお土産もたくさん買うし、友達にも紹介しますよね。

蜂蜜の試食も工夫しました。私は内向的な性格で、服屋などでもお店の人に声をかけられるのが苦手。そういうお客さんも、自分でプッシュして試食できるように、何十種類もの蜂蜜をシャンプーボトルに入れています。

カフェで提供するハニートーストは蜂蜜かけ放題で、かける場面は店員から見えない。遠慮なく楽しんでほしいからです。「また来たい」と思ってもらえれば、記憶に残るし、きっと売り上げは増える。

利益は出さないと続かないけれど、人を騙したり悲しませたりしてお金を受け取ることをしません。従業員に対しても同じで、働く人が嫌な思いをしない会社を目指しています。

(以下、省略)

2024(令和6)年7月13日、NHKテレビ番組「所さん！事件ですよ」に社長のハニーハンター・市川拓三郎が出演した。過去歴を見ると、メディア対応にも忙しい。

当然ながら、「ハニーハンター」としての大活躍に対しては、批判や疑問も向けられるであろう。難しい課題として、品質管理、倫理的な問題、そして過剰宣伝に関するものがあげられるであろう。ある意味で、今までにない、時代の先端をいく仕事なのであろう。

新しいタイプのハニーハンター

2025(令和7)年7月末の時点で、緒方陽一や市川拓三郎に続くような日本人のハニーハンターは、他に具体的に現れていないようにも思われた。2人だけかと思いながら調べ続けると、もう1人、女性の米川^{あんじゅ}安寿も「ハニーハンター」と呼ばれていたことがインターネットの検索でわかった。

緒方陽一がカンボジアの森林を守るためにハニーハンターとして活動しているのに対して、米川安寿は、ネパール(及び京都)で「ハニー

ルネッサンス」(2011年設立、2018年閉鎖)を立ち上げ、蜂蜜を通じて環境保全に取り組んだ、新しいタイプのハニーハンターだった。「ネパール蜜猟型ハニーハンター」とでも言えようか。

「ハニールネッサンス」とは、ネパールで活動する社会企業であり、蜂蜜採取や植樹活動を通じて、ネパールの環境保全と経済的自立を支援する団体である。特に、蜂蜜を採取する際に重要な蜜源植物である「チウリ」の木の保全に力を入れた。

具体的には、①蜂蜜を採取するだけでなく、その過程で必要な蜜源植物を植えることで、森林を再生し、環境を保護する活動を行う。②ネパールは内陸国であり、経済的な課題を抱えている。蜂蜜ビジネスを軸に、現地の人々の生活向上と経済的自立を支援する。③ネパール人の父と日本人の母を持ち、幼少期から環境問題に関心を持っていた米川は、大学と大学院で開発経済学・環境学・政策学などを広く学び、グローバル社会を研究する中で、途上国の自然の豊かさが先進国の生活を支えていることを実感した。④ネパールでは、チウリの木が薪として使われたり、開墾によって伐採されたりする問題がある。チウリの木の保全と、それによって得られる蜂蜜を販売することで、環境保護と経済活動の両立を目指す。

京都市伏見に存在する「伏見いきいき市民活動センター」のホームページは、2016(平成28)年11月24日、「伏見エコライフプロジェクト」のインタビュー記事として「【UTTOCOな人×エコな人】『蜂蜜で花と緑を守る』ハニーハンター・米川安寿さん」を載せた。

抜粋になるが、インタビューの内容を次に示す。(年齢等はインタビ

ユー当時の時点のまま転載した)

◎米川安寿

美味しい蜂蜜を食べて自然保護に貢献する。生産者、消費者のどちらにとっても「おいしい」ビジネス。蜂蜜を通した自然保護に奮闘する米川安寿さん(29)にお話を伺った。

米川さんは現在、同志社大学大学院の博士課程に在籍している。2011(平成23)年に立ち上げたのが「ハニールネッサンス」。ネパールを中心とした各国の蜂蜜を販売するネットショップだ。

現地へ足を運び、仕入れる蜂蜜を決める。販売を通して生産地との関わりを深め、蜂蜜の生産に欠かせない花と緑の豊かな環境保全に繋がっている。

ネパール人の父親、日本人の母親を持つ米川さん。父親の仕事の都合で幼少期に海外での生活を経験し、地球の自然を身近に感じてきたため、環境保全に関わりたいという想いが自然と芽生えた。

政策学部に進学した米川さんはグローバル経済を学ぶうちに、「私たちの生活は途上国の豊かな自然に支えられている」と実感した。

ネパール、カンボジアなど貧しいと言われている国々へ足を運び、「支援すべき哀れな国」と言われていることに違和感を覚えた。途上国の良いところを伝えたいと考えるようになった。

自分にできることは何かと思案していた米川さん。たまたま訪れていたネパールで蜂蜜を口にした瞬間、そのおいしさに「これはすごい！」と思った。蜂蜜は豊かな自然がなければ生産できない。ネパールでは急激な人口増加によって開発が進み、森林の減少が問題になっている。ま

た、ハニールネッサンスの目玉商品である「チウリ」の樹も激減している。

蜂蜜の販売を促進すれば、生産地の人々が自然の必要性に気づき、植樹などの保全活動が進むのではないか。そこでネパールの蜂蜜専門店に通り詰め、蜂蜜を生産するチェパン民族を紹介してもらった。チェパン民族の1人の男性が2008（平成20）年に養蜂事業を始めた。彼は銀行からお金を借りて巣箱を購入し、村人たちに貸し出す。巣箱は1箱約1万5千円（民族の人々の年収半分程度に相当する）だが、多くの人々が販売収益によって1年以内に巣箱代を返済する。コーヒープランテーションのように、途上国の農業では質の高い生産物は販売に充てられ、生産者が消費できないことが多い。しかし、ネパールでは元々、日常的に蜂蜜を食しており、生産した蜂蜜は生産者自身も楽しめる。儲けるだけでなく、儲けで民族の生活を守ることを大事にしている。

米川さんは年に2度、蜂蜜の生産地を訪れる。車1台がかろうじて通れるほどの狭く険しい山道を進む。過去に一度、バスごと転落しかけた。命を失いかねない危険な旅路。それでも米川さんは意を決して現地へ足を運ぶ。米川さんは現地の人に植樹の重要性を説き続ける。しかし、自ら率先して植林を行うことはしない。蜂蜜ビジネスの維持発展のために、生産者が花と緑の保全を続けてくれる自然な仕組みを作りたいからだ。

初めは過去に失敗したからと植樹を渋っていた住民たちだったが、取り組みを始めて3年目の今年、現地の住民から「4千本の植樹をした」と初めて連絡があった。ついに米川さんの熱心な姿が現地の人々の心を動かした。

蜂蜜は現時点では主にネットショップで購入が可能だが、今後は販路を拡大していきたいと考える。また、「蜂蜜の食べ比べ」や「蜂蜜を使ったハンドクリーム作り」などのイベントを不定期で開催し、蜂蜜による自然保護の取り組みについて広めている。

「蜂蜜は必ず自然保護に繋がる」と語る米川さん。日々、頭の中は蜂蜜でいっぱいだ。

2018（平成30）年5月時点の他記事などによると、「米川安寿」のプロフィールは次のようになっている。

1985（昭和60）年、ネパール生まれ。中国を経て、オーストラリアに住んでいた小学生のころに環境問題を知って、関心を持つようになったとされる。10歳から母の母国・日本の京都に住み、日本の中学・高校で学んだ。同志社大学の政策学部では、主に開発経済学と環境学を学んだ。同志社大学大学院に進み、従来の経済理論に限界を感じていた時に、父と本人の母国・ネパールの蜂蜜に出会い、大学院博士課程在学中の2011年にネットショップ「ハニールネッサンス」を設立した。樹を植え、花を咲かせる「はなさか人間活動」に奔走した。

蜂蜜専門店ネットショップは、2015年に入り、法人「株式会社ハニールネッサンス」として登記された。

2015（平成27）年3月20日開催の「第3回京都女性起業家賞（アントレプレナー賞）」の授賞式で、「株式会社ハニールネッサンス・米川安寿」は、「日本経済新聞社京都支社賞」を受賞した。受賞のビジネスモデルは「はちみつによる花と緑の再生―ハニールネッサンス」であり、概要は「後発開発国の農村で生産された、良質のハチミツの輸入販売。

販売事業を通して生産地と連携し、生産地ネパールでの植樹など、養蜂の資源となる草花・樹木の環境保全を同時に実現する」とあった。

大学院博士後期3年の正規課程を修了した後も研究生とし在籍した米川は、2015（平成27）年4月1日から兵庫県神戸市所在の「公益財団法人ひょうご震災記念21世紀研究機構（Hem21）」の研究員として週2日勤務することになった（現在に至る。現在は主任研究員として活躍している）。

その直後の4月25日、ネパールで大震災とも言われる大地震が発生した。ネパールを故郷とする米川にとって、このタイミングで防災の研究所で働くことになったことは偶然とは思えなかった。これをきっかけに「森の保全は防災ともいえる」という思いで、自らの事業ハニールネッサンス活動を被災地の森の先住民の支援にもつなげた。

2016（平成28）年2月18日公開のクラウドファンディングサイトでは、記事タイトル「ネパールの貴重な自然、ハチミツが採れるチウリの樹を守りたい！（森のハニーハンター）」で、米川がネパール・マクワンプル県のシリング村で行う養蜂家との連携や、植樹・森林管理に関する取り組みについてのプロジェクト紹介をした。このように、2015・16年ごろを中心に、実践活動は本格化し、活発に行われていた。

その後、法人化された「株式会社ハニールネッサンス」は2018（平成30）年4月11日には登記閉鎖（清算完了）された。また、2019年3月21日（学位授与日）、米川安寿は博士（グローバル社会研究）の学位を取得した。2018年度同志社大学課程博士の論文は、「内発的发展論における主体に関する考察－ネパールでの実証研究から－」と題し、PDF版全218ページからなるものであった。

その後の活動について得られる情報は、他分野の他の研究活動であると判断されることから、2025（令和7）年7月時点での養蜂関連の活動・事業の継続性は低いとみられる。

このような活動歴から、米川安寿は、1番目にあげた型に含めてもよいハニーハンターともみなせるが、1番目・2番目にあげた意味合いの「ハニーハンター」とは違う新しいタイプの「ハニーハンター」とみなすほうが適切だとも考えられる。

米川の場合、先にあげた緒方陽一や市川拓三郎と比べて、活動実績が短期間である、公開資料が不足であるなどから、同等に比較しえない面もある。

なお、日本人で「ハニーハンター」と自称・他称される人が他にいないかを改めて検索調査してみたところ、他には確認できなかった。

日本人「ハニーハンター」2人の共通点・相違点

最後に、緒方陽一と市川拓三郎、2人の「ハニーハンター」としての活動について主な共通点と相違点を比較して示す。

（1）主な共通点

◎両者とも、「ハニー（蜂蜜）ハンター」という肩書（自称・他称）を公式に用いて、蜂蜜をただの食品としてではなく、探究・買付・ストーリー化されたものとして扱っている。

◎両者とも、蜜源（花、場所、時期）や環境（原生林、養蜂家、採蜜現場）にこだわりを持ち、「どこで、どう採られたか」を重視している。

◎両者とも、自らが「現地へ行く、現場を確認する」という能動的なス

タイルを持っている。

◎両者とも、ストーリー性・ブランド化が強い。ただ蜂蜜を売るだけでなく、採取地やミツバチの種類、蜂蜜の熟成など付加価値を付けて商品化している。

(2) 主な相違点

◎主な採取地域・蜜源のスタイル

○緒方……海外・原生林。／野生ミツバチ＝カンボジアのジャングル、野生の東洋オオミツバチ。／原生林の中での採蜜・熟成。

○市川……国内＋海外。／養蜂家との連携＝日本全国（20都道府県以上）＋海外20か国以上から蜜を仕入れ、養蜂家との直接取引。

◎ビジネス規模・展開形態

○緒方……高付加価値・限定本数の商品が中心で、「野生蜂蜜」「熟成」という付加価値重視。

○市川……組織（金市商店）として展開し、大量仕入れ＋量販＋多彩な商品ライン（用途別蜂蜜・蜂蜜酒など）を展開。

◎自称・ブランディングの明確さ

○緒方……ハニーハンター、蜂蜜ハンターという称号を用いているが、企業名・量販という文脈ではやや個人ブランド寄り。

○市川……「ハニーハンター市川拓三郎」という肩書きを企業が公式に掲げており、自称・他称ともに明確。

◎採蜜／買付スタイルのユニークさ

○緒方……採取そのものを「冒険・探検・ハント」という言葉で捉えており、野生・原生林・長期熟成などを特徴とする。

○市川……自らトラックを運転して養蜂家を巡る。

ミツバチと共に百余年

私は今（今の時点は2025（令和7）年10月）、長野県須坂市所在のミツバチ産品販売店の事業に注目している。

同市中町（の銀座通り？）の一角に、2階建ての瓦屋根で白壁、玄関上二階の格子窓を覆いつくすような「はちみつ家」と刻まれた老樹板の大看板、古めかしいようで清楚な民家風の大きな家屋がある。

昔は軒に紅白提灯が下がり、入口には「信州須坂／蜂蜜」のノレン。ショーウィンドウには、須坂特産品の純粋はちみつ、ローヤルゼリー、蜂の子、プロポリス、……が並び、キャッチフレーズ「太陽と花とミツバチとともに」の文字も窓ガラスに。

実は、老舗「（有）鈴木養蜂場」の店構えを紹介したのだが、良く知る人からは「下手な情景描写だ。やめとけ」と一蹴されるかもしれない。

それではと、写真による紹介に変えた。

（右写真）

歴史的発展を概観してみたい。信州須坂の「はちみつ家」の創業者は鈴木袈裟美である。大正10（1921）



年、長野県埴科郡の松代から約50群のミツバチの巣箱を持ち込んで養蜂を始めたとされる。(のちの会社概要では、「大正12年袈裟末が松代より、ミツバチ20群を持参、当鈴木家へ婿入り、それが当場の創業」と改められた。その後に「時は大正時代中期、当場の創業者鈴木袈裟美さんが、松代から約50群のミツバチの巣箱を、ここ須坂に持ち込んで養蜂を始めたのが淵源だということです」と改められた)

初代・鈴木袈裟美の名を冠した「袈裟美蜂蜜」という商品も販売されている。西洋ミツバチ飼育による日本の近代養蜂の民間起業は大正初期とも中期ともされているから、現在の「有限会社・鈴木養蜂場」の前身は、全国的にみてもかなり早い時期に創業した老舗とみなして異存はなかろう。

このところ同社は、「ミツバチと共に90年」というコンセプトの企業理念を掲げて、自社の説明に努めている。だが、この文言は控え目過ぎると思う。

創業の年からは、堂々と「ミツバチと共に100年（1世紀）」と謳うべきであろう。余計なお節介だが、今後数年は「ミツバチと共に100余年」とするよう提案したい。(こう寄稿したら、2022（令和4）年4月から、1923（大正12）年創業と定め、「ミツバチと共に100年！」を掲げるようになった)

事実、同社は養蜂業一筋に歩み続けてきた。2代目現会長の鈴木勝夫は口癖で「うちは企業じゃないよ、家業だよ（人の心が見える商売をしたい）」と言ってきたそうだ。

そして、その理念を受け継ぐ3代目現社長の鈴木健太郎は「確たる農業を足場とし、最も信頼できる地道な活動（養蜂農家だからこそできる

安心の完熟蜜の提供）をブレないです」と、ポリシーを貫く。

このところ、蜜源花不足とミツバチ減少による国産蜜の自給率の低下も、高品質蜜の高値も、常態化したままである。対策は、安全安心な蜜源植物と健康な蜂群の確保である。

そこで、同社は行動する。まず、蜜源豊富な中国の大地に自ら乗り込んで、長年培った養蜂技術を丁寧に伝授した。また、蜜源確保のために、近郊の遊休荒廃農地をレンゲの里に復活させる「ミツバチ応援プロジェクト」も実践している。

実直な姿勢に、消費者本位の「自然な美味しさ」追求継続への期待が高まる。

中国産蜂蜜を見直す

2021（令和3）年1月中旬、『蜂蜜エッセイ』の応募作品を読んでいて、作品「蜂蜜—もう少し安ければ」に出合った。

「蜂蜜を楽しみたく、スーパーへ行くが、正直、中国産は買う気がしない。自然のものだから、空気の汚れなどを思えば、なにが入っているか不安がある。国産のものを楽しみたいと思っている。が、いささか高い。だから、蜂蜜を買うのも時々となる」

投稿者の言わんとすること、心情的には同感である。

確かに国産蜂蜜は高額である。ただ、大気の汚れの影響は、中国産蜂蜜に限らず、他の国の産品についても言えることだろう。

国内消費の約95%は輸入品で、輸入量の多い国の第1位は中国で、全体の約68%を占めている。

とは言え、中国産の輸入単価が極端に安いというわけではない。安価

なほうではあるが、安いほうから国別で第3位（当時）である。

投稿を読んで、思いが及んだ。

「こんな例もありますよ」と、少しお節介めいたことを申し上げたくな
った。中国産蜂蜜を購入した私の体験談である。

「本物の蜂蜜（中国産と国産のブレンド）を、国産自家製だけの蜂蜜の
半値以下で買える商品をお教えしよう！」と。

まず、理解を深めていただくために、選んだ製品の歴史的な経緯の話
を少し紹介する。

長野県須坂市にある「有限会社・鈴木養蜂場」の取り組みである。（他
にも同類の事例はいくつもある）

ギリ貧状態の国産蜂蜜事情と家業の前途を考えて、中国産に着目し、
いち早く現地に出向き打開に動いた養蜂場があった。方向づけたのは
45年以上も前だったという。

視察団が自分の目で確かめてわかったのは、というよりも驚いたの
は、日本とは比較にならないほど広大でクリーンな大自然の中で、非常
に良質な蜂蜜が採れるということだった。

だが、大きな課題もあった。当時の中国の養蜂界には、コストを低く
抑えるために、糖度の低い段階で採蜜し、加熱濃縮する製法が普及して
いた。その製法が、本来の美味しさが損なわれた色の濃い蜂蜜を生産し、
安価と同時に悪いイメージを招いていた。

しかし、天然で集められる花蜜自体は良質。熟成採蜜法へ切り替えれ
ば、国内自家生産の蜂蜜と遜色がなく仕上がり、ブレンドも可能だと判
断された。

つまり、1921（大正10）年から始め、3代にわたり完成度を高めた

伝統の自家採取オリジナルの養蜂技術を中国の現地に持ち込めば、本来の風味や色や品質を損なわない非加熱完熟蜂蜜を生産し得ると確信したのである。

中国にも生産の拠点を持つ本格的挑戦を開始した。何年もかけ、何度も交渉に当たり、提携した現地養蜂家に技術指導を行い、理解と習得を徹底してもらった。

その結果、遼寧省、山東省などに拠点を確保し、とうとう10数年ほど前には、国内自家方式と同質の生産体制を確立した。

ミツバチの飼育管理から製品の出荷まで、すべて日本産と同様製法の蜂蜜（自然が豊かな分、むしろ美味しいくらいのもの）を輸入し、国内での販売を見事に実現した。

ここでは略記するが、本物性を確認できる工程と検査体制を詳細に公表している。（参照：「鈴木養蜂場」のホームページ）

特徴的なのは、蜂蜜を中国国内で瓶詰めにしないで、輸入時の厳しい検査を受けるために、あえて「原材料」としてドラム缶によるバルクで輸入し、日本国内の自社工場で最終検査のチェックをしてから瓶詰め商品にしている点である。

2019（令和元）年12月10日、長野県須坂市地域おこし協力隊の宮島麻悠子を書いたレポートや同養蜂場の発信資料情報などによって、私は品質と安全性の理解を深めた。

繰り返すが、鈴木養蜂場では、中国産の蜂蜜も扱っているが、日本の技術を導入し、現地で直接採蜜・管理することで、国内産と同様の品質を確保していると説明している。

◎鈴木養蜂場の中国産蜂蜜への取り組み

○技術導入……鈴木養蜂場は、長年の経験とノウハウを活かし、中国の現地で養蜂を指導している。

○現地採蜜……中国の養蜂家と協力し、鈴木式養蜂に基づいた採蜜を行っている。

○品質管理……日本の基準に沿った品質管理を徹底し、国内産蜂蜜と同等の品質を確保している。

○定期的な現地訪問……定期的に現地を訪問し、養蜂家との信頼関係を築きながら、品質管理を行っている。

◎一般的な中国産蜂蜜との違い

○品質管理……一般的な中国産蜂蜜は、日本で充填・販売される際に品質管理が行われるが、鈴木養蜂場では、現地での採蜜段階から品質管理を徹底している。

○安全性……鈴木養蜂場では、安全性に配慮し、現地での採蜜から日本への輸入まで、一貫した管理体制を構築している。

○味・風味……鈴木式養蜂により、国内産蜂蜜と遜色のない味、色、風味を実現している。

「れんげの里づくりを進める会」の設立

一方、同養蜂場は、国内でも蜜源花復活の活動に励んでいる。先代社長の鈴木勝男は、2009（平成21）年8月、同市で「れんげの里づくりを進める会」の設立を提唱し、以降、遊休荒廃農地の解消を主に「花と緑のまちづくり」運動を展開した。

また、2015（平成27）年2月からは、現社長の鈴木健太郎が率先して須坂市内の休耕農地を有効活用し、蜜源のレンゲ畑に再生するプロ

ジェクトにも取り組んだ。

これらの話題の補足説明をしておきたい。

まず、「れんげの里づくりを進める会」の説明から示す。長野県須高地域にタブロイド判（20～24ページ）で毎週土曜発行している『須坂新聞』がある。同会のことは、2009（平成21）年8月29日と同年9月21日の同紙の記事で紹介された。次の内容は、後者の記事「【鈴木養蜂場】レンゲの種を配布」による。

須坂市中町の鈴木養蜂場（鈴木勝男社長、71歳）は、蜂蜜源の増殖と荒廃農地の解消、新たな観光資源の開発を目指して、地元住民らにレンゲの種を無料で配っている。

鈴木さんの呼び掛けに、東地区の有志は「れんげの里づくりを進める会」（代表＝宮本勇雄さん・大日向町）を設立。このほど約10haの農地に種をまいた。そのほか数十軒の農家などが参加するなど輪は広がっている。

緑肥にもなるレンゲは昭和30年代頃まで、地元の水田で広く見られ、赤紫色の花は春の風物詩として親しまれた。「60歳以上の人から郷愁を誘う原風景を取り戻し、孫たちに残してほしいとの声をよく聞きます」と鈴木さん。

今秋は須高を対象に約1tの種を用意、配布している。大量にまく人には中型トラクターを無料で貸し出す。

「蜜源はレンゲか菜の花」と言われ、レンゲ蜂蜜は高品質として珍重される。だが化学肥料の影響で減少。新たな蜜源とされたニセアカシアも外来植物として伐採されている。蜂蜜消費量の約95%が中国など外国

産で、良質の国産蜂蜜作りが困難になっている。

鈴木さんは「市内には約150haの荒廃農地があります。地域をレンゲの里として観光資源にする。また、不足している蜂蜜源の増殖につなげていきたい。共に栄える10年計画のプロジェクトです。まさに第2のライフワークです」と話している。

れんげの里づくりは、すでに2年前から同市の日向町などの有志で始められていた。2009（平成21）年8月末に、品種や管理法などを学び、花づくりの輪を広げるために「れんげの里づくりを進める会」が正式に設立されたのであった。

15年後の2025（令和7）年5月になって、その後の会活動の経過と現状を知ろうと、須坂市役所の関連部局に問い合わせたところ、当時のこの会の活動の推進人物の死亡などもあって、活動は衰退し停止したと知った。経過もわからないということだった。念のため、『須坂新聞』に照会したところ、その後、同紙の記事として、同会のことを取り上げたものはないという回答だった。

同会の活動の追跡はこれまでと打ち切り、「休耕農地を有効活用し、蜜源のレンゲ畑に再生するプロジェクト」の話題へ切り替えた。

「みつばち応援プロジェクト」に切り替わる

「鈴木養蜂場」のブログのテーマ「みつばち応援プロジェクト」と称するものである。初回記事は2015（平成27）年2月26日に掲載された。この日が同プロジェクトの立ち上げ日で、同養蜂場が独自に始めた企画だった。ここで、はたと気づいた。

このことは、2009（平成21）年8月末日に設立された「れんげの里づくりを進める会」が、10年計画のプロジェクトを成し遂げる前に、半分の5年で活動を休止していたことを意味する、と。

2015（平成27）年2月26日のブログには、次のように書かれていた。「今年は、須坂市の井上地区に、6年間休遊地となっていた田んぼを借りて、半年をかけて5回～6回耕し、9月にはレンゲの種まきをする予定です。敷地の広さは約30アール。地元の農家さんのご協力を得て、いよいよ本年度の須坂にレンゲを咲かせるプロジェクトの始まりです！ 1回目の耕しは未定ですが、草が生えてきた頃を考えています。種まきは秋ですが、来年にはレンゲが咲き、そこで採蜜をする予定です。正面の山には桜がありますから、春は花々が咲き香る美しい光景を拝めるかもしれません！（笑）」

経過は省略して、2025（令和7）年5月16日現在、このテーマでの（26回目の掲載となる）最新のブログは2023（令和5）年5月8日で、次のように掲載された。

「『日本にレンゲの花が咲き香る原風景を取り戻そう！』という壮大な夢を抱いて8年前（2015年）にスタートした“みつばち応援プロジェクト”。当場のSDGsの一環としても取り組んでいます。昨年はまったく花が咲かず国産のレンゲ蜂蜜は全滅でした（涙）。美しい言葉を並べるのは簡単ですが、現実はそんなに甘くありません。いったいいつになったら成功するのだろうか？とやきもきしていましたが、今年はようやくお見せできるほど花が咲きました！」

それから丸2年間、ブログは続いているのに、このテーマに関しては寄稿の掲載がなかったことになる。それは何を意味するか。

北海道での越冬養蜂

2021（令和3）年4月上旬、全国の多くの新聞やテレビなどで「共同通信」が4月4日配信した次の小記事が報道された。

「越冬ミツバチ16万匹飛び立つ／北海道美深町」

北海道美深町で4日、レンガ倉庫の巣箱で越冬したミツバチ約16万匹が、待ち焦がれた春を喜ぶかのように、勢いよく飛び立った。寒さが厳しい北海道での越冬はハチが死んでしまうリスクが高く、取り組む養蜂家は珍しいという。

鹿児島県南九州市の移動養蜂家「西垂水養蜂園」が、トラックでレンガ倉庫から約200の巣箱を屋外の作業場に運搬。巣箱の入り口を開けると、ハチたちが元気よく飛び出した。同園の西垂水栄太（26）は「質の良いハチが生き残ってくれて安心した。たくさん蜜を集めたい」と力を込めた。

私は、わかるようでわからない新聞の状況説明に戸惑い、同一と思われる動画発信ののを見てみた。次の内容の部分が省かれて記事にされたいと判明し納得した。

移動養蜂家は日本各地を花の最盛期に合わせて旅しながら蜜を集めている。冬は暖かい本州などでハチを越冬させるのが一般的だが、同園

はハチを運ぶ費用を抑えようと約10年前から道内での越冬に挑戦した。失敗が続いたが、3年前から巣箱を比較的暖かいレンガ倉庫に保管することで成功率が高まった。巣箱は夏に作業場から町郊外の森林に移し本格的に採蜜を始める。

「そういえば」と、かすかな記憶を頼りに調べてみると、西垂水栄太のことは昨年新聞にも載っていた。これも共同通信の配信話題でいくつかの新聞に掲載された。東京新聞（2020（令和2）年9月28日）の記事では「家族の旅先、決めるのはハチ／移動養蜂一家、季節ごと蜜を求め列島縦断」の見出しの下に、詳しくレポートされた。

西垂水養蜂園と美深町との関係は50年以上に及ぶ。記事から関連情報の一部を飛び飛びの抜粋で少し紹介してみたい。

一家は、例年は鹿児島県を4月に出発し、各地の拠点で採蜜し、花の最盛期に合わせて北上するのだが、新型コロナウイルス感染拡大もあり、昨年は、栄太ら3人だけで約400万匹の蜂を大型トラックに積んで直接美深町へ入った。

ハチは暑さに弱く、風を送るために、ほぼ寝ないで2日以上かけ走り続けた。

栄太には「美深の蜂蜜を牛乳や野菜に並ぶ北海道のブランド品にしたい」と、強い思い入れがある。

西垂水栄太には力が入る訳がある。毎年、開花期の夏、家族と共に滞在していたが、小学3～5年の時、少子化で閉校の危機に直面した美深町内の小学校から在籍児童確保のため頼まれて、山村留学の形で長期滞在した体験があったからだ。

そして、2020（令和2）の7月下旬、美深町郊外の森林では、長方

形の巣箱が並び、ハチが羽音を響かせながら、軽やかに飛び交った。栄太は「ハチが脂ぎったようにテカテカしているのが健康状態が良い証拠。巣に蜜が入っている目安にもなる」と、箱から蜜がたっぷりと詰まった板を取り出しながら笑顔で話した。

さて、美深町は北海道の中央部上川地方の北部に位置し、面積のほとんどが森林で、農業と林業を基幹産業に発展してきた。内陸性の気候で寒暖の差が激しく、冬は日本屈指の豪雪と酷寒の地帯である。

わざわざ鹿児島県南九州市の移動養蜂家がミツバチを越冬させてまでして養蜂を行うには、北海道北部のこの森林地帯にはよほど魅力的な点があるに違いない。

西垂水養蜂園のオンラインショップによると、同園の北海道関係商品は美深・紋別産の「百花蜂蜜」と美深産の「ソバ蜂蜜」の2種類。

百花蜂蜜は、アザミ、クローバー、シナなどの天然ブレンドの濃厚な蜜（6～8月）である。ソバ蜂蜜（単花蜜）は、蕎麦そばの花の個性的な香りの蜜（8～9月）である。

また、オンライン情報ニュース『ワンストーリー』が2019（令和元）年7月、美深町にある3室だけの小さなホテル『青い星通信社』を紹介した記事の中に、オーナーの星野智之がこの地に移り住んで「特に心を打たれた食材」として、2つをあげていた。

その1つが西垂水養蜂園の蜂蜜。同記事には、栄太の談話も紹介されていた。「道北が養蜂に適している理由の第一は、なんといってもこの広さです。これだけの森林があって、これだけの草原がある。蜜を生み出す花をつける樹や草が、ここではともかく勢いがあるって元気なんです。蜂蜜というのは、人が創り出すものではありません。あくまでも八

ちたちが自然の中から集めてくるもの。だからハチたちが自由に飛び回れて、森林や草原に恵まれた広大な大地は、養蜂にとって貴重なんです」と言っていた。

西垂水一家にとって、美深町はいわば「約束の地」。だから彼らは、毎年、本物の蜂蜜を求めてやってきていた。

北海道でのミツバチの越冬は珍しい

ところで、「越冬ミツバチ16万匹飛び立つ／北海道美深町」という写真付きの小記事が、北海道から沖縄までほとんどの新聞に一斉に掲載されたのはなぜか。

季節外れの物珍しい話題性に富んでいたからであろうが、常識を超えた意外性もあったであろう。

寒さの厳しい北海道にあっても、個人愛好家や小規模業者が少数の蜂群を越冬させる技法は昔から工夫され、伝承もなされてきたようである。（「蜂蜜エッセイ」の掲載稿「トツちゃんだけの蜂蜜飴」「縁は異なもの味なもの（正・続）」から想像できるように、私の叔父は約80数年前に北海道の空知地方で、これを実現させていた）

しかし、養蜂業を本業として、多数の蜂群を扱う業者の場合、寒さに弱く繊細な性質のミツバチを自然条件の厳しさから守るには大変な難しさを伴うなどの理由で、伝統的に北海道での蜂群の越冬は行われてこなかった。

ごく少数いる北海道在住の養蜂業者の場合であっても、採蜜期を終えた秋季以降になると、冬季に温かい九州などの南西地方へ蜂群を移送して越冬させてきた。

いずれにせよ、南西から北東に長く、季節の違いが顕著な日本列島においては、北海道では冬季の寒冷に加えて蜜源植物の開花時期が本州よりも明らかに遅いため、春季には北上しながら本州で採蜜を実施し、その後に北海道に移る「転地養蜂」が経済的で合理的と考えられたためと思われる。

移送にかかる諸経費を勘案しても、経営性（採算性）が高いと判断されるからである。

結果として、寒冷地越冬養蜂は研究も実践も皆無に近い現状にある。

自らも越冬飼育を試みた静岡理工科大学教授の宮地竜郎は、その報告（産業環境管理協会機関誌『環境管理技術』第34巻第4号、2016年）で次のように述べている。

「我国の養蜂業者間では寒冷地での越冬に関するノーハウの蓄積はほとんど認められず、西洋ミツバチの北海道での越冬に関する学術文献は、昭和21（1946）年に発行された札幌市真駒内の地下室での越冬試験に関するもののみと思われる」（越冬試験は「関口喜一著『寒地養蜂』北農叢書7、柏葉書院、1946年刊行」に収載）

このよう見てくると、報道された西垂水養蜂園のミツバチ越冬への挑戦（失敗と成功）は大変貴重な実践で、改めてニュース性の高い話題だったことがわかる。

再度、最初の新聞報道に戻って読み返してみると、なぜ蜂群の全滅の危険性を伴うような越冬を北海道で試みるのか、その理由が書かれていない。

動画によって得た補充内容で「ハチを運ぶ費用を抑えようと」していることがわかったのだが、これだけがその理由なら、前に述べた、道内

の養蜂業者も道内で越冬させない理由と矛盾する。

それに、以前に述べていない理由もまだある。

それは、別書で「ミツバチはどこで用を足す？」で述べるように、「道内での蜂群の越冬が困難な理由として、凍死よりも外気温が低いため、2月下旬～3月上旬に通常行われる『飛行脱糞』ができないが故に死滅するものと考えられている」。

外に出て、空中脱糞ができないことが理由なら、ミツバチの生理的習性上、寒冷地は決定的に越冬困難性がある、となる。北海道での越冬はハードルがいっそう高くなる。

いよいよ、別な「ぜひ北海道で越冬を」という理由がなければならぬと思われる。

親子3代が現役で養蜂を営むのが珍しい事例ということで、2020（令和2）年9月22日号の『週刊女性』にも西垂水養蜂園一家の記事が載っていた。

「人間ドキュメント／親子3代現役の転地養蜂一家、5歳から働く3代目『蜂屋の息子』の初めての試練」と題する長編記事で、主に3代目の栄太の生き方に焦点を当てたものだった。

この記事には、北海道でのミツバチの越冬についてはふれられていなかったが、「うまいハチミツを採るために地理的特性を生かした転地養蜂だが、業界を取り巻く状況は厳しい。高齢化や農村部の乱開発による蜜源の減少、輸送コストの高騰。輸送時にSAやフェリーでほかの利用客がハチに過敏になっている問題もある」とあった。

これらのほかに、地球温暖化の影響と思われる季節の変化も顕著で、北海道の夏季が長期間化しているから、北上の途中で立ち寄りながら

の採蜜では、ミツバチに過重負担を強いることに加えて、良質な花蜜を採る期間の一部を失うことにもなりかねない。

諸条件を加味すると、一定数の蜂群の養蜂は北海道だけに限定し、夏の早期から秋まで採蜜する狭い範囲の転地養蜂に切り替える方が賢明とも考えられる。

結局、遠距離移送も回避できる北海道での越冬に挑戦する方策に向かうことになる。

宮地竜郎の最新の論文「北海道における西洋ミツバチの越冬を伴う定置養蜂技術の開発」(HACCPメールマガジン、136号、2020年1月)には、道内養蜂家からの伝聞と断ったうえで、「道内で西洋ミツバチの越冬を伴う通年飼育を実施している養蜂家は認められるが、わずかであり、その飼育規模は非常に小さい」、また「道内での越冬成功率は5割程度」とある。

寒冷地での養蜂ミツバチの越冬形態として考えられるのは、大別して次の4つであろう。

- ① 夏季と同様にそのまま巣箱を屋外に置く方法。
- ② 屋外に置くが、風雪等に配慮した場所を選び、防寒対策として巣箱の周囲を個別に通気性のあるカバー等で覆う方法。
- ③ 巣箱を屋内に入れ、納屋や物置等で室温等に配慮しながら保管する方法。
- ④ レンガ倉庫など、風雪雨や直射日光を避けて、全体的に温度、湿度、換気等のある程度操作的に管理できるように造られた大型の本格的な保管庫。

いずれも、まだ試行錯誤的な段階にとどまる。長期に密閉に近い状態

に置かれるので、かなりの率の死滅は避けられず、蜂群の中の生命力の強い個体だけが生き残る。

①は降雪寒冷地の北海道では全く不向きな形態で、寒さに弱い蜂群は死滅してしまう。

②③は、個人やグループの愛好家等が少数の巣箱を北海道で越冬させる場合に多く採用され、成功実績も上がっている。

④は養蜂業を本格的に営み、多数の巣箱を北海道で越冬させる場合に、比較的高い安全性を確保できるからこそ行える方法で、まだ試験的に行われ始めた段階にある。

西垂水養蜂園の試行例は④に当たる。前年4月に一行が美深町に運び込んだ蜂群は約400万匹だった。この年の4月、越冬して元気に飛び立ったのは約16万匹とある。

越冬の試みに成功した喜びの記事であるところから、運び込んだと同程度の数で採蜜に当たっていたとしても、昨秋、美深に残して越冬させたのは、その一部、せいぜい20万～30万匹程度と推測される。

写真からの想像にすぎないが、たぶん（農作物保管用として造られた？）高い大型のレンガ倉庫1か所内で、約200の巣箱は、一定の余裕間隔を空けながら平面に2個対に並べ置く形で、庫内全体の温度や湿度、換気にも配慮され、暗くした静かな環境で、随時、状態観察が可能な状況の下で管理されたと思われる。

②の代表的越冬参考例には、札幌市のNPO法人「さっぱち（サッポロ・ミツバチ・プロジェクト）」の屋外地面上での越冬方法が挙げられる。

③の代表的越冬参考例には、市立札幌大通高校の「ミツバチプロジェ

クト」の校舎屋内保管室での越冬方法があげられる。

実際の詳しい内容は、それぞれのホームページなどに載せられているので、ここでは省略するが、いずれも、札幌市での屋上養蜂の場合で、越冬の実践経験回数（年数）が多く、試行錯誤の実践研究を重ねながら、工夫を積み上げて成果をあげている。

また、前にあげた宮地の最新の論文もウェブサイトで読むことができ、宮地が網走市でおこなった地上養蜂例の場合で、越冬試験を地上木造物置内で実施した③→②の例の詳細を知ることができる。

なお、前に指摘した「空中脱糞ができないこと」は、意外にも実際には悲観するほどの障害にならないことが判明した。

与えられる越冬用の代用工サの消化も関係していると思われるが、早春の気象の温暖化もあって、越冬終了時期（屋内から屋外へ巣箱を移設する時期）を少し早めることで、死滅を回避できることがわかった。

流氷の接岸する網走市でおこなった宮地らの越冬試験では、3月20日の屋外移設後に盛んな飛行脱糞が観察されたと報告されている。

ミツバチの越冬は、冬眠ではなく、蜂球になって羽ばたきで熱を出し温め合いながら寒さを凌ぐのであり、個体数の少ない小蜂球の弱小群では耐えられないと言われている。

別の言い方をすれば、限られた食料を節約しながら生き抜くため、越冬中、女王バチは産卵をやめ、働きバチは幼虫とサナギがいない状態で体温を低く保ち、消費エネルギーを少なくして、春を（花が咲くのを）待つとされる。

働きバチの成虫は、夏季には30日ほどしか生きられないが、越冬中は省エネしほぼ活動しないことで、5倍の150日ほども生き抜く臨機応

変の適応力を備えている。驚異の延命技で、寒冷地の越冬も乗り越えて、生命力のすごさをわれわれに見せつける。

美深町での越冬の場合、約200個の巣箱で約16万匹が元気に春を迎えたというから、単純計算で1箱平均は800個体。正に小蜂球の弱小群になっても耐え抜いたわけである。常識は、どんどん書き換えられているが、ごく最近の例はどうであろうか。

北海道での越冬の最近の状況

以上の物語ふうの話は、数年前のものであった。2025（令和7）年も11月、まさに冬を迎える時期がやってきた。「養蜂ミツバチの寒地（北海道）越冬は、九州などの温暖地への移動が今日でも主流か」との設問に答える形で、まとめ的に整理し、留意点を加えて、この章の終わりとしたい。

現在でも、北海道などの寒冷地で養蜂を行う多くの業者は、ミツバチを九州などの温暖な地域へ移動させて越冬させる「移動養蜂（転地養蜂）」を主流としている。ただし、近年の技術開発により、北海道内で越冬させる「定置養蜂（定地養蜂）」も行われるようになった。その現状は次のとおりである。

（1）移動養蜂（転地養蜂）

◎夏の北海道での採蜜……全国を移動する大規模な養蜂業者にとって、北海道は夏の主要な蜜源地域である。

◎冬の九州などへの移動……秋の終わりごろ、ミツバチは専用のトラックで長距離輸送され、温暖な九州方や千葉県南房総などで冬を越す。

◎ リスクの分散……温暖な地域で冬を越させることで、寒さによる群れの消耗や全滅のリスクを減らすことができる。

(2) 定置養蜂（定地養蜂）

◎ 北海道での越冬……近年では、北海道の厳しい寒さに耐えられるよう、断熱性の高い既存の倉庫や、越冬専用の囲い大箱・施設を利用するなどして、北海道内で越冬させる技術も研究・開発されている。

◎ 屋外地面での越冬（札幌市）……2019年以前から、札幌市内のNPO法人「さっぱち」が、屋外で巣箱を冬囲いして越冬させる方法に取り組んだ。2021年には、初めて全ての群の越冬に成功した。

◎ 断熱効果巣箱での越冬（帯広市）……2019年11月、帯広畜産大学の養蜂サークルが、巣箱を保温シートとアルミマットで隙間無く包み、気泡緩衝材で全体を覆って屋外で越冬させた。

◎ レンガ倉庫内での越冬（美深町）……2021年4月、レンガ造りの倉庫内で越冬させたミツバチが、無事に春を迎えた。何年も越冬に挑戦し、比較的暖かい倉庫を利用することで成功率を高めた。

◎ 校舎内での越冬（札幌市）……市立札幌大通高校の「ミツバチプロジェクト」では、校舎内施設の保管室でミツバチを越冬させている。

◎ 屋外施設での越冬（伊達市）……2022年の冬には、伊達市で屋外に建っている施設内の床下でミツバチの越冬に初めて成功した。

このように、定置養蜂は、移動にかかる労力やコストはかからないが、越冬の成功率を高めるための専門的な技術と設備が必要である。

(3) 移動養蜂と定置養蜂の選択

どちらの方式を選択するかは、養蜂家の規模や経営方針、ミツバチの種類（西洋ミツバチか日本ミツバチか）、技術力などによって異なる。

◎ 大規模な業者……全国規模で活動し、多種のハチミツを生産するような業者は、現在も移動養蜂が主流である。

◎ 地域密着の業者や小規模な養蜂家……北海道に定着し、定置養蜂で地域の特色ある蜂蜜生産を行うケースも見られる。

(4) 寒地越冬のポイント

寒冷地でのミツバチ越冬では、以下のような工夫が必要である。

◎ 場所の選定……風の当たらない日当たりの良い場所や、比較的温暖な倉庫などを利用する。

◎ 保温と断熱……巣箱を断熱材（発泡スチロール、保温シートなど）で包み、外気の影響を最小限に抑える。

◎ 保湿と換気……巣箱内の湿気はカビの原因となるため、通気性を確保し、温度を保ちつつ、湿気を適切に逃がすことが重要である。

◎ 積雪の利用……雪は断熱材として機能するため、積雪量を活用して巣箱を保温する方法がある。

◎ 十分な貯蜜……ミツバチは冬眠せず、巣の中で貯蔵した蜜を食べて活動する。このため、越冬前に十分な貯蜜が不可欠である。晩秋の給餌も重要である。

◎ ダニ対策……越冬前に、ミツバチの寿命を縮めるヘギイタダニなどの対策を徹底しておく必要がある。

なお、寒冷地におけるミツバチの越冬は、温暖な地域での越冬よりもリスクが高いため、慎重な準備と管理が不可欠である。

先達を訪ね養蜂を知る

創設10周年を迎えた「さっぱち」

2019（令和元）年12月17日、北海道新聞の「さっぽろ10区版」に「ビルで養蜂／健闘10年／さっぱちが感謝祭」が載った。「さっぱち」とは「特定非営利活動（NPO）法人サッポロ・ミツバチ・プロジェクト」の通称である。

札幌市に住む幅広い年代と多様な職種の人たちが会員になり、都心のビルの屋上でミツバチを飼い、養蜂活動を通じて環境問題や食育、コミュニティ作りなどに取り組む団体。

記事は、創立10周年を迎え、会員一同がミツバチへの感謝を込めて、神社で玉串拝礼を行い、1年の活動を締めくくったという内容だった。

会の歴史をさかのぼって調べてみると、興味深い経緯にたどり着いた。その1つは、カラスを追い払う用心棒としてミツバチに注目したことである。

きっかけは、北海道庁赤レンガ庁舎前にある並木とその周辺を整備して、市民の憩いの場を作ろうとの企画だった。

だが、問題が指摘された。そびえる古木の並木をねぐらにしている多数のカラスの存在だ。広場を歩き回り、食べ物をあさるイメージも悪かったが、フン害もひどかった。

当時、企画の立案をマネジメントしていた会社の社員で、最初の段

階からコーディネーターを務めていた青年がいた。現在「さっぱち」の理事長を務める酒井秀治である。

その酒井が2009（平成21）年、論議の過程で「街中でミツバチを飼うのはどうだろう」と言い出した。提案は、カラス対策にはミツバチの飼育が効果的との情報を得たからだった。

情報源は、ミツバチプロジェクトの先駆けとして知られる「銀座ミツバチプロジェクト（銀ぱち）」の活動を伝える新聞のコラム記事だったらしい。

2006（平成18）年3月発足の「銀ぱち」は、東京銀座で約45メートルの高さのビル屋上に養蜂の巣箱を設置した。そこは周囲のビルに比べて少し高いため、以前は沢山のカラスが屋上で悠々とたむろしていたが、ミツバチを飼い始めると、意外なことに、そこでも、その周辺のビル屋上でもカラスがいなくなったそうだ。

実際に、付近を徘徊するカラスをミツバチが追いかける場面も目撃されるようになった。偶然の賜物だった。

2008（平成20）年には、希少鳥コアジサシをカラスから守ろうと、自然保護団体と東京都は、営巣地の下水処理施設屋上に、ミツバチの巣箱を置くことを始めていた。銀ぱちの巣箱も置かれ、渡り鳥の用心棒として一役を担っていたのである。

銀座でのカラスの生態の変化は、住民の間で話題になり、新聞などでニュース記事に取り上げられた。それを酒井が読んだのであろう。

言い伝えとして、ミツバチは、目線上に黒色で光るものを見つけると、警戒し攻撃する特性があるとされる。天敵の熊が黒いからだ、と。だから、黒いカラスも追いかける、記憶力の優れたカラスはミツバチの飛ぶ

所には近づかない、とも解釈された。(かなり大ざっぱな俗説との話もある。ミツバチの視覚・色覚の学説については別に取り上げる)

酒井秀治は早速、銀ぱちの代表・田中淳夫に会って話を聞いた(2009(平成21)年、月日等は不詳)。

その際、酒井は、田中から企画の方向性を定める上での助言を受けている。

「銀座でやっていることはカラス対策のためだけではない。大人の楽しみなのであって、地域再生やまちづくりのためにミツバチを飼ってはどうか」と。(北海道の地域情報を発信するポータルサイト「北海道人」、2010(平成22)年8月13日取材記事)

後年のインタビューでは「札幌は花も多く、蜜もたくさん採れるはず。カラス対策だけではなく、まちづくりとしてミツバチを飼うことを楽しんでみては?」と、アドバイスを受けたとも述べている。

酒井は「札幌の都市部で採れた蜂蜜を味わい、市民が楽しむという新たなまちづくり活動ができれば面白い」との心境を強めた。

この考えに興味を示してくれる仲間にも恵まれ、構想はこの方向で固まっていた。

その後すぐに酒井は、所属会社(地域再生に関する研究を手がける会社「ノーザンクロス」)の会議で「札幌でも何とかしてミツバチを飼おう」との提案をした。

こうして、同社に事務局を置く「サッポロ・ミツバチ・プロジェクト実行委員会」結成の機運が高まったのである。

各種記録によると、「サッポロ・ミツバチ・プロジェクト実行委員会」の結成は2010(平成22)年5月(または4月)となっている。通称の

「さっぱち」は、東京銀座の「銀ぱち」を真似てこの時に定められたらしい。(同委員会は、2012(平成24)年7月には「特定非営利活動(NPO)法人サッポロ・ミツバチ・プロジェクト」と改組され、現在に至る)

この動きを強く後押しすることが、2009(平成21)年11月にあった。「太陽北海道地域づくり財団」(当時名)の助成金に応募し、平成22(2010)年度の助成対象に選ばれたのである。

これに応募する団体名として名目上、2009年夏ごろに同委員会を立ち上げていたか、助成事業の実施と同時に発足させる団体として示し応募したか、いずれかだったと推測される。

2010年3月21日、「札幌都心／ミツバチ飼育／5月からビル屋上に巣箱／子供たちに開放、商品開発も」の見出しで、プロジェクトの内容が『北海道新聞』で紹介された。

この記事を読むと、実に夢いっぱいのが構想が展開されるものと誰もが思うほど、市民の顔がにこにこする事業が並べられていた。

だが、ビル屋上での養蜂は、机上プランのように順調に着手できそうもなかった。ところが、ここでも天から遣わされたのかと思われるほどの「救い主」が突然に現れた。今も会の組織欄に「師匠」の称号で名を連ねる人物の登場である。(このことは次章で取り上げる)

いずれにせよ、東京銀座のミツバチ飼育にならったプロジェクトは、2010年5月、実際に活動を開始した。

2010年以降、10年以上の歩み

「さっぱち」の10年間の歩みをざっと拾い上げてみると、次のような事柄が並ぶ(継続の事柄は次年以降省略)。ずいぶんいろいろと活躍し

ていた。

◎2010（平成22）年

- 札幌の公共空間のカラス対策を契機に「サッポロ・ミツバチ・プロジェクト（通称「さっぱち」と呼ぶ）」を発足。
- 銀座ミツバチプロジェクトの助言により、カラス対策だけではなくまちづくりに寄与する活動とする基本方針を決定。
- 3月下旬、さっぱち養蜂の師匠・城島常雄さんが現場の屋上を訪問。
- 5月、「サッポロ・ミツバチ・プロジェクト」活動を開始。
- ^{みつろう}蜜蝋キャンドルワークショップを開催。
- 第1回さっぱち感謝祭を開催。
- 札幌市中央図書館でハチミツ試食会を開催。
- パートナー会員様とのコラボレーション企画をスタート。
- 札幌の三吉神社で、第1回蜂供養祭開催（以降毎年恒例行事）。

◎2011（平成23）年

- 「さっぱち×みつばちカフェ」イベントを開催。
- ボランティアスタッフ（現・サポートスタッフ）が初参加。
- 採蜜体験ワークショップを初開催。
- 正式に「さっぱちハチミツ」の販売を開始。
- 札幌の地下街オーロラスクエアで開催の「はちみつマルシェ」に参加。
- 屋上緑化プロジェクト「みつばち空のみちづくり」を始動。

◎2012（平成24）年

- 協力いただいている佐賀県佐賀市鍋島町の「岩松養蜂園」を初訪問。
- 北3条通り（現・赤レンガテラス）で開催のイベント「HANA CAFÉ」に参加。

- 「さっぱちハチミツ」の販路を拡大。
- 「サッポロ・ミツバチ・プロジェクト実行委員会」を「特定非営利活動（NPO）法人サッポロ・ミツバチ・プロジェクト」に改組。

◎2013（平成25）年

- ウェブストア「さっぱちストア」をオープン、「みつばちカフェ2013」を開催。
- 韓国から「BEETLECO」がさっぱちを視察。
- 「さっぽろ地下街とれたてマーケット」に参加。
- 「チ・カ・ホ（札幌駅前通地下広場）」で開催の「クラシェ」に初参加。

◎2014（平成26）年

- さっぱち養蜂の師匠・城島常雄さんの卒寿お祝いを開催。
- 「さっぱち料理教室」「こども料理教室」を開催。
- 「こどもエコクラブ」を札幌市環境プラザと協働で開催。
- 「平成26年度まちなか生き物活動運営業務」を札幌市から受託。
- 円山町内会主催「円山ふれいあい広場」に参加。

◎2015（平成27）年

- さっぱち紙芝居「ありがとう もりちゃん」を製作、読み聞かせ会を開催。

◎2016（平成28）年

- こどもワークショップイベントを拡大。
- さっぱち養蜂の師匠・城島常雄さん死亡（91歳）。

◎2017（平成29）年

- 「さっぽろばんけいスキー場」開催の「おもいっきり！ばんけい夏祭

り」に参加。

○さっぱちによるサンドイッチ屋さん「サッパチトパン」をオープン（期間限定）。

◎2018（平成30）年

○養蜂場所を太陽ビルからHBC北海道放送屋上に期間限定で引越し。

◎2019（令和元）年

○養蜂場所をHBC北海道放送屋上から愛生館ビルに引越し。

○ミツロウラップワークショップを開催。

◎2020（令和2）年

○ウェブストア「さっぱちストア」をリニューアルオープン。

◎2021（令和3）年

○「全国オンライン学生祭」にご当地クイズ動画で参加。

2022（令和4）年以降

以降の様子を、10年の時を飛び越えて、最新の内閣府のNPOポータルサイトを調べてみると、「特定非営利活動法人サッポロ・ミツバチ・プロジェクト」の実施事業は「都市型養蜂事業」（都市におけるミツバチの飼育管理と蜂蜜の生産）などとなっている。

要するに、養蜂事業は初期段階から成功し、発展的に10年以上続い
てきた。それは事実である。

都心ビルでの屋上養蜂が全国的に広がっている。ふと、蜂蜜の効能に
は、人の心を蜜にさせる「心蜜作用（親密効果）」もある気がした。

師匠と尊敬された元養蜂家

「平成の島義勇」

蜂蜜やミツバチのことを知りたくて、いつものようにネット上で新聞の読み漁りをしていた時、ある話題に目が止まった。2019（令和元）年11月15日付の『佐賀新聞』の記事であった。

その見出しは「佐賀と札幌をミツバチでつなぐ／亡き父の養蜂まちづくりを発信、多久島さん／実家で活動紹介、蜂蜜試食も」とあり、写真も添えられていた。

話題に出てくる地域、南の九州佐賀県神埼市と、北の北海道札幌市とは、ずいぶん距離が離れている。このことも興味をそそられた。記事には、「佐賀にルーツを持ったミツバチたちが札幌の街中を元気に飛んでいる」とあり、話題の主人公、主婦の多久島和子は、「北海道開拓の父」として知られる佐賀藩士になぞらえて「札幌では父（城島常雄）のことを『平成の島義勇』と言ってくれた人もいる」と語ったとある。

札幌市民の私は、直感的に「これは面白い物語になる」とマークした。早速、記事の内容を手掛かりに資料で詳細を追究する深掘りに着手した。（もう5年半以上も前のことである）

物語はミツバチと蜂蜜をこよなく愛する、佐賀を故郷とする親子（父娘）を中心に進行する。舞台の主な場所は札幌市都心部ビルの屋上。主な時期は平成の後期、2010（平成22）年3月からの約10年間。物語を

始める前に、親子の、出身の誇りと望郷の念とを支え続けたであろう佐賀藩士の島義勇についてふれておこう。

2018（平成30）年4月、北海道神宮で営まれた島義勇の顕彰祭の集いで、「北海道は佐賀の夢と志が花開いた大地です」と、佐賀県知事が述べている。札幌では、島の銅像を建て、開拓の先覚者・父として慕い、偉業を称え、慰霊祭を毎年開いており、同年は明治維新・北海道命名150年だった。

明治維新での貢献は、薩摩等3藩の武力に対して、肥前佐賀は知力であった。西欧の情報に精通した佐賀藩は対ロシア防衛で北海道の重要性に気づき、藩主が自ら初代開拓長官に就き、島を初代主席開拓判官に任命した。島の仕事は北海道本府としての札幌の建設。整然とした札幌市の基盤目状の区画を構想するなど、島義勇は都市整備の基盤を築いた。

城島常雄が「平成の島義勇」と言われたのは、こうした歴史的由縁を指していると思われる。

「神様がやってきた」

物語は、2010（平成22）年3月に始まる。城島常雄の娘・和子は結婚し、姓を多久島と名乗り、札幌市で暮らしていた。2007（平成19）年、母の他界を機に故郷の佐賀県神埼市から父を呼び寄せ、同居していた。それから3年、知り合いもおらず、慣れない土地で暮らす老父を気遣う日々だった。

そんなある日、多久島は地元の新聞で市民団体による「さっぱち」の始動を知った。城島は60数年にわたり、佐賀で養蜂業を営んでいた。

養蜂を知る多久島は、父が「ミツバチを見て元気になれば」と思い、早速、86歳の父の常雄を誘って養蜂現場を訪ねた。地元の新聞とは『北海道新聞』で、「さっぱち」とは「サッポロ・ミツバチ・プロジェクト実行委員会」のこと。『北海道新聞』2010（平成22）年3月21日、見出し「札幌都心／ミツバチ飼育／5月からビル屋上に巣箱……」（次の新聞切り抜き）の記事だった。

北海道新聞 2010年(平成22年)3月21日(日曜日) 35 第3社会 16版

札幌都心ミツバチ飼育


札幌の都心でミツバチを飼う「サッポロ・ミツバチ・プロジェクト」が5月から始まる。東京・銀座のミツバチ飼育になった試み。ビル屋上に巣箱を置き、ミツバチがみつを集める花が咲く初夏にかけ、はちみつを採る。子供たちにも参加してもらい、自然と触れ合う場を提供するほか、はちみつを使った洋菓子の新商品開発も目指す。

地域再生に関する調査研究などを手がける札幌の会社「ノサンクロス」に事務局を置く実行委員会が計画。札幌市中央区南1西4のビル屋上に巣箱2、3箱を設置する。実行委メンバーらが桜の咲く5月上旬から、道内の養蜂業者の技術指導を受け、ミツバチを飼育。最も多い時期で2万〜3万匹を飼い、子供たちにはみつを採ってもらう。

「子供たちに開放、商品開発も」

「サッポロ・ミツバチ・プロジェクト」は、サポロちみつ入り札幌スィーツを作り、新しい地域ブランドに育てたいという。さらに、市内の洋菓子店と協力して「札幌産はちみつ入り札幌スィーツ」を作り、新しい地域ブランドに育てたいという。

都心のビル屋上で養蜂業者以外がミツバチを飼うのは、NPO法人「銀座ミツバチプロジェクト」が2006年に始めた。はちみつは洋菓子店でケーキやマカロンに、老舗バーでカクテルに使われている。



5月からビル屋上に巣箱

『佐賀新聞』によると、親子が「訪ねると、ミツバチも養蜂道具もない状況だった」そうだ。

これを裏づける談話が残っている。現在、同会の流れを引き継ぐ団体「特定非営利活動法人サッポロ・ミツバチ・プロジェクト」で理事長を務める酒井秀治が、当時を語ったものである。語り種のように何度も同様な内容があちこちで話される。（引用は部分引用）

同実行委員会を発足させる運びとなったが、「養蜂については誰も知識がなく、始めは何もかも全く手探りの状態でした。札幌近郊の養蜂家にも相談しましたが、活動に賛同を得られるも忙しいと断られており、誰から養蜂に関するアドバイスを受けるかだけが決まらずにいたのです。そんな時、「さっぱち」が新聞記事で取り上げられ、転機が訪れました」。

新聞記事が縁結びとなり、「神様がやってきた」と語り継がれる酒井と城島との奇跡的な出会いとなった。別の記事では次のようにも語られている。

「新聞に『さっぱち』の記事が載るとすぐに、『父が養蜂をやっていた。養蜂をやっているところを見学させてもらえないだろうか』という問い合わせがきた。城島さんは『娘がボケ防止のためにやらせようと思った』と言うが、城島さんの養蜂への熱意に特別なものを感じた」「『ハチのことが忘れられない、力になれば』という思いから、活動に協力してくれることになりました」

前に、「誰から養蜂に関するアドバイスを受けるかだけが決まらずにいた」と語られていたが、実は具体的な養蜂の準備は何ら整っていなかったようだ。親子は何もない場所と状態を見学して、現状を知った。普通なら、がっかり、あきれて帰るところだが、親子はむしろ養蜂への郷愁に駆り立てられたようだ。その場で「さっぱち」を救う決心し参加を決めた。

『佐賀新聞』の記事には「2人はすぐに使い慣れた養蜂道具を取りに神埼の実家に戻り、ミツバチも佐賀の養蜂家に手配した」とある。2人とは、もちろん、多久島和子と城島常雄。このことを、「さっぱち」の酒

井秀治は、次のように述べている。

『さっぱち』への参加を決めると、城島さんは佐賀にもどり、かつて使っていた養蜂道具を北海道に送った。足りないものは地元の養蜂仲間に頼んで調達してくれた。ミツバチも城島さんの知り合いである佐賀の養蜂家から取りよせた。養蜂業は素人がやるには難しい業種と言われている。素人が頼んでも、健康なミツバチが届くとは限らない。5月26日に佐賀を出発したミツバチは船に揺られ、4日後の30日に札幌へ到着。翌日、太陽ビルの屋上に3つの巣箱が設置された。ふたを開けた巣箱からは、ミツバチたちが元気に札幌の空に飛びたった」

本格的な養蜂活動は2010（平成22）年6月にスタートした。以上からわかるように、すべて城島の経験に基づく配慮と手配で実現した、と言っても過言ではなかろう。「神様がやってきた」とは、決してオーバーな表現ではなかった。

「師匠」「お父さん」

急ごしらえの発足だったが、サッポロ・ミツバチ・プロジェクトは順調に進んだ。当初の様子は、5月下旬から6月下旬にかけて、『朝日新聞』（北海道内版）の記事、HBCとHTBとNHKのテレビニュース、北海道新聞の特集記事などで広く市民に知らされた。

『佐賀新聞』の記事は「常雄さんは『師匠』『お父さん』と慕われながら、メンバーに養蜂や採蜜の方法を1から指導した。ビルの屋上で制約があり、すぐにミツバチの様子を見に行けないなど苦労もあったが、試行錯誤しながら、都市型養蜂を確立した」と続く。

実行委員会発信のホームページを見ると、関連の各種の文章に添え

られる養蜂作業の実際場面の写真には、麦わららしい登山帽に面布を被り、しゃれたピンクのワイシャツを着て慣れた手つきで巣板を扱い、説明している様子の人物がしばしば登場する。その人が城島常雄だった。(右写真)



「すべてゼロからの出発だった」と述懐されるように、城島を取り巻き、熱心に養蜂のいろはを教わ

る会員の姿はまさに弟子。「師匠、あのー」と真剣に質問する眼差しは、尊敬の念で見詰める。うなずきながら聞き入るのはいい歳をした大人だが、年齢的には親子の開きがある。親しみを込めて「お父さん」と呼ぶ人もいた。

フリー百科事典『ウィキペディア』には、「養蜂技術は、立ち上げ時の新聞報道を偶然目にした元養蜂家の城島常雄に指導を受けつつ、北海道のビル屋上に適した飼育方法を探っている」とある。酒井らは、巣板の扱い方、蜂蜜の溜まり具合、燻煙器の使い方、分蜂を防ぐ方法など、城島の作業姿を見ながら1つ1つ学んだという。

城島の指導法は、1度自分の作業を見せた後に酒井らにやらせ、口出しをしないで見ていただけという厳しさを含んだものだった。これは1日も早く自立できるようになってほしいという城島の親心だった。「歳だからいついなくなるかわからんでしょう。だから早く覚えてほしい」との切迫感もあった。

そんな想いを物語るエピソードを探して紹介する。屋上養蜂が始まって2か月を少し経過したころの取材レポートが残されている。ポータルサイト『北海道人』に載った記事の1場面である。城島常雄の作業をじっと見つめる酒井秀治の写真。実際の作業姿を見せて、孫ほど離れた素人に、プロの技と知恵を1つずつ伝授されていく場面。

「ある日の2人のやり取りはこんな内容だった。『お父さん、この巣箱のハチだけいつも気が荒くて、蜜の量が他より少ないのは为什么呢』『品種改良しましょう。気の荒いハチをカットして、おとなしく勤勉なハチだけを残しましょう』これは、おとなしくてよく働くハチのいる巣箱から女王蜂の幼虫をもってきて、気の荒い巣箱に入れて品種改良をする方法で、こんなプロの技を身近で経験している」

始めたばかりなのに、もうこの地に適応する品種改良に着手している。

載った記事のエピソードをもう一つ。ある日のワークショップに参加した中学3年生S君と師匠城島とのツーショット。(右写真) 数ある城島を撮った写真の中で、これほどにこ



やかに晴れ晴れしい顔で写っているものはない。年齢差71歳を超えた2人が、ミツバチへの想い1点を見詰める瞬間である。

この日、お母さんと一緒に参加した斉藤は、将来、養蜂家になりたいのだそうだ。蜂飼いが登場する物語、上橋菜穂子著『獣の奏者』を読んで、その想いを強め参加した。「中学生が養蜂家と会い、直接指導が受

けられるような機会はそうあるものではない。斉藤君は、ワークショップに参加し、城島さんと直接交流することで、夢に向けて一步一步前進している。城島さんがこのプロジェクトに参加して一番うれしかったのは、養蜂家になりたいという斉藤くんがいることだそう。酒井さんも同様に、若い世代が養蜂に興味を持ってくれることがうれしいと語る」

添えられた写真に「『さっぱち』で養蜂を見学した中学生から届いた夏休みの自由研究のレポート。丁寧にわかりやすく、すばらしい出来。きっと百点にちがいない」と書き添えられている。

『市報かんざき』

城島の活躍ぶりは、出身地の佐賀県神埼市の『市報かんざき』2012（平成24）年6月号に、題名「ベテランの技術でミツバチ飼育のお手伝い」で紹介された。ピンクのワイシャツ姿で頼もしく指導に当たる写真も載った。その一部分を抜粋する。

ベテランの技術でミツバチ飼育のお手伝い

神埼町一丁目の出身で札幌市在住の城島常雄さんが、「サッポロ・ミツバチ・プロジェクト」（さっぱち）で活躍されています。

さっぱちとは、サッポロの街中でミツバチを飼い、緑化や蜂蜜を使った地域ブランドづくりを進める市民参加型のプロジェクト。平成22年に発足した実行委員会で養蜂や採蜜の指導にあたったのが城島さんです。

城島さんは佐賀での65年間の養蜂経験を活かし、参加者に一から指導を行いました。活動が始まった3年前は3万匹だった飼育数も現在では約12万匹に増え、観光資源開発や緑化推進など様々な効果が期待されています。そのプロジェクトで師匠として活動を支えている城島さんは今年88歳を迎え、後継者の育成にも力を入れるなど、ますます精力的に活動されています。



「2010（平成22）年に発足した実行委員会で養蜂や採蜜の指導にあたったのが城島さんです。佐賀での65年間の養蜂経験を活かし、参加者

に1から指導を行いました。活動が始まった3年前は3万匹だった飼育数も現在では約12万匹に増え、観光資源開発や緑化推進など様々な効果が期待されています。そのプロジェクトで師匠として活動を支えている城島さんは今年88歳を迎え、後継者の育成にも力を入れるなど、ますます精力的に活動されています」

「さっぱち」のホームページの報告には、赤いエプロン姿で作業の試技を示す女性も、時折、登場する。城島の娘の多久島和子は、父に寄り添いながら、実行委員や理事も務め、会の中心人物の1人として活躍し、親子で技術的面の指導に当たってきた。

『佐賀新聞』

物語は、一足飛びに現在へ。『佐賀新聞』の記事で結ぼう。

「札幌市在住でNPO法人会員の多久島和子さん（66）が、神崎市神埼町の実家で、札幌のビル街の養蜂によるまちづくりを紹介している。

『さっぱち』の取り組みで、亡き父の佐賀での稼業が原点。『佐賀と札幌をミツバチでつなぐ活動を知ってもらい、新しいつながりが広がれば』と話している」

「『師匠』は2016（平成28）年に91歳で亡くなったが、ミツバチに対する姿勢や技術は引き継がれ、佐賀にルーツを持ったミツバチたちが札幌の街中を元気に飛んでいる。『さっぱち』の活動は10年目に入った」

「実家を開放し、活動の様子を写真や映像で発信。『お茶気分で気軽に立ち寄って。都会の蜂はどこに飛ぶか分からず、採蜜日で味が変わる蜂蜜の試食もぜひ』と多久島さん。ライラックにラベンダー……。いろんな花から集めた蜂蜜を販売している」

実家の玄関で写された掲載写真には、活動を語る沢山の説明や写真、蜂蜜製品などと一緒に、城島さんの表彰状と思われるものが何枚も並ぶ。もちろん、中央には、佐賀と札幌をつないだ主人公、多久島の凜とした姿が写っている。



2019（令和元）年11月15日付の『佐賀新聞』の記事

（2020年2月5～13日、ウェブ掲載『蜂蜜エッセイ』、第5回掲載分
合作に加筆した）

（付記）

2025（令和7）年10月末日現在、2010（平成22）年4月発足の『さっぱち』（NPO法人サッポロ・ミツバチ・プロジェクト。札幌市中央区所在）は活発に活動中である。運営委員名簿の最後に、師匠・城島常雄（故人）の名がずっと掲載されている。

高校生の養蜂が教科書に掲載

高校での養蜂活動が高校の教科書に載る

2021（令和3）年3月30日、2022（令和4）年度から実施される高等学校（以下、「高校」と略す）の教科目改編で使用する教科書の検定結果が、文部科学省から公表された。

その1つ、社会科新必修科目「公共」は、社会に参画する際に必要な知識や現状を理解し、実際の社会の課題と向き合い解決する力を身につけるという科目だが、その教科書に、市立札幌大通高校の養蜂活動「ミツバチプロジェクト」が2ページを使って掲載されことになった（右下画像。「教育図書」発行）。

新制高校の教科書に高校の養蜂活動が採用された事例は、おそらくこれが最初であり、2025（令和7）年4月時点では、唯一とみられる。

高校における先進的な養蜂への取り組みが全国的に知られることは、活発化する高校生養蜂を大きく前進させ、関係者にとっては進歩・向上への励みとなる。世間の期待も高まる。

「公共」の教科書に、なぜ養蜂の話題

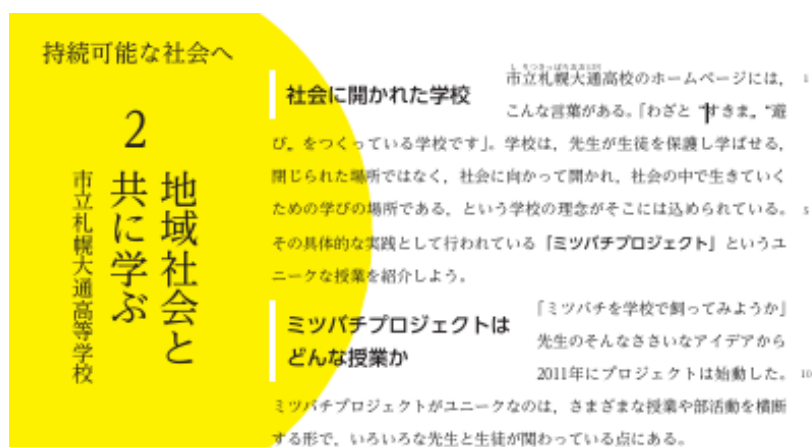


が載るのか。私・白佐はその謎解きを試みた。その一部について、2021年4月上旬、5回にわたる連載を『蜂蜜エッセイ』で掲載した。

「ミツバチプロジェクト」の教科書掲載について、前田輪音（北海道教育大学）は、2025（令和7）年4月9日公開の研究論文「科目『公共』における地域の社会課題をさぐる―教科書にみる『北海道』の社会課題から―」の中でふれた（『北海道教育大学大学院高度教職実践専攻研究紀要』第15号、p.13～24のp.21）。

掲載記事の具体的内容

教育図書出版の教科書『公共』p.182～183に掲載の「第3章 持続可能な社会へ 2 地域社会と共に学ぶ」の冒頭は次のようになっている。



以下は、本文と、6つの注記の写真・説明文（省略）からなり、2ページ目の最後は「DISCUSSION」（次の2つ）で終わっている。

Q. 地元の特産品や地場産業に、どんなものがあるか調べてみよう。

Q. 高校生が関わるができるビジネスについて考えてみよう。

この教科書の記述内容を読むと、市立札幌大通高校の入学希望者向け学校案内が思い浮かんだ。ごく最近の同校の養蜂活動はどうなっているだろうか。

最新のミツバチプロジェクトの動向

いわゆる一般に「学校案内」という入学希望者向けの学校・教育・生活の概要をまとめて紹介する冊子は、市立札幌大通高校では『未来〇〇年』と称する。最新のものは『未来2026』（右画像）である。



◎市立札幌大通高等学校『未来2026』

この中で、「多様な学び・多彩な連携／教科書だけではない学び、校内だけではない学び—学びの形態は1つではありません」として、次のように述べている。

授業で基礎を学ぶことが大切なのは当然ですが、大通高校では、社会に出たときに「動ける人」になるため、実際に世の中で起きている様々な動きに参加し、実際に自分が動いてみることによる学びも重視しています。以下にその例を紹介します。

◎ミツバチプロジェクト—教科横断的に生産から販売までを経験—

植物園に隣接している立地を活かした都市養蜂の活動で、ミツバチ

やその生産物（蜂蜜や蜜ろうなど）を利用して授業、部活動、地域住民などが関われる参画型学習です。

授業を中心とした流れとして、「工芸」を受講する生徒がミツバチの巣箱や巣枠を製作→「動物の生態」の授業ではミツバチの状態を観察→生物部の生徒と地域住民のボランティアの方々により採蜜→「美術」・「書道」の授業ではラベルや包装デザイン→花フェスタやオータムフェスト等で販売→「メディア局」が一連の流れを広報→販売から得た収益は次年度のミツバチプロジェクトの活動費や開発費に使われています。ミツバチプロジェクトに関わる生徒がバトンタッチしながら1次産業から3次産業までの営みを体験することが出来ます（右画像）。その他にもミツバチを題材にした授業も展開されています。



また、プロジェクトに深くかかわった生徒が「はちみつフェスタ」や「全国学生養蜂サミット」へ参加したり、グローバル部の活動では開発したエコラップ（蜜ろうを利用したラップ）の技術を社会福祉法人草の実会に伝え、その売り上げは障がいのある方の収入になり、一部はユニセフ等に寄付されています。（編著者補注：「グローバル部」とは、部活動の1つで、国際理解や地域社会への貢献に関心を抱く生徒が集まり、様々な活動を行っている部活動。グローバルとは、「グローバル」と「ローカル」を組み合わせた言葉で、世界的な視点と地域社会の視点を両立させることを意味する。旧「遊語部」が、2024（令和6）年度後期から名称変更になった）

なお、教科書では、「地域社会との交流」のさまざまな他の例として、札幌市内の実店舗で働くことを学ぶ「まちなか職業体験」、地元伝統文化の継承を目的にしたアートイベント「鴨々川ノスタルジア」や、北海道の食育の専門家を育てるプロジェクト「アニマドール」への参加など、もあげられている。（注：「アニマドール」とは、北海道の「食」や「農」に触れながら、将来の生き方や働き方を考えることができる、食農教育&キャリア探究プログラムのこと）

教科書掲載についての前田輪音の紹介

前述の前田は、論文の中で、教科書掲載記述について、次のように概要を紹介した。

市立札幌大通高等学校の取り組み「ミツバチプロジェクト」が2頁にわたって紹介されている。ミツバチを育て、加工し、販売するまでの一連の過程は学校の中だけではできない。養蜂家や、地元のレストランや洋菓子店や食品関連の企業との協働や、商品を購入してくれるお客さんたちとの交流の中で、生徒たちはもちろん先生たちも、さまざまなことを学んだ。総合実践の授業を受けた生徒は「物を販売し、接客することは、自分たちで考えて行動しなければならないことがたくさんあった」と語る。

このミツバチプロジェクトをきっかけに、同校ではさまざまな地域社会とともに学ぶプロジェクトが行われている。札幌市内の実店舗で働くことを学ぶ「まちなか職業体験」、地元伝統文化の継承を目的にしたアートイベント「鴨々川ノスタルジア」や、北海道の食育の専門家を

育てるプロジェクト「アニマドール」への参加など、社会に向かって開かれた学びが広がっている。

ミツバチプロジェクトが採用されたころの状況

まず、2021（令和3）年4月の状況を確認することから始める。

京都二ホンミツバチ週末養蜂の会（1990（平成2）年発会、2020（令和2）年6月1日「週末養蜂」を設立）は、そのホームページで2020年1月21日、「活発化する高校でのミツバチの飼育の取り組み」と題して、最近の高校でのミツバチ飼育の動向をまとめ、農学系でない高校でも、地域活動などの一環として行われることが大きな特徴だとした。

同会が紹介した高校5校の所在地と校名を北方面から列記すると、次のようになる。（以降にあげる高校名には、休止・終了・閉校した学校も含む。掲載は順不同）

◎北海道札幌市の市立札幌大通高校／神奈川県川崎市の県立川崎高校／長野県富士見町の県立富士見高校／愛知県名古屋市の県立愛知商業高校／広島県神石高原町の県立油木高校。

この中には、1人の女子高生が始めた養蜂部（2009年創部）が、創部3年（2012年）にして「農業高校の甲子園」とも称される日本学校農業クラブ全国大会で優勝するまでに至った、日本で最初に養蜂を始めた高校の1校と言われている長野県立富士見高校も含まれている（同大会では、プロジェクト発表の部で最優秀賞と文部科学大臣賞を受賞。そして、本にもなった（森山あみ著『みつばち高校生—富士見高校養蜂部物語—』リンデン舎、2016（平成28）年1月発行）。

また、2020（令和2）年1月を時点に、生徒や教師が何らかの形で

過去または当時、ミツバチ飼育やミツバチ产品生产に関わった実績のある高校を探してみると、私の調査では、少なくとも次の14校がさらに加わることがわかった。

◎秋田県秋田市の県立金足農業高校／福島県二本松市の県立安達東高校／東京都北区の私立聖学院中学・高校／東京都杉並区の私立文化学園大学杉並中学・高校／東京都墨田区の私立安田学園中学・高校／東京都目黒区の私立日本工業大学駒場高校／埼玉県坂戸市の国立筑波大学附属坂戸高校／埼玉県秩父市の県立秩父農工科学高校／富山県富山市の県立富山商業高校／岐阜県多治見市の私立多治見西高校／愛知県名古屋市の私立同朋高校／大阪府大阪市の私立相愛学園中学・高校／広島県世羅町の県立世羅高校／岡山県岡山市の県立高松農業高校。

ざっと調べてみても19校に及んでおり、実際にはさらに増え、かなりの全国の高校生がミツバチに興味・関心を持ち、各種の実践活動の経験をしていると考えられた。

最近の再調査でも、少なくともさらに次の10校が加わる。(同前)

◎北海道北見市の道立留辺蘂高校／秋田県能代市の県立能代西高校／東京都墨田区の都立隅田川高校／東京都杉並区の都立農芸高校／埼玉県嵐山市の私立大妻嵐山中学・高校／大阪府池田市の府立園芸高校／大阪府和泉市の府立伯太高校／静岡県静岡市の私立静岡雙葉中学・高校／愛知県安城市の県立安城農林高校／福岡県福岡市の私立福岡大学附属大濠中学・高校。

以上のように、多数の高校の生徒が何等かの形で養蜂関連の授業やクラブ活動にかかわりを持ち、ミツバチや蜂蜜等に関心・知識を深めている。そんな状況の中で市立札幌大通高校が選ばれたのである。

市立札幌大通高校のミツバチプロジェクト

次に、数ある高校の活動例の中から、市立札幌大通高校の「ミツバチプロジェクト」がなぜ選ばれて教科書に載ったのか、これまでの推移を探ってみたい。

同校は、札幌市立の既存の定時制高校4校を統廃合して作られた4年制の定時制高校で、17年前の2008（平成20）年4月に開校した。

掲げる「教育目標」は、「目標に向かって挑戦し、主体的に自己の生き方や進路について探究し、豊かな人間関係を築ける生徒を育てる」であった。

1つの学校だが、午前部、午後部、夜間部の3部制で運営され、各1日4時間授業。学年による学習区分がない単位制なので、他部の授業も履修し、所定の単位数を修得すれば、3年間でも卒業できる。時間割は自分独自のものを作成する。

用意された100を超える授業科目から自身の興味関心で選択し履修するが、中学校までの学習内容の学び直しも、教科書以外や校舎外での学びも可能である。

基本的に自由でオープンな運営で、細かい校則も制服もチャイムもないし、校舎に土足のまま入れ、教員室等との壁も少ない。今、約1千人程度の生徒が学ぶ。

校舎の隣接地には、北大植物園（北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園）があり、200メートルほど離れて大通公園が延びる。都心の中心部でありながら、緑の豊富な自然環境にある。（本章末尾の校舎写真参照）

さて、本題のミツバチプロジェクトだが、始まりは当時の吉川副校長と島田教諭との雑談だったという。2010（平成22）年に入り、5階建て新校舎の完成を機に「校内での勉強以外で何か学べることをさせたい。学校でミツバチを飼うことはできないか？」と。（どうやら、この年の春に実現し話題になっていた、札幌市の都心ビル屋上に巣箱を置き養蜂するサッポロ・ミツバチ・プロジェクトの実践が刺激になったものと推測される。前・前々章参照）

なお、2012（平成24）年11月10日の『高校生新聞ONLINEニュース』は、発案者の島田正敏教諭の談話を載せた。環境指標生物といわれ、環境に影響されやすいミツバチだが、都心は農薬を使う人も少なく、学校で飼えたら、恵まれた環境の下、養蜂の成功率は高いと判断され、「実現すれば面白いものになる」と真剣に考えられたそうだ。

ミツバチを学校で飼うことが決まり、同プロジェクトに取り組む準備を始めたのは2011（平成23）年だった。実践活動は翌年の2012（平成24）年の春から本格化した。

校舎の屋上広場に養蜂箱が設置され、テラスからガラス越しに観察できた。メディア局の取材で、ミツバチの様子が校内外に随時伝えられた。地域の協力・支援者にも恵まれた。初年度にして、ピーク時は5万匹も飼育し、約200キロもの蜂蜜の収穫があったという。

採取した百花蜜を独自に商品化し、商品ラベルのデザインを校内投票で決めるなど、衆知を集めて工夫を凝らした。今も代表的な商品名「天然蜜食べ隊」（純粋蜂蜜）や商品名「ハニロン」（蜂蜜を使った洋菓子マカロン。ケーキ屋のパティシエと共同開発）は、この年に商品化されたものである。

2012年9月、北海道の食をテーマにした一大イベント「さっぽろオータムフェスト」では、大変好評で用意した瓶詰め蜂蜜も、蜂蜜入り洋菓子なども1週間で完売した。売れ行きのすごさに、生徒も教師も驚き、喜びもひとしおだったとされる。

この時の様子を、前述の『高校生新聞ONLINEニュース』は、関係した教師、生徒の談話入りで詳しく伝えた。

同校には、メディア局という生徒会外局の生徒運営の情報発信の部門が当初からあり、高校としては珍しい校内の諸情報を校内外に広報するFMラジオ番組を毎週1回、午後の時間帯に60分間放送している。

ミツバチプロジェクトについても、ミツバチの資料や話題、養蜂の状況が伝えられた。局員による定期的な直接観察取材を通して校内外に伝えられていた。

「学校案内」によると、このプロジェクトは「教科書だけではない学び、校内だけではない学び、多様な学び・多彩な連携」の1つに位置づけられた。広大な北大植物園に隣接し、原生林に自生する花の蜜をミツバチが採取できるという立地条件を活かし、生徒がバトンタッチしながら1次産業から3次産業までの営みをつくり出す「都市養蜂」の活動といえる。

科目の受講生は、教科横断的に生産から販売までを経験する。柱は「ミツバチ飼育→採蜜→商品開発→販売」の4本柱になるが、もう少し基本的流れを詳しく見てみよう。

○生活・福祉系の科目「工芸」の受講生が、養蜂箱の巣枠等のツールを製作する。

○飼育に直接関わるのは環境・自然系の「動物の生態」の受講生。養蜂

環境を整備し、蜂の状態を観察し、飼育管理も採蜜作業も行う。当時、西洋ミツバチの飼育は20万匹を超え、多数のボランティアに支えられながら営む。

○商業・ビジネス系の「総合実践」の受講生が、蜂蜜を使用した独自商品を開発し、また、企業とのコラボで新製品を開発し、広告を作成し、販売戦略を考え、実習もする。既に、企業とのコラボで開発し流通する商品は十種類を超える。

○生活・福祉系の「書道」と「美術」の受講生が、ラベルや包装のデザインをする。

○前の受講生が、オータムフェスト等の地域や東京などでのイベントで直接販売し、また、商店での委託販売もする。

○生活・福祉系の「フードデザイン」の受講生が、高校生対象のグルメコンテストにレシピを開発して応募・出品する。

○「メディア局」の局員が一連の流れを校内外に広報する。

○前の受講生が、会計処理もして、売上収益を次年度の開発費に充てる。

その他にもミツバチや蜂蜜を教材にした授業がいくつもあり、部活動での関わり、同校を会場に開講の「市民カレッジ講座」との連携や隣接する幼稚園との連携での活用もある。さらに、蜂蜜を介して地域社会との交流も図られた。

毎年、携わる生徒が変わるので、様々な着想が生まれ、活動は活性化し進化し続けた。高校の教科書に活動が紹介された理由は、まさにこの点にあったのではなかろうか。

科目「公共」の教科書の特集記事は「ユニークなのは、さまざまな授業や部活動を横断する形で、いろいろな生徒や先生が関わっている点」

と記述していた。

教育成果の一端は、2020（令和2）年8月発行の『広報さっぽろ（中央区版）』の特集「ミツバチで広がる学びの場」でも紹介されたが、教師・卒業生の談話にもあったように、よい意味での波及効果は計り知れないものがあり、また、更なる可能性も豊富に秘めていた。

蜂蜜の品質の高さは各方面で認められているが、評価例を2つだけ挙げてみる。

2018（平成30）年8月3日「はちみつの日」に発表された、日本はちみつマイスター協会主催の「第4回ハニー・オブ・ザ・イヤー」（最もおいしい蜂蜜を決めるコンテスト）の国産部門で、同校生徒の生産出品の蜂蜜「天然蜜食べ隊／初夏の百花蜜」が最優秀賞を受賞した。また、前もって開かれた同年7月下旬の「はちみつフェスタ」で、来場者の人気投票の最多得票賞「来場者特別賞」も受賞し、ダブル受賞に輝いた。ダブル受賞はめずらしく、評価も「気品のある上品な味」と絶賛された。

もう1つは、2019（令和元）年12月14～15日開催の「全国学生養蜂サミット2019」で、自校の養蜂活動を発表する部門「活動報告発表」で活動内容を発表し、高校では最高の優秀賞を受賞した。

成功例を支えたもの

以上で、主に市立札幌大通高校の実践例、古くて新しい「都市養蜂」の成功例をとりあげた。これを補足しておきたい。

◎ 1つは、ブームともなっている都会の「ミツバチプロジェクト」には、次に列記するような「多彩な可能性」を追求する崇高な理念があることである。

○季節ごとに採れる美味しい自然に感謝し、自然に関心を持つ心を育む。

○自然や植物に感心を持って楽しみ、街に美しい花や美味しい蜜源が広がる。

○都市菜園など受粉昆虫によって交配の確立が上がる。

○春、昆虫が少ない時期に、エゾヤマザクラなどの結実が期待され、森が豊かになる。

○環境指標生物のミツバチに興味を持ち、環境問題や生物多様性などを考える機会を作る。

○エネルギー現象問題に貢献し、環境循環型社会の形成に携わる。

○ミツバチの飼育と蜂蜜の生産・活用を通して、地域の生態系を守り、環境の保全を図る。

○養蜂事業によって、環境保全意識の向上と環境に配慮した街づくりに寄与する。

○ミツバチを増やすことで、地産地消し、環境や健康によいコミュニティを形成する。

○ビルの屋上緑化によって、緑の創出や街の緑化の推進・実践を図る。

(以上は同校のウェブサイトなどから作成した)

◎ 2 つ目は、物事には陰の立役者がいるということである。

メディア局のブログによると、同校の蜂場維持の場合も、初期のころには自分の蜂群まで持ち込んで協力していた養蜂愛好家がいたことや、常に献身的なボランティアに支えられていることがうかがい知れる。

手間のかかる生き物を扱うには、特に学校のような場合には、そういう役割を果たしてくれる支援者いてはじめて可能になるものである。

◎ 3つ目は、新型コロナウイルス禍の影響についてであるが、2020（令和2）年度の同校の蜂蜜販売は外部店の委託販売だけに終わった。そこで、「総合実践」の受講生は何をしたか。

何と「ミツバチ絵本づくり」に挑戦したという。絵本画家の協力を得て、養蜂を通じて生徒たちが成長する様子を描き、食べ物への感謝の気持ちなどを表わす物語を構築した。この絵本は2021（令和3）年度中の出版を目指した。

2021（令和3）年7月30日の『札幌市立高校ポータルサイト』には、「大通高校生徒が中央幼稚園に絵本の寄贈と読み聞かせをしてきました」が載った。前年度から制作が始まった絵本『いただきます』は2021年7月に完成した。作品は、同校の「ミツバチプロジェクト」をテーマに作成された。この絵本は様々な仕掛けがあり、一度読んだだけでは全ての仕掛けを解くことはできない読み応えのあるものだという。

「総合実践」科目の受講生徒が、同月26日早速、同校に隣接する「札幌中央幼稚園」の園児たちに絵本の読み聞かせをし、その絵本を寄贈してきたというものであった。今後、生徒たちはクラウドファ



ンディングを実施して、この絵本『いただきます』（上写真が表紙）を世の中に広めたいと意気込んでいるとあった。

また1つ、思わぬ形で活動の幅が広がった。苦難を乗り越えて、同校のミツバチプロジェクトの進化は日々前進していた。

なお、教科書掲載については、2021（令和3）年4月10日、『北海道新聞』の「読者の声」に「大通高の教育／飛躍に期待」が載った。

「はちみつコンテスト」の入賞効果

前に紹介した市立札幌大通高校生産の瓶詰め蜂蜜「天然蜜食べ隊／初夏の百花蜜」はその後どうなったか。テレビ番組『あいつ今何してる？』ふうに調べてみた。

この商品は、2018（平成30）年の「はちみつの日」に発表された最もおいしいはちみつコンテスト「第4回ハニー・オブ・ザ・イヤー」の「国産部門」で、専門家審査の「最優秀賞」と、フェスタ来場客の試食投票の「特別賞」とを受賞した。

ダブル受賞も珍しいが、注目は高校生の産品だったからであろう。市立札幌大通高校の蜂蜜は、都心部にある校舎屋上が養蜂場である。

この後の1年の報道話題を拾ってみると、蜂蜜そのものは、温泉ホテルのバイキングで提供され、売店で「はちみつスティック」の形で販売されるようになった。そして、次のような製品開発も生んだ。

◎新開発の手作り石鹸『札花蜜^{さっかみつ}』の原料として採用された。蜂蜜は、石鹸の泡立ちを良くしたり、肌の保湿効果を高めたりする効果があるそうだ。新商品では、敏感肌の人にも優しく、洗いあがりの肌がしっとり潤い、森林浴の気分が味わえるという。地域ブランド『札幌スタイル』として、手作り商品を製造販売する会社から発売された。

◎新開発の甘酒『札幌大通はちみつ入り大吟醸^{だいぎんじょう}あまざけ』の原料として採用された。全国的な大手メーカーが、養蜂を通した高校生の環境保全への取り組みに共感して新開発した。純米大吟醸の酒かずに生蜂蜜

を加え、年少者でも飲めるように、アルコール分をほとんど含まない製品で、栄養豊富なすっきりした甘さと豊かな香りが特徴とされる。

◎また、蜜蝋^{みつろう}を布に染み込ませて、食品を包んで保存する「エコラップ」の製作が始まっている。同校の8か国の異国籍生徒約30人が各国の文化を学び合う部活動の一環として取り組み、プラスチックごみ削減などを訴える実践活動と結びつけている。

コンテストでの入賞は地域社会の認識を高め、生徒たちには自信と励みになって、好ましい進展につながっているようだ。

養蜂教育の取り組みに対する評価・受賞

◎第34回教育奨励賞（努力賞） ……2019（令和元）年度、「ミツバチでキャリア教育」と題した取り組みが評価され、時事通信社主催のこの賞の受賞となった。

評価されたポイントは、「養蜂を単なる授業テーマにとどめず、ミツバチを教材として、教科横断的かつ実社会と連携したキャリア教育の実践」が高く評価された。プロジェクトは理科・商業・芸術・国語など多様な教科が融合し、地域や企業との協働によって「本物の学び」を提供していることが注目された。都心の高校内で都市型養蜂を行い、蜂蜜の販売やプロモーション、デザイン制作、販売価格設定など、生徒が主体的に関わる経験を通して、進路選択や社会的スキルの涵養が図られている点が評価された。

◎全国学生養蜂サミット（優秀賞） ……ミツバチサミット実行委員会が主催する、2019（令和元）年開催の「全国学生養蜂サミット」において、市立札幌大通高校は優秀賞を獲得した。全国規模の学生大会におい

て、高校単位での成果が評価された例である。

評価されたポイントは、「授業と養蜂活動が融合した、学校全体での組織的かつ継続的な取り組み」が高く評価された。大学も含む全国大会において入賞し、その教育システムの一貫性と完成度が認められた。生徒同士の交流促進や自己肯定感の回復といった教育効果に加え、学校ぐるみで持続可能なプロジェクトを構築している点も評価された。

◎令和5年度キャリア教育優良学校・文部科学大臣賞……2024（令和6）年には、「体験型プロジェクト学習の設置」に関して、文部科学省主宰のキャリア教育優良学校文部科学大臣賞を受賞（推薦）している。ミツバチプロジェクトを含む体験型のプロジェクト学習を通して、生徒の学びとキャリア形成を促進した点が評価された。

評価されたポイントは、「体験型のプロジェクト学習の設置」が注目され、学校全体を通した持続可能なキャリア教育の取り組みが推薦されました。特に、ミツバチプロジェクトをはじめとする体験型学習が生徒一人ひとりの学びや気づきを促し、教育内容の深化につながっている点が重視された。

これらの受賞は、蜂蜜そのものの味と品質を評価する賞（例えば、「ハニー・オブ・ザ・イヤー」など）とは異なり、養蜂活動を教育の場として組み込み、生徒の学びやキャリア形成を支援する姿勢が評価されたものである。

教科書のモデル例になった理由

市立札幌大通高校の「ミツバチプロジェクト」が教科書にモデル例として取り上げられた理由は、おそらく次のような要素が高く評価され

たためと考えられる。

◎教科横断・実社会連携の総合探究活動……養蜂活動を通して、理科・商業・家庭・芸術・国語・英語などさまざまな教科が連動し、実社会（地域住民との販売実習など）と結びついた探究型学習が実践されている点が注目された。

◎主体的な課題設定・実践・発信……教科書が求める「問いから始まり、自ら課題を解決する流れ」にぴったり合致する。生徒は計画的に活動を進め、多様な役割を担いながらプロジェクトを完遂している。

◎地域との協働による社会的意義の創出……地域イベント（例：「オータムフェスト」）での販売活動や、それに伴う接客・広報など、社会に対して働きかける機会を得ている点が、「公共」の学びにおける「社会と関わる力」を具現化した例としてふさわしいと判断された。



都心部にありながら自然の豊富な市立札幌大通高等学校

震災復興に新蜂蜜を推奨

かつて福島県二本松市下長折に「福島県立安達東高等学校」（通称：達東・たっぴ）という全日制課程の高校が50年間存在した（1973（昭和48）年4月開校～2023（令和5）年3月閉校。ただし、2025（令和7）年3月、2022年度入学生が卒業するまでの2年間、再編・統合の新設校・福島県立二本松実業高等学校安達東校舎として存続）。

同校は、2014（平成26）年4月～2025（令和7）年3月の11年間、総合学科の農業コースに「養蜂科目」（講義・実習）を設け、西洋ミツバチを飼育した。元々は農業系の定時制高校から出発した高校であったが、養蜂を科目に取り入れたのは近年になってからのことである。

そもそも同校が、まったく未経験の養蜂を始めるに至ったのは、2021（平成23）年3月11日に発生した「東日本大震災」の被災に起因する。

東日本大震災からの復興

話は、2011（平成23）年3月11日発生の東日本大震災にさかのぼる。地震災害に続いて、東京電力福島原子力発電所で爆発事故が起きた。放出された放射性物質による環境汚染は福島県を含む広域に及んだ。

汚染の対処のため、汚染地域一帯の家畜は全頭殺処分となった。安達東高校総合学科農業コース畜産専攻班の生徒が同校の農場で飼育して

いた10頭ほどのヒツジ（^{めんよう}緬羊）も同様に全頭殺処分となり、以後当分の間、他の家畜の飼育も不可能になった。二本松市は長年、ヒツジやヤギの飼育が盛んな地域であったので、同校実習施設の農場でも伝統的にヒツジを飼育していた。生徒をはじめ、学校関係者の受けたショックは表現する言葉が見当たらないほど大きかった。

ようやく気力を取り戻し、復興に向けてヒツジに代わる家畜を探し始め、ミツバチによる養蜂に生徒たちの考えが及んだのは、2年以上後の2013（平成25）年も後半だった。

同校の校舎が農林業を主とする地域にあり、周囲には花咲く蜜源植物が豊富にあることに着目した。校地の一角に養蜂群の巣箱を設置すれば、ミツバチの訪花は、主に3月はナタネ、4月はサクラ、5月はニセアカシア、6月はクリ、7・8月はヒマワリ、9月はアレチウリ、10月はソバ、11月はセイタカアワダチソウに向かうと想定された。これらの複数の花から混ざり合って採蜜される蜂蜜「百花蜜」の生産では、施設設備をあまり必要とせず、原料費がかからないのも魅力だった。

同校所在の二本松市は、地域特有の気候などの最適な条件を備えた場所にあるため、リンゴをはじめ、サクランボ、ブドウなど、果樹栽培農業が盛んな地域である。ポリネーター（花粉媒介者・送粉者）として活躍するミツバチの飼育（養蜂）も盛んな地域だった。

畜産専攻班を指導する教師たちは、二本松市小浜所在の「渡辺養蜂場」の社長・渡邊佐吉に相談、協力・支援を依頼し、快諾を得た。同養蜂場の関係者に初歩から技術指導を仰ぎながら、順次ミツバチの箱数を増やしていく計画が立てられた。導入当初は、高齢の渡邊社長が自ら高校に出向き、指導にあたった。

農業コース畜産班の生徒たちは、2014（平成26）年3月、学校が実習用に購入した西洋ミツバチ1箱の世話から養蜂を始めた。2・3年生の生徒が実際の飼育作業にあたったが、最初はみんな、刺されることを心配して、扱いはこわごわ、びくびくであった。

それでも次第にミツバチの扱いに馴^なれて、養蜂の導入・実施はスムーズに進展した。同校農場で生産する蜂蜜の量も販売できるほどに増え、2015（平成27）年夏には「あいさつ坂」と命名して、国道4号福島南バイパス下り線にある「(株)二本松市振興公社」運営の道の駅「安達」（智恵子の里・二本松ベーカリー）で百花蜜などの商品販売を始めた。蜂蜜商品名は同校のシンボルになっている愛称の「あいさつ坂」が選ばれた。同校の校門から校舍玄関前の昇降階段までの間約200mが緩やかな坂道となっており、「お早うございます」などのあいさつや目礼の笑みを交わし合う場となっていた。ミツバチの巣箱はその坂の途中に置かれ、採蜂の場所となっていた。（右写真）



幸いなことに、当時の生徒が熱心であり、渡邊養蜂場から社長に代わって指導に訪れていた非常勤講師（指導員）の青年・寺田篤哉や同校の教職員の尽力によって、養蜂は順調に進展し量産化が進んだ。喜んだ生徒たちは、これをさらに活用し、地域の元気を取り戻し、さらに高めようと思い始め、新しく自校の特産品を作るプロジェクトを立ち上げることになった。時期は2015（平成27）年11月

であった。

校内協議の結果、候補は絞られた。いくつかの案の中から最有力候補に選ばれたのは、寺田講師が推奨した珍しい蜂蜜産品「第3のみつ」の生産だった。埼玉県だけの生産で、ごく限られた養蜂場だけで試験的に実施されていた。それを、埼玉県出身の寺田講師が知っていたことに拠る。寺田の仲介で具体化の話は順調に進んだ。

2016（平成28）年1月、寺田の仲介・案内で、安達東高校の遠藤智子教諭、渡邊養蜂場の渡邊佐吉社長などが埼玉県深谷市の花園養蜂場の松本文男を訪ねた。そこで、「秩父百年の森」代表兼「第3のみつ研究会」代表の坂本裕三と、「第3のみつ商品『秘蜜』」の販売会社「TAP & SAP」代表・井原愛子も加わってもらい、養蜂方法の質疑応答や特許・商標の運用など、実現に向けての話し合いが持たれた。その結果、復興支援という特別な配慮下、同校での特許や商標の無償使用許可が約束された。安達東高校での「第3のみつ」の特産品化は事実上決まった。

（これらの経緯・経過については、2024（令和6）年8月3日発行の白佐俊憲編著『どうなる「第3のみつ」—蜂蜜と呼べない蜂蜜の前途—』に詳しく述べたので、ここでの紹介はこの程度にとどめる）

ここでは、視点を変え、当時、指導に訪れていた青年指導員・寺田篤哉個人に焦点を当て、寺田の初期人生と旧福島県立安達東高校との関係を追ってみることにしたい。なお、「渡辺養蜂場」については、福島県福島市に事務所を置く「採用と教育研究所」の所長・半田真仁のブログに詳しく紹介されている（「株式会社渡辺養蜂場—挑戦から進化—」2017（平成29）年12月1・15日の記事参照）。

以降の話は、養蜂家・寺田篤哉氏（以下「寺田」と略す）に対して「第

3のみつ」に関する取材をした際に、寺田から得た情報・資料を基にして編著者・白佐が綴った物語である。

寺田篤哉とミツバチとの出会い

寺田は、1990（平成2）年6月、埼玉県さいたま市に生まれた。同市の中学校を卒業後、陸上競技（長距離）のスポーツ特待生として、山梨学院高校に、そして山梨学院大学に進学した。

高校・大学時代は、スポーツ仲間と寮生活をしていて、高校では同じスポーツ特待生としてケニアから来ていた先輩の留学生と相部屋で過ごしていた。外国人留学生との同宿生活をとおして、発展途上国に関心を抱き、将来は途上国貢献や国際交流に参加してみようと思うようになっていた。

大学時代、所属の陸上部で日々過酷なトレーニングに励んでいたが、オーバーワークによる半月板損傷で痛めた膝を「蜂針療法」で治療したことがミツバチとの出会いになった。蜂針療法とは、ミツバチの針を患部に刺して治療する民間療法である。

そして寺田は、蜂針療法を受ける過程で知った「アピセラピー研究会」に入会し、蜂針療法の権威者でもある同会副会長の内藤博文（甲府蜜蜂研究所）の弟子に加えてもらい、可愛がられ、養蜂のこともいろいろと教わった。アピセラピー（apitherapy）とは、蜂蜜、花粉、ハチ毒などのミツバチ製品を使用する代替医療のことである。

アピセラピー研究会の会合に参加し、会員同士が交流する過程で、のちにさまざまな形でお世話になり、養蜂や「第3のみつ」生産の指導を受けることになる人々と知り合いになった。

後にいろいろとお世話になる福島県二本松市の「渡辺養蜂場」の渡辺佐吉社長も、埼玉県深谷市の「花園養蜂場」の松本文男社長も、アピセラピー研究会時代からの顔なじみであった。

2013（平成25）年3月、大学を卒業した寺田は、すぐ4月から福島県二本松市小浜の「渡辺養蜂場」で働き始めた。アピセラピー研究会会員の渡辺佐吉社長から養蜂場の従業員として働かないかと誘われたからであった。

3年間働いて養蜂の技術を身に着けたら退職し、その技術を途上国の養蜂の普及・発展に役立てもらおうと、青年海外協力隊に応募する計画だった。たまたま日本に2か所しかない、青年海外協力隊の派遣前訓練拠点が福島県二本松市にあったからである。当初の思いどおり3年後の2016（平成28）年3月末まで、月300時間以上働いて月給15万円の労働に耐えた。

安達東高校と渡辺養蜂場のつながり

2014（平成26）年4月、二本松市下長折真角に所在の「福島県立安達東高校」の遠藤智子教諭から、共に近い距離の岩代地域（旧・岩代町）にあることから、「渡辺養蜂場」へ養蜂技術指導の要望が持ち込まれた。これが最初のきっかけで、安達東高校と渡辺養蜂場とが関係を持つことになり、寺田も同校に親しみを感じていた。（「株式会社渡辺養蜂場」は2010（平成22）年10月、社長・渡辺佐吉によって創業）

同校の「総合学科農業コース畜産班」では、地域産業である家畜として以前からヒツジを飼育していたが、2011（平成23）年3月11日発生「東日本大震災」による放射能土壌汚染の影響で、同校農場での家畜

飼育実習「ヒツジ飼育」を続けられなくなってしまっていた。ヒツジは牧草と一緒に土も食べてしまうので、ヒツジ自体も汚染されてしまうからであった。

実習で飼育する、ヒツジに代わる家畜をあれこれ検討し、養蜂に候補がしぼられたのは、2013（平成25）年も秋を深まっていたころだったと記憶する。

「渡辺養蜂場」の渡辺佐吉社長がミツバチ飼育の技術指導を引き受けたことから、安達東高校では、2014（平成26）年度以降、家畜飼育実習の「ヒツジ飼育」を「ミツバチ飼育」に切り替え、渡辺養蜂場の指導の下で養蜂を始めることに正式に決まった。

早速、学校は、1群の西洋ミツバチを購入し、養蜂振興法第3条で提出を義務付けられている福島県知事宛の「蜜蜂飼育届」を、校長名で所轄の県北家畜保健衛生所（福島市所在）へ提出した。

2014（平成26）年5月から、渡辺社長が養蜂の指導に同校に通い始めた。この年、1群から始めたミツバチの飼育数は3群まで増やした。採蜜は春と秋の2回、つまり百花蜜2種類であった。生産した蜂蜜を販売する機運も高まった。

生徒の発案で、生産販売する蜂蜜の商品名も「あいさつ坂」と名づけられ、同校の美術教師によるデザインでラベルも決まった。安達東高校は、校門から校舎の玄関口まで200mほどの坂道になっており、ミツバチの巣箱をその坂の途中に置いて採蜂をした。その坂路は、通学する生徒たちの爽やかなあいさつと笑顔がいつもあふれていることから、「あいさつ坂」の愛称で呼ばれ親しまれていた。

瓶詰めの蜂蜜は、道の駅「安達」に委託販売し、1瓶90g入りで300

円の値段で販売を始めた。好評ですぐに完売した。

2014（平成26）年12月には、二本松市の広報誌『広報にほんまつ』No.109に、「土を愛し地域を愛する」と題し、安達東高校農業コースの生徒の取り組み（特に、この春から始めた養蜂）が特集で生まれ、6ページを割いて紹介された。

ただ、渡辺社長が高齢で生徒指導に不慣れなこともあり、生徒との間に世代間のギャップが生じ、なかなかコミュニケーションがうまくとれていない面があり、それが課題として残った。

寺田篤哉が指導者になる

そこで、2015（平成27）年度は、教員免許を持っている寺田が、グブアップした渡辺社長に代わって実習科目の担当者になり、高校の農場へ指導に出向くことになった。安達東高校側でも、このことが了承され、寺田が正式に養蜂指導の非常勤担当者となった。

寺田は4月から隔週に学校へ指導に出向いていたが、当時「畜産」の授業科目を履修していた生徒（当時2年生）はミツバチや養蜂に興味を持ってきて、蜂蜜の採取だけでなく、群数を増やすことにも熱心だった。この年の越冬前には6群にも増えていた。

2015（平成27）年度は、遠藤智子教諭が養蜂実習をメインで行う2年生の担任だったこともあり、学校の特色として、養蜂を主に進めていこうとの意向がさらに高まった。同校の農場長であった長南哲也教諭や伊藤仁教諭は、遠藤教諭が動きやすいようにフォローして、学校の中での農業教育のあり方や、地域住民との交流を高めることを意識してくれていた。

2015（平成27）年4月に赴任してきて、農業実習助手として加わった菱沼義和教諭の存在も大きかった。養蜂にかなり興味を高めた菱沼教諭とミツバチの管理について一晩語り合ったことを、寺田は印象深く覚えている。

「第3のみつ」を特産品に提案

2015（平成27）年11月ごろ、寺田は遠藤教諭から相談を受けた。「何か地域の特産品を作りたい。ミツバチ産品とコラボしたものを何かできないか。

また、学校農業クラブという全国的な農業高校の研究や意見の発表の場がある。今の2年生が3年になる来年には、県大会に初出場させたい」ということであった。

そのころ、当時の二本松市長・新野洋から高校発信の何か新しい特産品を作ってほしいとの要望があったとも、寺田は聞いていた。

教師や生徒の案では、二本松市には「玉羊羹」など有名な和菓子屋さんが多いので、蜂蜜入りのどら焼きやカステラの製品、りんごと蜂蜜のジャム製品などが候補にあがっていた。

だが寺田は、そんな事例は全国に山ほどあると思った。そこで、埼玉県にいた時、松本文男や坂本裕三から聞いていた「第3のみつ」の話を思い出し、寺田はこれをやってみたらどうかと学校側に話をしてみた。（寺田と坂本とは、以前に玉川大学へ行った時、松本から紹介され、旧知の仲だった）

「第3のみつ」とは、わかりやすく言うと、ミツバチが植物の花蜜を吸ってつくる蜂蜜とは異なり、ミツバチが果実・野菜等のジュースを吸っ

てつくる蜂蜜のことである。

寺田は、二本松市の東和地区（羽山）はりんごの栽培が盛んだから、出荷の出来ないB級品をジュース化し、それをミツバチに吸わせて「第3のみつ」ができるのではと考えたのである。

さらに、りんごの結実にはミツバチによる受粉が必要なので、相手が高校であれば、巣箱の貸し出しとの交換条件で“くずりんご”を供給してもらう案を示せば、りんご園側はきっとOKするだろうという目論見もあった。

また、ワインを作っている会社「ふくしま農家の夢ワイン(株)」(代表・齋藤誠治)が二本松市木幡にあり、ジュース化の委託加工もやってもらえるという情報も得ていた。

福島県では、「第3のみつ」造りに取り組んでいる養蜂家がいなかった。寺田の脳裏には、地域資源を生かした震災復興のストーリーが思い浮かんだのであった。渡辺佐吉社長にも、これに取り組んで、高校を支援したいと打診してみたところ、その時は「試しにやってみればよい。渡辺養蜂場も協力する」との好意的な返事であった。

安達東高校での、蜂蜜「あいさつ坂」の生産に加えて、新しい震災復興・特産品づくり事業は、寺田の提案した「第3のみつ」の生産案で固まり、具体化することになった。寺田も実現に向けて支援・世話役を引き受けた。

2016（平成28）年1月、寺田は、玉川大学（東京都町田市）で開催された養蜂研修会に「渡辺養蜂場」の渡辺佐吉社長と渡辺義巳部長とともに、安達東高校の遠藤教諭を連れて参加した。

その日、埼玉県深谷市にも出向いた。事前に「花園養蜂場」の松本文

男社長をとおして、「第3のみつ」商標登録者である「秩父百年の森」代表兼「第3のみつ研究会」代表の坂本裕三と、「第3のみつ商品『秘蜜』」の販売会社「TAP&SAP」代表・井原愛子とに、話を聞かせてくれるよう依頼しておいた。

坂本と井原の2人は、秩父市から深谷市の「花園養蜂場」に来てくれていて、そこで皆が合流した。二本松市から行っていた4人は、松本を含めた3人から、「第3のみつ」の仕組みや製法に関していろいろと話を聞かせてもらい、新しい試みに乗り気が高まった。井原からは「第3のみつ」のサンプルももらって帰ってきた。特産品づくりは、これで煮詰まった、と寺田は判断した。

ところが帰宅した直後、渡辺社長の思いが一転した。常軌を逸するとも考えたのであろう。「そんなことをしたら渡辺養蜂場のブランドが落ちる」と言い、「第3のみつ」生産には、渡辺養蜂場は参加しないし、協力もできないと言い出し、気まずい雰囲気になった。

居心地が悪くなったこともあり、寺田は予定どおりに2016(平成28)年3月、3年間で渡辺養蜂場を退職することになった。そんなこともあって、渡辺養蜂場による安達東高校への養蜂指導もこの時点で終了となった。

「第3のみつ」の実現

蜂蜜生産に渡辺養蜂場の協力が得られなくなったのだが、養蜂担当の指導教諭や生徒の養蜂技術は十分に身に着いてきていたので、寺田はあまり心配しなかった。事実、その後、高校側は外部から非常勤教師を招く必要はなかった。

渡辺養蜂場を退職後、寺田は2016（平成28）年3月31日に安達東高校の生徒2人と遠藤・菱沼両教諭と一緒に、再び深谷市の「花園養蜂場」の松本文男を訪問した。秩父市の坂本裕三も花園養蜂場に来てくれていた。

出向いた5人は、養蜂中のミツバチの巣箱の実際の様子を見せてもらい、松本からりんごジュースの製法やそれを加熱し濃縮する適正糖度などについても、細やかな指導を受けた。専用巣箱の無償提供をはじめ、特許・商標の使用についても、保有者の松本・坂本から「無償で許可するからやってみなさい」と、好意的条件で奨励された。

飼料（蜜源）用のジュースにする規格外等りんご（いわゆる“くずりんご”）は、羽山りんご生産農家が低価格で提供してくれることになった。同校の菱沼教諭の知り合いで、当時、地元の羽山果樹組合長兼りんご部会長だった佐藤浩明（佐藤りんご園主）が引き受けてくれた。

ジュース化するりんごの分量は1軒からの購入でまかなえた。以降も、結局、ずっと「佐藤りんご園」1軒との契約分で満たせた。

ミツバチにりんごをエサとして与えるにあたって、果実を^{あっさく}圧搾して果汁ジュースにしなければならないが、初年2016（平成28）年2月下旬の製造作業は、学校が地元の加工会社の「ふくしま農家の夢ワイン（株）」（代表・齋藤誠治）に委託する形で、りんごを運び込んでもらった。同時に、生徒は実習指導も受けることができた。

ジュースの濃縮化作業は、加工業者の助言指導を受けた生徒の手で校内の機器を使って実施し、無事に終わることができた。加工業者から教わった製法で、2年目以降は、ジュースの濃縮化は校内で生徒が行えるようになった。

これらに必要な諸経費は、学校の予算の実習費から支出された。

作った濃縮ジュースを飼料（蜜源）として、花蜜源が少なくなる時期（夏から秋にかけて）に一時期、校地内設置の蜂場で西洋ミツバチ（蜂蜜「あいさつ坂」生産時と同じミツバチ群）に与え、蜂蜜に転化する新しい方法はなんとか軌道に乗った。

「第3のみつ」の生産過程で、試行錯誤を重ね工夫を要したのは、給餌するりんごジュースの糖度の確定であった。試作品は初め糖度16%だったが、ミツバチはエサとして吸おうとせず、巣箱内で発酵させてしまった。そこで、糖度を20%、30%、…と高めていき、花蜜に近い糖度40%のものを与えると吸い出し、貯蜜をするようになった。また、ジュースを入れた給餌器の中でハチが溺れることがあった。これは、発泡スチロールの「浮き」を液中に浮かばせる工夫をして解決した。

かくして、2016（平成28）年度以降、安達東高校の生徒たちは、蜂蜜「あいさつ坂」を生産するかたわら、「第3のみつ」づくりにも意欲的に取り組んだのであった。

寺田が青年海外協力隊の派遣で出国したのは翌2017（平成29）年3月だった。寺田は、退職してからの約1年間、派遣待機の現地語語学研修等やアルバイトをしていて、時間的にあまり制約を受けなかったもので、定期的に先生たちとメールで連絡しあったり、埼玉県の実家から福島まで何度か通ったりして、安達東高校の先生・生徒の養蜂相談に乗り、一緒に考え、手助けを続けた。

埼玉から松本文男や坂本裕三などの専門家に来てもらい、指導を受けるほどの問題は発生しなかった。

第3のみつ生産品は、二本松市安達地域の鬼婆伝説にちなんだ「おに

はばのなみだ」と名づけられ、1 瓶90g入りで300円の値段で、蜂蜜「あいさつ坂」と同様に「道の駅・安達」などで販売することになった。リンゴジュースを使うので、リンゴ酸が多いのではと予測されたが、成分分析の結果、アミノ酸が通常の蜂蜜の2 倍ほど含まれていることがわかった。

コンテストに応募し優秀賞に輝く

この間に、思いがけない幸運に恵まれた。募集「『新しい東北』復興ビジネスコンテスト」に、その年から新設分野「学生による事業プラン」が設けられたのである。

安達東高校は早速、2016年8月19日締め切りの「同コンテスト2016」に事業計画「Bee（蜂）Ambitious！―養蜂を利用した『第3のみつ』の商品開発―」を応募した。同年11月11日の発表で、学生部門では最高の優秀賞に選ばれた。メディアで紹介され、知名度が一気に高まった。

関連して、数々の栄誉に輝き、各方面から注目され、実践活動に拍車がかかることになった（これらについては、電子書籍の白佐俊憲著『どうなる「第3のみつ」―蜂蜜と呼べない蜂蜜の前途―』随筆春秋ポータル、2024（令和6）年8月発行、p.91～104に紹介されている）。

同校の生徒がコンテストに応募し、受賞した時期、寺田はまだ埼玉の自宅にいたのだが、派遣されて出国する前の準備で忙しくしていた時期と重なり、関わっていない。また、深く関わる必要もなかった。

こうした高校生徒との経験が、寺田の青年海外協力隊（JICA）2016年度4次隊員として、モザンビークでの現地活動で大いに役立った。

モザンビーク滞在時の交流

寺田は、2017（平成29）年3月から2019（令和元）年7月末まで約2年半、アフリカ南部に位置するモザンビーク共和国に派遣されたが、電子メールで安達東高校との交流は続いた。（モザンビークでの活動の様子は、グローバル人材育成センター埼玉（GGS）の「GTNSメールマガジン・リレーエッセイ（全3回：2022（令和4）年12月号～2023（令和5）年2月号）」で詳しく紹介された）

2017（平成29）年11月ごろ、モザンビークの寺田のもとへ、同校から蜂蜜（5瓶）と「第3のみつ」（5瓶）が送られてきた。これには、同校の生徒がまとめた活動記録の冊子も同封されていた。

モザンビークの現地農家を指導する過程で、現地の養蜂家と一緒に、モザンビークの蜂蜜と安達東高校の蜂蜜・第3のみつとの比較試食会をやったり、生徒の記録を話題に、互いの養蜂技術や蜂蜜の性状について話し合ったりして、学びを高める機会をもった。若い高校生の活動とあって感激され、関心は瓶のデザインにまで及び、現地での反応・反響は殊の外大きかった。

この様子をメールで伝えたところ、新聞『福島民報』で取り上げられ、2017（平成29）年12月27日、「甘いハチミツ手に笑顔／アフリカのモザンビーク／安達東高生徒贈る」の見出しで紹介された。

2018（平成30）年3月、一時帰国した際には、安達東高校に指導と挨拶を兼ねて訪問した。生徒は入れ替わっていたが、この時ミツバチは8群にまで増えていた。贈り物の反響を伝えるべく、授業をさせてもらい、生徒にモザンビークの養蜂の現状を伝え、理解を深めてもらい、また、同国との交流や支援も呼びかけた。

一方、2017年11月に送られなかった分の蜂蜜をもらい、またモザンビークに持ち帰って試食をしてもらい、日本の高校生の活動への関心と理解をさらに深めてもらった。

これらの成果は、念願の「学校農業クラブ大会」での発表の実現にもつながった。2019（令和元）年6月4・5日開催の「令和元年度福島県学校農業クラブ連盟意見・研究発表大会」で「第3のみつの品質向上とモザンビークへの近代養蜂技術の支援」と題した発表が最優秀に輝き、東北連盟大会への出場権を獲得した。

同年8月22・23日開催の「日本学校農業クラブ連盟」主催の「第70回（令和元年度）日本学校農業クラブ東北連盟大会（秋田大会）」で「第3のみつの品質向上—近代養蜂技術の支援からみえてきた衛生管理—」と題して発表し、優秀賞を受賞した（これらのことについても、前述の白佐著作書の中でふれられている）。

「アフリカに行って何をしてきたの？」そう聞かれると寺田は、養蜂の技術支援とエンパワメントだと答えている。寺田が現地に入っても世界は変わらないかも知れないが、寺田が現地の養蜂家を勇気付けるきっかけになればと思い活動していた。安達東高校の生徒の話をし、写真を見せ、お互いの活動内容を伝え合う中で、彼らの中に後継者育成というアイデアが出てきた。

そこで養蜂家の子どもを対象とした養蜂教室のプロジェクトを始めた。初めは10人だった生徒数も、寺田の帰国前には36人の大所帯となった。安達東高校の生徒の養蜂に対する思いが、モザンビークに届いたのだ。寺田だけだったら、大人の養蜂家だけがターゲットで終わってしまったところだが、持続可能な活動ができたことは、当時の高校生に大

いに感謝をしたいという。

モザンビークでの珍しい経験

話は横道にそれるが、寺田はモザンビークで面白い体験をしているので、ついでに紹介しておきたい。

「蜂蜜 (honey, comb honey)」の定義は、国際規格 (CODEX) で、天然の「①花の蜜をミツバチが集めた花蜜、②メカルファ (アブラムシのような小さい昆虫) 等の分泌液をミツバチが集めた甘露蜜」の2つとされる。(国内でも、これに準拠している)

これ以外の蜂蜜は、現にミツバチが集めた蜂蜜であっても、何らかの形で人の手が加わっているという理由で排除されるので、表向き「蜂蜜」とは言えない。

そこで国内では、坂本裕三らによって名づけられ、商標登録された「第3のみつ」の呼び名が一般に普及している。

モザンビークでのフィールド調査中、寺田は思いがけない場面に出くわした。熟して木から落ちてわれたマンゴーの果実 (その果汁) にミツバチが群がっていた。乾期で花が咲かない時期だったので、おそらく貯蜜に回すほどの量はなかったと思われるが、これは前の定義のどれに当てはまるのだろうか。

前の定義のどれにも当てはまらない、と寺田は思う。人の手は加わっていないが、①でも②でもない。言ってみれば、天然の「第3のみつ」ではなかろうか。国際規格に基づいて厳密にいうと、アフリカで生産の蜂蜜は、こうしたものも混ざっていて、もしかすると100%蜂蜜ではないということになってしまうのかもしれない。

余談になるが、マンゴーは自然に自生し、たわわに実るので誰でも自由に食べ放題だという。ゆでて食べる習慣もある。加熱するとぐんと糖度が増えて甘味が強くなる。熱帯の高温下では、熟して落下した実は、太陽と地熱で暖められて、自然にミツバチが好むほどに糖度が増すというわけである。

また、寺田が派遣隊員赴任中に発生した事件がある。寺田たちの奨励で養蜂家が増えたことで、巣箱があちこちに置かれた。蜜源植物が少ない時期、サトウキビ工場にミツバチがサトウキビの汁を吸いに入り込み、警察をも巻き込む事件になった。

関係者に賄賂を渡し、工場近くに置いたミツバチの巣箱を遠くへ引っ越すことで、何とか事なきを得たが、このとき作られた蜂蜜は、半天然の「第3のみつ」だったと言えるのか。

このように事例をあげていくと、蜂蜜の定義①②にも当てはまらない、「第3のみつ」とも違う「その他の蜂蜜」もあり得ることになるだろう。想像を巡らせてみれば、こうした事態の発生は、モザンビークとか、アフリカとかに限られることではないと言えるだろう。(例えば、フランス北東部で見つかった青や緑の蜂蜜は、お菓子廃棄物処理工場のチョコレート廃液をミツバチが持ち帰ったものだった)

見方を変えれば、地球規模の環境の変化、気象の変動に対応して、ミツバチが適応し存続し続けるために進化して、食料の幅を広げて生存に必死になる姿だとは受け止められないだろうか。飛躍した例外と笑われるかもしれないが……。

寺田は思う。ミツバチだけでなく、蜜源も、蜂蜜そのものもまた変化し、現在の国際規格の定義では対処できない例が次々と出てきて、将来、

定義の変更を余儀なくされるような気がしてならない。

思い出とその後

寺田が直接かかわっていた当時を振り返ってみると、うれしかった思い出がある。2年生の生徒十数人の中の2人は、寺田がコーチをしていた二本松市内のランニングクラブの教え子だった。

寺田が安達東高校で養蜂を教えているという理由で、進学先を同校に選び、農業コース畜産班を選んだと、彼らは寺田に教えてくれた。その1人は、親が農家ではなかったが、そこから農業の面白さに目覚め、高校卒業後有名な農機具メーカーに就職し活躍している。

2019（令和元）年7月末に、寺田は帰国したが、その後すぐマラリアを発症し、危篤状態に陥ってしまった。

何とか快復した同年10月4日に、また安達東高校に帰国の挨拶を兼ねて訪れ、「モザンビークの養蜂とエンパワーメント」と題して、全生徒を対象に報告と感謝の講演をする機会を得た。

同校生徒の養蜂活動は8群飼育と以前と同様に活発で、その年の商品化販売は、蜂蜜「あいさつ坂」の生産も、第3のみつ「おにばばのなみだ」の生産も、意欲的に継続されている様子にほっとした。

その後は、2020（令和2）年3月に遠藤智子教諭が他校に転勤したことや新型コロナ禍の行動自粛もあり、寺田と安達東高校との交流は途絶えた。（その後の状況は、前述の白佐著作書の中で詳しくふれられている）

(付記) 近況

寺田篤哉は、35歳となった今、移住してきた梅の産地でもある埼玉県入間郡越生町で暮らし、2022（令和4）年4月から始めた「寺田養蜂園」で養蜂と梅で新規就農しながら、地域活性化の各種運動にも積極的に参加している。（写真は寺田養蜂園の蜂蜜）



こんな寺田が「第3のみつ」を意識しながら、1例「梅果実汁の研究」を語った。現住地が梅の生産が盛んであることから、寺田は、梅を蜜源とする蜂蜜も生産できるのではないかと考え、検討している。

寺田たちにとって、梅は、果物の中ではカリウムや鉄、ビタミンEなどの栄養素を豊富に含む優良食品の1つなのだが、何と言っても、すっぱい味が特徴である。この酸っぱさは、主に有機酸（特にクエン酸）の含有量の多さにあり、人々の好みに大いに影響する。たまらなくおいしいと言う人もいれば、嫌って食べない人も少なくない。

ミツバチには、全体として梅の花蜜の味は好みに合わないようで、開花期を迎えても訪花する個体は少ないし、花蜜を吸う個体もほとんどない。したがって、自然の梅花を蜜源とする蜂蜜の生産は、今のところ不可能で諦めざるを得ない。

それでは、梅の果実汁をエサに使うのはどうかと思い、生梅汁と砂糖

で糖度40%の甘い梅ジュースを作り、ミツバチに与えてみた。「第3のみつ」作りを試みたのである。結果、確かに蜂蜜は作られた。だが、ミツバチが蜂蜜として貯めたものは、正直、寺田の口には合わず、おいしいと言えるほどの蜜にはなっていなかった。味としては、梅ジュースと梅ジャムの間といったところであろうか。

梅ジュースを作る手間暇を考えると、あまり実用的ではない。目新しさはあるが、製品化しても商品として、リピーターが付くようなものは、とても思えない。

「第3のみつ」が邪道だとされる最大の理由から言えば、ハチにエサとして与えた原料の梅ジュースは、まさに砂糖を混ぜて加熱して作ったまがいものである。国産天然蜂蜜を扱う養蜂家の矜持（プライド）に反してまで商品化する代物とは、到底言えない。「第3のみつ」に関心を持つ寺田だって、今はどう考えてもその気にはなれない。

しかし、発想を転じて、人が食べる「第3のみつ」としてではなく、夏季の花蜜不足期にミツバチに与えるエサとするのはどうだろう。養蜂業界では、冬季に蜂蜜の代用のエサとして、砂糖水などをミツバチに与えるのは、公然の常識である。

同様に考えて、健康で元気なミツバチを育てる方法の1つとして、暑い夏を乗り切るためのエサとしてミツバチに梅ジュースを与えることは、その機能成分からみて極めて有効かもしれない。これまでにない革新的なエサとして注目されることになるかもしれない。

こうした発想をふくらませた仮説を立てながら、今後も寺田は、新しい蜂蜜の発見・開発・改良に向けて、実践的試行の挑戦をさらに続けたいと思っている。

(補足) ヒツジ飼育を養蜂に転換し成功した要因

旧福島県立安達東高校の養蜂への転換は、2017（平成29）年5月発行の、農林水産省『平成28年度食料・農業・農村白書』にも事例として紹介された高校での唯一の成功例だった。

東日本大震災時の原発の放射能汚染による影響を避けて、復興時に安達東高校農業コースが従来のヒツジ（^{めんよう}綿羊）飼育を諦め、ミツバチ飼育に転換して成功した主要因・背景は何だったと考えられるか。

安達東高校が震災・原発事故によるヒツジ飼育を断念し、ミツバチ（養蜂）に転換して成功した背景には、いくつかの複合要因がある。主な要因・背景を整理すると、以下の8点が考えられる。

◎放射能汚染によるヒツジ全頭処分……東日本大震災後の原発事故によって、安達東高校が飼育していたヒツジは「全頭殺処分」となった。この痛手は大きかったが、同時に「家畜を持つことのリスク」を学校が身をもって体験したともいえる。放射性物質によるリスクと管理コストが非常に高くなることを経験したため、よりリスクの低い代替を模索する動機になった。

◎地理的・生態的条件の適合性……安達東高校は山間地域にあり、周辺には菜の花やクローバーなど蜜源植生が豊富という、養蜂に非常に適した環境があった。このような環境は、ミツバチが花から十分な蜜を集められるという意味で大きな強みであった。百花蜜「あいさつ坂」が容易に生産された。

◎少ない初期投資と運営コスト……ヒツジなどの大型家畜と比べて、ミツバチは飼育・管理コストが相対的に低い。巣箱を設置して管理すればよいから、放射線リスクを考慮しながらも復興期の学校にとって現

実的な代替手段になった。

◎段階的な実践と技術の習得……安達東高校の農業コースでは、まずミツバチの生態を学ぶところからスタートし、地元養蜂家の指導の下で試行錯誤を繰り返しながら、3年目には生産は安定した。このような段階的な導入が成功につながったと考えられる。

◎革新的な「第3のみつ」技術の導入……彼らは「ミツバチに野菜や果物の果汁を吸わせて、それを蜂蜜に転化させる」という独自技術を導入した。人脈に恵まれ、その技法を伝授される機会を得た。この「第3のみつ」によって、単なる普通の蜂蜜にとどまらない特色ある商品を生産できた。商品名「おにばばのなみだ」が生産・販売された。

◎ビジネス・マーケティングへの取り組み……復興ビジネスコンテストで優秀賞を受賞した。専門家の派遣を受けて技術や生産性を高めた。道の駅（道の駅「安達・智恵子の里」）や首都圏（例：上野駅）などで生徒が蜂蜜を販売した。生徒が瓶詰めやラベル貼りなど、蜂蜜の製造から販売までを手作業で行うことで「手仕事」や「思いのこもった商品」として付加価値を出した。地元パン屋とのコラボ（「ハニートースト」）も販売した。

◎風評被害の克服・復興のメッセージ性……蜂蜜という安心・ナチュラルな製品を作ること、福島産への信頼回復や風評被害払拭の手段となった。学校として「地域と復興に貢献する」という意味を込め、「あいさつ坂」などシンボリックな商品名を付けていた。

◎人材育成・教育としての価値……生徒にとって、養蜂は生物の観察、巣箱管理、収穫、加工、販売など多様な体験ができ、技術・経営・コミュニケーションなど総合的な学びとなった。また、実習により地域の養

蜂農家や専門家とつながる機会ができ、コミュニティとの協働が進んだ。

総括的にいうと、次の4点に集約できる。

◎リスク回避と現実的代替……原発事故で家畜リスクが顕在化したため、ヒツジからミツバチへの転換は、放射線リスクや補償コストを回避しつつ、安定した農業実習を継続するための合理的な選択だった。

◎地域資源の活用……周辺の花々という天然の蜜源を活かせる環境があったこと、そして学校がその環境を最大限利用して商品化を図ったことが強みであった。

◎イノベーションとブランド化……蜂蜜を作るだけでなく、独自技術（第3のみつ）を導入し、「あいさつ坂」のほかに「おにばのなみだ」としてブランド化し、高付加価値化したことが、商品としての魅力を高めた。（下写真）

◎教育・復興・社会貢献の融合……生徒の学び、地域との協働、復興支援、風評被害の払拭など、多面的な目的をうまく統合したビジョンを持っていた。



伝道放送に養蜂家が出演

伝道放送に出演した養蜂家

キリスト教関連の教派超越的（エキュメニカル）な伝道テレビ放送番組『ライフ・ライン』（全国的に週1回早朝30分間放送、PBA＝太平洋放送協会制作）がある。（プロテスタント的価値観を強く含むことから、プロテスタント派の伝道放送ともみなされる）

『ライフ・ライン』の番組名称については、公式サイトによれば、英語の“lifeline”すなわち「命綱」と直訳でき、さらに「災害時には道路・電気・ガス・水道など、日常生活にどうしても必要なものの総称」としても用いられる言葉だと説明されている。番組は、この「命綱」としての日常に欠かせない存在になり得る「人生の大切なライフ・ラインとは何か」を、さまざまなゲストの語りと聖書の言葉を通して共に考えていくことを目指しているとある。つまり、『ライフ・ライン』には、「人生を支える存在（人生の中で本当に大切なもの）とは何か」を探求し、視聴者の心に寄り添う「命綱」のような存在でありたいという願いが込められているとされる。

放送開始は1989（平成元）年4月2日で、35年以上続く番組である。2025（令和7）年3月23日には、養蜂指導の有資格者・養蜂家の長野英雄が出演し、「はちみつは天からの恵み」（番組No.1895）と題して、地元「HBCテレビ」で放送された。内容は、自ら手掛けて生産した越谷

産蜂蜜の製造販売と、自然の恵みを生かした生活への活用について語られた。また、蜂蜜搾りの実演も行われた。番組提供のPBAに確かめてみると、テレビ番組『ライフ・ライン』においては、「はちみつは天からの恵み」が、蜂蜜・養蜂と聖書の言葉の関連テーマとして、初めてのものであったことがわかった。聖書には、何度も「みつ（蜂蜜）」が比喩として登場する。

そんな意味づけもあり、興味深かったので、放送内容を文字起こしてみた。動画抜きの話の進行なので、十分に伝わるかどうか、いささか心もとないが、放送の流れを再現して紹介したい。

なお、長野英雄は、埼玉県越谷市在住の養蜂家で、越谷産の自然蜂蜜を生産販売している。蜂蜜&ハーブの店『空花』^{そらはな}も経営している。「日本はちみつマイスター協会」の認定講師資格を持ち、「越谷市の自然が育む魅力ある蜂蜜を日々の生活に生かしてほしい」と、地元のワークショップイベントで講座も開いている。蜂蜜搾りの実演とともに、蜂蜜の魅力について語る。

以下は、蜂蜜絞りの実演をしながら、キリスト教徒・長野が蜂蜜の魅力を語ったものである。最後



に、関根弘興牧師の説教が加えられている。

以下の流れの冒頭の括弧書き略語は、「長野」は長野英雄の話、「語り」はナレーションの部分を示す。話し言葉の一部には、話に通じるように加筆修正・用語補足をしている。分量の関係で一部で短縮・削除も加え

たものである。

「はちみつは天からの恵み」のテレビ放送

（語り）埼玉県越谷市、この日、蜂蜜とハーブの店『空花』にはお客さんたちの賑やかな声が響いていました。このカフェで販売している越谷産蜂蜜は、こちらの長野英雄さんが作っています。奥さんの津多子さんがこのお店の切り盛りをしています。長野さんは、越谷市の自然が育む魅力ある蜂蜜を日々の生活に生かしてほしいと、地元のワークショップイベントでの講座も開いています。今日は長野さんに、蜂蜜搾りを実演していただくとともに、蜂蜜の魅力について語っていただきます。早速、長野さんの養蜂場に案内していただきました。

（長野）巣枠のハニカム構造のところにミツバチたちが盛り上げていて自分の巣を作っていく。これに5月頃の蜜が多い時はあっという間にいっぱいになっちゃう。

（語り）まず準備をしたのは燻煙機（ミツバチに煙を吹きかけておとなしくさせる道具）。この煙でミツバチたちを落ち着かせるのだそうです。ミツバチを驚かせないように、ノックしてから巣箱を開けるんですね。（巣箱の中を見せながら）こういった状態で、たくさんのミツバチがいます。

（長野）（養蜂場での巣箱から蜂蜜取り出しの実演）巣枠（六角形の穴が並んだ『巣礎』が貼り付けられている）が1、2、3、4、5、6、7ですから、7枠に1万4000匹いるわけです。1枠に2000匹いる。これが3枠以上いなければ、冬を越せない。

（手にハチが群がる）何もしていないのに、これだけ刺されちゃった。

これ針の痕です。

（語り） この日は、ミツバチたちは興奮気味です。長野さんは手袋を取り替えて仕切り直しです。

（長野） これが巣、これに蜜がたっぷり溜まっているとこね。白い幕のフタ（ミツロウ）で巣房がふさがっているでしょ。これ完成品です。

冬の間は、こういうふうに密集して集まって、ひたすら巣の中で過ごして、自分の筋肉で熱を出して、この巣箱の中を34℃くらいに保っている。ですから、日中の暖かい時しか開けられない。これまた元の温度まで戻すのは、ハチも相当のエネルギーを使う。

巣門（ミツバチの出入り口）から出入りしているハチをよく見てみるとね、足に黄色くくっつけてるのが花粉なんですね。花粉を持っているやつは飛んできたら、すぐ即座に自分の巣に運び入れる。花粉が自分たちのご飯になりますからね。

巣門の周りにたむろしてるのは、守衛さんです。たむろして遊んでいるわけじゃなくて警備している。

（語り） そして今度は、お店でワークショップでも行っている蜂蜜搾りを実演していただきます。

（長野） 皆さん、蜂蜜についてはよくご存知かと思います。パーフェクトフードということの中で、ただその真髄についてはなかなか触れる機会がないということで、私の店『空花』では本物の、取ってきたばかりの蜂蜜を搾って、その実際の何も引かない、何も加えない本物の蜂蜜を味わっていただきます。蜜搾りの実践講座を開いて、皆さん方に、こういうふうにして蜂蜜というのは取れるんですよ、作るんですよということを紹介させていただいております。

(搾る前の巣枠を見せて) これがミツバチが採った蜂蜜ですね。これ1枚両枠分合わせて、だいたい2キロあります。2キロぐらいの蜂蜜を溜めるのに、最盛期にはほんの幾日もかからない、1週間か10日ぐらいで一杯にしちゃうぐらいの勢いで集める。

(語り) スタッフが味見をさせていただきました。

(長野) 巣房の蜜はそのまま試食していただいて結構です。この上のやつはミツロウといっていわゆる蜜ブタ(ミツバチが蜜の保存のために巣穴をミツロウでふさいだフタ)をしたときのロウですから口当たり悪いですけど、特に食べても問題はない。

(語り) さて、そのお味は？(試食したスタッフ)「美味しいです」

(長野) このミツロウというのは、ものすごい歴史があるけども未だかつて、人工の蜂蜜っていうのはこれだけ科学も進んでもできないと言われております。ということで、こちらのほうは、このままでは蜜ブタがされていて搾りきれないので、まずこれを蜜ブタを剥がす作業をします。これがいわゆるミツロウで、ロウソクとかキャンドルの材料になる。これを遠心分離器(巣枠から蜂蜜を絞り出す道具)の中に入れていきます。(手動の遠心分離器で実演する)

(語り) 奥さんの津多子さんがアシスタントを務めます。

(長野) 綺麗に片面だけ、蜜が搾れている。これがまだ採れていないほう。これは搾りたて。これを反転してこちらの外側に向けます。周りの縁のところに搾れたやつが付いているのが見えますか？これからそれを搾ります。取り出し口に二重のフィルターが付いてますね。

うちの蜂蜜は何も引かない。ここで一部の人は足す場合もある。足すというのは、熱を足す。なぜ熱を足すかというのは、かなり蜂蜜には粘

度、粘りがあるので、気温が低かったりすると、どうしても落ちが悪くなるから。熱を加えることによって落下速度が全く違っている。見てもらえば分かると思うんですけど、これがものすごく時間かかるわけです。この小さいメッシュの中を通す。その熱を足すことによって作業効率は上がるけども、その分、本来備わっている栄養とかが喪失する。俗に蜂蜜の温度が45℃から崩壊して、60℃に達すると、単なる甘いお水、砂糖水と同じになってしまう。

これを商品にするには、80%の糖度がなければ販売してはならない。日本の場合は78%、世界の共通では80%。2パーセントは何かというと、日本は湿度が高いので、2パーセントのおまけ分ということです。

（語り） 搾った蜂蜜の糖度を測ってみると……。

（長野） 皆さん見てください。その白とブルーのところの境目が糖度を示します。

（スタッフ） 80を超えていますね。

（長野） じゃあ合格ですね。

（語り） 次は、蜂蜜の魅力について、長野さんに語っていただきます。

（長野） 蜂蜜に関しては、最近結構、いろいろな講座が開かれています。日本はちみつマイスター協会のほうに私は入会しています。というのは、由緒があるっていいですか、やはりもう前々からあって、それなりの地位が確立されているということで、その講座を受けました。まず最初にその中のアドバイザーという資格、それを取って何年かすると、上級段階のテストを受けて、蜂蜜マイスター中級講座を受ける。そして認定講師という資格を得られる。これを取らせていただきました。これを取るによって、より蜂蜜の素晴らしさというか、効果・効果をお

伝えられるのではないかということで、そちらを選んで資格を取得したわけです。

その中で、実践養蜂をやっている、なおかつ講座を受けるという人も何人かいらっしゃいますけれども、かなり少ない。養蜂が未経験でも講座を受けに入ってくる人もいます。それだけ今の時代、天然のた蜂蜜の素晴らしさを知りたい、極めたいという人が結構集まってその講座を受けています。

蜂蜜との出会いはもう半世紀以上前で、私はもともと農家の息子として生まれて、父親と富山の薬屋さんとかが友達でした。富山はこの時期になると寒いですから、越冬のために実家の垣根のところに巣箱を15箱、20箱置いていた。その頃からハチというのは怖いもんだと思ったけども、その人は平気で取り扱っている。それで蜂蜜は甘いというのは、もともと子供ながらに認識していましたから、たまたまそのおじさんがいない間にずっと巣箱を上げて見てましたから、それでちょっと失敬して、今みたいにストローがない時代、麦わらをストロー代わりにして飲んだところ、砂糖とは違う。この甘味は何だと思った。それが蜂蜜に接する出発点かなというふうに改めて思います。

端的にいうと、蜂蜜は非の打ちどころがない。悪いところを言ってくださいって聞いても、答えられる人は誰もいないと思う。これは講座の中でも話しますけど、まずマイナスのところを探すのが大変なくらい。美容から健康から全て網羅をしている。というのは私がマイスター講座で学んだことは、栄養素が300種類のビタミン、酵素、ミネラルが入っている。全世界にミツバチがいる。集める花の種類が違う。花の蜜の栄養素が違うから、当然そのぐらいの成分もあるだろうと言われてい

る。数えたことはないですけども、通常言われるのは少なくとも150から180超はあるでしょうか。

これは講座の中でも話をするけど、唯一欠点は2つある。1つは、皆さんご存知のとおり、蜂蜜を生後1歳未満の乳児に与えると乳児ボツリヌス症を発症することがある。いわゆる乳児が食べた場合に死亡例があるということ。それは本当にごくごく少ないけれど、それが1つある。もう1つの欠点というか、ネックは金額が高いこと。

よく講座の中で話をするんですが、人間の脳というのは全体の身体の2%、でもカロリーを消費するのは20%。脳のカロリーというのは、ほとんどブドウ糖だと言われている。ブドウ糖というのは、いわゆる砂糖もブドウ糖なんですけど、砂糖からとったブドウ糖というのが2糖類（2つの単糖類が結合してできた糖）。それを分解して、実際にエネルギーになるのは、相当時間がかかるけれども、蜂蜜についてはすでに分解されているので、即エネルギーになる。ですから、お子さんが小さい時受験をするときは、まずカロリー制限を考えながら蜂蜜を与えるのが一番リフレッシュできるし、頭の回転も良くなるということ。

美味しい食べ方は、美味しくはないという人はいないんですけども、今ちょっとこだわっているのは、いわゆるいいとこ取りです。というのは、今私は、毎日、蜂蜜、ココア、きな粉、この3種の混合を朝と夕方食べています。これらは先ほど言ったように、便秘にもいいし、下痢にもいいし、美容にもいいし、本当に非の打ちどころがない。ただし、そのためにはやはり本物の何も手を加えていないミツバチが作った素のものを常にご利用していかなければならない、そのことを今後も伝えていきたい。

（語り） 長野さん夫妻はクリスチャンです。聖書と蜂蜜についてお話ししてください。

（長野） 世界で一番読まれている聖書の中にも、蜂蜜はいろいろな箇所に出てくる。その教えの中に1つとして出てくるの有名な箇所は、出エジプト記。ファラオから離れるために、モーセがエジプトから乳と蜜の流れ出るカナンの地へ行った。あそこの聖書にはすごくインパクトがある。その後も含めていっぱいいろいろな箇所に出てくる。というのは、それよりかは前に、この創造された方は、すべてを整えた後に、人をそこに置かれた。そういった中で、それをきちんと伝えていかなきゃならない、素晴らしさを。特に今の自然破壊とか、いろいろなものがあるし、養蜂を通して、いろいろな生き物に対する思いが出てくる。どんな小さなものでも、命はあるんだ。この自然を大事にする、自然を次の世代に受け継いでいかないといけないんだ、と。

だって私たちの一番もそんで生まれた時ってのは、すべて作られた中で、やりなさいよというふうに示されているわけですよ、何不自由のないところが。私たちが作ったもの何もないわけですから、何不自由なく暮らせるように備えてくれたわけですよ。そこが私は原点だというふうに思っている。というのは、蜂蜜は、ハチが蜜を採るほかに、ポリネーション（ミツバチが野山や畑を飛び回って行う花粉の交配のこと）といって交配の割が一番効果的というか、ミツバチだけではなく、主にミツバチが交配を手助けをする、そういう特性があるということの中で、だからそのミツバチが全滅したら世の中の植物が70～85%がなくなる、ということは、食べ物もなくなる。するとおのずから、人も生きられなくなる、というふうに言われています。まさしくその通りだ

と思います。

こんな素晴らしいやはり環境というのが作られたんだから、これを維持していくためにもっともっと関心を持って、自然のほうに目を向けて自然を守っていただけたら一番嬉しいかなということの中で感じるところです。今の時代殺伐として人を憎んで人を愛せないという時代の中で何を学ぶかといったらそういったことを学ぶわけではないかなという。養蜂を通して自然を学ぶことが多い。それを自分の趣味の養蜂だけではなくて、講座とかを通して子供たちにも伝えていきたい。

バイブルコーナー（出演：関根弘興^{ひろおき}牧師＝神奈川県小田原市所在『城山キリスト教会』牧師）

おはようございます。関根弘興^{ひろおき}です。今日は、日本はちみつマイスター協会認定講師の長野英雄さんをご紹介しました。自然が育む魅力ある蜂蜜を日々の生活に生かしてほしい、何も足さない、何も引かない、純粋な蜂蜜にこそ価値があるということを強調して話されていましたね。聖書を読むと蜂蜜はとても馴染みのあるものとして度々比喻として引用されています。例えば、箴言の16章というところを読むとこんな言葉が出てきます。「親切なことばは蜂蜜。たましいに甘く、骨を健やかにする。」（箴言16章24節：新改訳2017）

私たちが毎日使っている言葉はどうでしょうね。魂に苦く、心を気落ちさせる、不健康にさせる、というような言葉はありませんか？ 私たちは日々語り、また聞かされている言葉によって生活しているわけです。もしお互いの生活の中で、魂に甘く心を健やかにする、まるで蜂蜜のような言葉を自分自身の糧としていただくことができれば、それは

さらに生活を豊かにしていくと思いませんか？ でも言葉というのは、その人の根底にあるものが出てくるものです。例えば、人生は全て虚しいのだと考えたら、そこから出てくる言葉もまた、虚しい言葉が出てくるでしょう。しかし、人生には意味があるし、私という存在がかけがえのない大切な存在なのだとか心の底でうなずくなら、人に対しても全く違った温かな言葉がでてくることでしょう。私たちは何を語り、何を聞くのかということ、これはとても大切なんですね。

そして皆さんにぜひ知ってほしいことがあります。それは神様があなたに語りかけている言葉があるということです。旧約聖書の詩編の119篇というところにはこんな言葉が書かれています。「あなたのみことばは 私の上あごになんと甘いことでしょう。蜜よりも私の口に甘いのです。」（詩篇119篇103節：新改訳2017）このように書かれています。神様が聖書を通して語り続けているあなたへの言葉は、思わず私の上あごになんと甘いことだろうと、言わしめるほどの甘さなのだということですね。なぜそう思うのでしょうか。それは神様があなたをかけがえのない大切な貴い存在として見ていてくださり、語りかけてくださっているからなんです。そして、聖書が約束しているのは、誰でも信じる者は救われるという非常に単純明快、混ぜ物なしの素晴らしい約束なんですね。あなたの最善のためにいつも働いてくださっている方が、今日も聖書を通してあなたに語りかけていることをぜひ知ってください。それはあなたを健やかにし、あなたにとっての生きた言葉となるのですから。

増える日本ミツバチ飼育

増えている日本ミツバチの飼育

一般に、日本ミツバチは、西洋ミツバチに比べて寒さに強く、疫病やダニに強いという利点がある。また、西洋ミツバチの蜂蜜とは異なり、日本ミツバチの蜂蜜は、様々な花の蜜がブレンドされた「百花蜜」であり、熟成された濃厚でコクのある味わいが特徴である。ただし、採蜜量は少なく、野生の群れを捕獲して飼育する必要があるため、養蜂業には不向きであった。

ところが最近、「週末養蜂」という言葉も聞かれるように、趣味で小規模に日本ミツバチを飼育する人が増え、静かなブームになっているという。テレビや新聞で取り上げられることも増えた。増加の背景には、飼育のしやすさにあり、条件が整えば、都市部でも飼育可能であることや、自然との関係を求める趣味的な関心の高まりがあると考えられる。日本ミツバチの飼育増加は、自然とのつながりを求める現代人のライフスタイルを反映しており、今後もこの傾向は続くと見られる。

日本ミツバチは、以前は飼育が難しいとされていたが、飼育マニュアルやオンラインコミュニティ、養蜂講座などを通じて情報が入手しやすくなった。それほど高度な知識や技術を必要としないため、家庭菜園のような感覚で、自家製蜂蜜を収穫できるのが魅力である。庭の木に取り付けた巣箱に小鳥がやってきて住み着くように、巣箱を置いておく

と、日本ミツバチがやってきて巣を作る。やがて自然と巣が大きくなって、蜂蜜を採ることができるというわけである。

2025（令和7）年2月10日、福岡県の福岡市や糸島市を主な活動拠点として、日本ミツバチの巣箱を設置し蜂蜜の生産をして、養蜂の魅力を伝えている普及団体「JBeeFarm」（代表・柗田孝輔）が、自らのホームページで「巣箱制作キット」の製作販売と解説「巣箱の設置場所について」を発表した。その発信情報の要点を以下に紹介したい。（右写真は「巣箱制作キット」を組み立て、設置されている場面を示した）



日本ミツバチの巣箱の設置場所（詳細解説例）

「日本ミツバチの巣箱を設置するにはどのような場所が良いでしょうか？」とよく聞かれるが、「あなたがその場所にいて心地良いと感じる場所、ストレスに感じない場所」と答えている。ミツバチが空き家の床上や床下にしばしば巣を作るのはなぜなのか。具体的にはどんな場所がミツバチにとっても人間にとっても良い場所と考えられるのか、いくつかポイントを抑えて説明する。

（1）設置場所のポイント

◎周辺に蜜源がたくさんある

巣箱設置場所の周辺に雑木林や街路樹などが多いと、蜜源も豊富で

ミツバチにとっては有利な場所になる。また、巣の成長が早くミツバチにとっても負担が少なくなる。さらに、既に多くのミツバチたちが生息している可能性が高いため、春の誘引もやり易い場所となる。

周辺がどのような環境であるかをグーグルマップなどで確認する。逆に、人口林や広大な畑や田では蜜源は多くない。人間が住んでいる地域には庭の樹木など、意外と蜜源は多い。

◎ 音や振動となるストレスがない

ミツバチは振動を嫌がる。一時的な振動では多少怒る程度であるが、継続的に発生する振動では群が逃避してしまうこともよくある。トラックなどが頻繁に走行する大きな道路に面した場所や、近くに工事現場がある場所などは避けた方がよい。また、エアコンの室外機の側に置くことは避ける。室外機の振動や音はミツバチにとってもストレスになる。静かに暮らせる場所がミツバチにとってもよいはず。

◎ 風通しがよい（水はけがよい）

ミツバチにとって、一番の大敵は湿気である。湿気が多いと巣内にカビが発生し、ミツバチが病気になり易い条件となる。最悪、群が消滅してしまうことがあるので、できるだけ年間を通して風通しのよい場所に設置する。特に、冬場の湿気は注意を要する。風通しが悪く、陽も当たらない建物の北側になる場所は最悪である。

春から秋のミツバチ活動期には、頻繁に花蜜を集め巣内で乾燥させるため、巣内は湿気が充満する。ミツバチは、集めた花蜜を乾燥させるため、自身の^{はね}翅で巣内外の空気を循環させるので、巣箱周辺は乾燥した状態にする。ミツバチにとって、換気のための労力が減る。

巣箱を^{たんぼ}田圃に置かない方がよい。田圃の土壌の中は常時水分を含ん

でいる可能性が高く、下から湿気が上がってくる。水はけのよい場所を選ぶ。

◎ ミツバチの通り道がある

巣箱の出入口周辺はミツバチの活動が激しくなる。ミツバチは直線的に飛行移動するので、その付近に障害物となる木の枝や壁などがあると、出入りが難しくなる。また、秋にはスズメバチの襲撃がある。ミツバチが緊張して、捕まらないように普段よりもさらにスピードを上げて出入りする。庭などに置く際には、巣箱入口から庭の外までの飛行コースが確保できるような空間を作っておく。周辺の草刈りなどを行い、飛行ルートを確認する。巣箱周辺の草刈りは風通し対策にもなる。

◎ 霜が降らない

内陸部の盆地など、すり鉢状になっている地形では、冬場に霜が降りやすくなる。こうした土地でのミツバチの越冬は厳しい環境になる。空気が溜まりやすい盆地では、夏場は暑く冬場は冷え込むので、巣箱の設置はなるべく避ける。このような場所での巣箱の設置は、できるだけ地面から離れた高い場所を選ぶ。巣箱を置いている地形を確認する。

◎ 夏場は木陰になり、冬場は陽が当たる

ミツバチにとって、夏場の暑さは大敵である。炎天下、巣箱をそのまま置いておくのはミツバチにとって地獄である。暑さで巣が溶けて巣落ちが発生する。巣落ちの衝撃で女王蜂が死亡し、群が全滅してしまうことがあるので、できるだけ木陰などに設置する。そのような場所に置けない場合は、^{すだれ} 簾などで日除け対策を実施する。落葉樹の下に置くと、夏場は^{ひよ}日除けとなり、冬場は日差しが差し込むので、理想的である。

◎ 周辺で農薬や殺虫剤が撒かれない

周辺が畑や田であれば、時期に応じて農薬や殺虫剤が撒かれる。水に溶けた薬剤をミツバチが巣内に持ち込んだり、薬剤が風に乗って巣内に直接入り込んできたりすることで、被害が及ぶ。周辺に畑や田がある場所は、できるだけ避けるべきである。

毛虫が出る春先や6月の田圃の除草剤散布、夏場の青物野菜の農薬散布、夏場から秋にかけての稲のネオニコチノイド系農薬散布などは、被害が顕著に出やすい。ミツバチだけでなく、人間にも見えない形で入ってくるものなので、十分に気を付ける。

住宅地の街路樹などにも殺虫剤を散布するケースが多く、ミツバチがけいれんしながら死んでしまうこともある。

◎周辺で煙を焚^たかれない

よく、プロの養蜂家が西洋ミツバチに煙を吹きかける光景を見かける。煙の材料（スギの葉と聞いている）を選んで吹き掛けているらしいので、ミツバチにとっては大きなストレスにはならないと思われる。しかし、野焼きなどで発生する煙は、ミツバチにとっては大変辛いものとなる。かつて、巣箱の3mくらいの近い場所で野焼きをされて、ミツバチが豹変したことがある。温和だった群が凶暴化し、最後は消滅した。周辺でバーベキューなどをするような場所で、巣箱を設置するべきではない。また、周辺で焼き畑をするような場所も避けるべきである。

(2) ミツバチ目線で考えるように心掛ける

最初に巣箱を設置するときは、人間目線で考えがちである。庭に置きたい時、「ここに使っていないスペースがあるから丁度よい」とか、「ここは人間が通るからダメだ」とか、何事も人間の都合で設置するケースが見受けられる。

しかし、ミツバチにとってその場所がよいかどうかは全く別の話である。人間にとって都合のよい場所が必ずしもミツバチにとって適切な場所ではないということを前提に、設置場所を検討してみる。もし、ミツバチにとって適切な場所でないとは判断されるときは、その場所には設置しないということである。

(3) 設置場所は最初の場所にこだわる必要はない

最初はどうしても自分の庭に置きたいとか、マンションのベランダに置きたいとかと思うかもしれない。しかし、現代社会では近隣住民の理解を得るのも大変である。自分の庭に置いたが、苦情がきて巣箱を移動させたというケースは珍しくない。

そのために、次の設置計画を考えておくことも重要である。自分で土地を購入して巣箱を設置するのもよいが、知り合いの空いている土地の一部を貸してもらうことでもよいと思われる。謝礼はお金で支払う必要はない。採取した蜂蜜の一部を分けてあげるのもよい。地主にとっては休眠地で蜂蜜が採れるとなれば、喜んで次の土地も紹介してくれるはずである。使わない土地は有効に活用する。

(4) 住宅地では近隣住民からの苦情は覚悟する

降雪地帯は別として、ミツバチは越冬中の太陽が出る暖かい日などには時々外を飛び回る。その際に、周辺の干してある洗濯物や白壁に黄色い糞をすることがある。最近は洗濯物に柔軟剤などを加える家庭も多く、その強い香りに引き寄せられたミツバチが洗濯物を汚す場合が見受けられる。新興住宅街などでは白壁が多く、その壁にも糞をすることがよくあり、苦情が寄せられた結果、巣箱を泣く泣く移動させるケースもある（昔からある集落などではそのようなケースは少ないようである）。

あるが)。

周辺の住民には、日本ミツバチの飼育を理解してもらうことが大事だが、すべての人に理解してもらうのは大変な労力を要する。できるだけ新興住宅街などは避けるべきである。

最初の1年ぐらいいは身近にミツバチが存在すると勉強にもなるし、自宅周辺の環境がわかってくるので、置いてみてもよいと思われる。いつ苦情がきて移動してもよいように、移動先の場所を早めに見つけておく。

日本ミツバチの巣箱の設置場所（諸説のまとめ）

（1）要点

ミツバチが太陽光を認識しやすく、風通しが良く、湿気がこもらない場所を選ぶことが重要である。具体的には、午前中に日が当たる場所、午後は木陰になるような場所が理想的である。

また、巣箱の出入口は南東向きがベストで、朝日に当たるとミツバチの活動が活発になるからである。

（2）設置場所の留意点

◎ 日当たり……午前中に日が当たり、午後は木陰になるような場所がよい。

◎ 風通し……湿気がこもらないように、風通しの良い場所を選ぶ。

◎ 出入口……南東向きがよい。

◎ 周辺環境……騒がしい場所、振動がある場所、農薬が散布される場所などは避ける。

◎ 高さ……地面から2メートル以上の高所に設置すると、蛇などの外

敵の侵入を防ぐことができる。

◎ 近所迷惑……住宅地などに設置する場合は、近隣への配慮が必要である。

(3) 設置場所の選び方

◎ ミツバチが住みやすい場所を探す……ミツバチが住みやすいと感じる場所が、人間にとっても住みやすい場所だと考え、それらを踏まえて場所を選ぶ。

◎ 日当たりと風通しの良い場所を選ぶ……日当たりの良い場所、風通しの良い場所、湿度の低い場所を選ぶとよい。

◎ 鳥などの外敵から襲われにくい場所を選ぶ……人通りがある場所などがよい。

◎ 安全な場所を選ぶ……騒がしい場所、振動がある場所、農薬が散布される場所などは避ける。

◎ 近隣への配慮をする……住宅地などに設置する場合は、近隣への配慮が必要である。

(4) 設置場所の移動

巣箱を一度設置したら、近距離に移動させることは避ける。ハチが迷ってしまう可能性がある。どうしても移動させる場合は、一度2 km以上離れた場所に移動させ、数日間ハチを飛ばしてから元の場所に戻るのがよい。移動は夜間に行うと、蜂が巣箱に戻りやすくなる。

巣箱には、単箱と^{つぎばこ}継箱があり、働きバチの数に応じて使い分ける。「単箱」は、ミツバチの巣箱の基本となる単層の巣箱で、ミツバチの住まいとして、巣作りや活動の場として重要な役割を果たす。ミツバチの数が増えると、「継箱」（「継ぎ箱」とも書く）を追加・重ねて多層にして、

より大きな空間を確保してやる。

JbeeFarm推薦の養蜂技術参考図書（出版日は初版発行日）

◎久志富士男著『我が家にミツバチがやって来た—ゼロから始めるニホンミツバチ養蜂家への道—』高文研・発行、2010（平成22）年3月15日出版、全206ページ。

◎吉田忠晴著『ニホンミツバチの飼育法と生態』玉川大学出版部・発行、2000（平成12）年1月25日出版、全136ページ。

◎日本在来種みつばちの会編『日本ミツバチ—在来種養蜂の実践—』（新特産シリーズ）農山漁村文化協会・発行、2000（平成12）年3月31日出版、全175ページ。

◎角田公次著『ミツバチ—飼育・生産の実践と蜜源植物—』（新特産シリーズ）農山漁村文化協会・発行、1997（平成9）年1月1日出版、全173ページ。

◎佐々木正己著『ニホンミツバチ—北限のApis cerana—』（ペーパーバック）海游舎・発行、1999（平成11）年1月1日出版、全191ページ。

◎Juergen Tautz著、丸野内棣訳『ミツバチの世界—個を超えた驚きの行動を解く—』丸善・発行、2010（平成22）年7月1日出版、全300ページ。

◎藤原誠太著『だれでも飼える日本ミツバチ—現代式縦型巣箱でらくらく採蜜—』農山漁村文化協会・発行、2010（平成22）年5月30日出版、全143ページ。

◎岩波金太郎著『はじめての自然養蜂—自然巣枠でラクラク—』農山漁村文化協会・発行、2022（令和4）年3月22日出版。全128ページ。

（補足）見直される在来種（日本）ミツバチ

農林水産省や業界関係者の見解によると、明治末期以来、長年、「外来種（西洋、セイヨウ）ミツバチ」を扱ってきた経験があるからこそ見えてくる「在来種（日本、ニホン）ミツバチの良さや、その見直されているポイント」があるという。多面的ではあるが、それらの主な点を整理して、次に示しておきたい。

在来種（日本）ミツバチが見直されている主な観点

◎病害・寄生虫（ダニ）への抵抗性……日本ミツバチは、西洋ミツバチと比べて、ヘギイタダニ（ミツバチ寄生ダニ）に対する耐性が高いという研究がある。また、外来種で問題になる病気・寄生虫への耐性が在来種にある点も、持続的な養蜂・遺伝資源として重要視されている。

◎低温・悪天候下でも活動しやすい……農研機構の報告によれば、日本ミツバチは西洋ミツバチよりもかなり低い気温でも飛翔・訪花活動を行う能力があり、曇天や雨天でも訪花する個体が見られる。これは、寒冷地や気候変動下での安定的な訪花・採蜜という観点で強みになっている。

◎天敵への防御能力……日本ミツバチはオオスズメバチなどに対して「熱蜂球（ヒートボール）」防御を行うことが知られており、在来種ならではの適応戦略を備えている。

◎環境適応性・レジリエンス……最近の研究では、日本ミツバチは都市化や土地利用の変化（例えば、緑地が分断されたエリアなど）に対して比較的強く、適応している可能性があるという報告がある。これは、持続可能な養蜂や生態系保全の観点で非常に有望である。（レジリエンス

= 困難やストレスに直面した際に、しなやかに立ち直る回復力や弾力性のこと)

◎ 生態系・遺伝資源としての価値……遺伝資源という点で、日本ミツバチは西洋ミツバチとは異なる形質（気温への適応、ダニ耐性など）を持っており、将来的な品種改良や保全の観点から注目されている。

◎ 花資源の利用性／採蜜の特徴……西洋ミツバチは特定の蜜源を効率よく探す傾向があるのに対し、日本ミツバチは複数の花を巡る「百花蜜（多花蜜）」を集めやすいという特徴がある。この多花蜜傾向は、在来植物との共存や地域特有の蜜源を活かす養蜂で魅力的である。

◎ 少量だが風味豊かな蜂蜜……養蜂家・趣味養蜂の間では、日本ミツバチの蜂蜜の量は少ないが濃厚・複雑な風味がある、という評価がある。この希少性・個性は、特産蜂蜜や高付加価値商品のマーケットでも強みとなっている。

◎ 伝統・地域文化・生物多様性の観点……「日本在来種みつばちの会」などの活動を見ると、在来種（日本）ミツバチを守り、生物多様性を支えるという視点が強くなっている。また、在来種を扱う養蜂は、地域の自然や伝統と結びついた文化的な価値を持つことができる。

考慮すべき課題

もちろん、見直された良さが日本ミツバチにある一方で、すべてが西洋ミツバチより優れているわけではない。例えば、①一群あたりの蜂数が少なく、採蜜量も大幅に少ない。（西洋ミツバチに比べて商業量は限られる）②飼育の難しさもある。在来種は性質が野生的な面があり、管理が難しいという意見もある。③分蜂（群分裂）管理や女王バチ育成な

どでの技術的な課題もある。

総合評価（長年、西洋養蜂をしてきた視点から）

◎ リスク分散という意味で、在来種（日本）ミツバチを導入・併用する価値が非常に大きい。特に、病害・ダニ問題、天敵（スズメバチ）、気候変動への耐性という観点から。

◎ 高付加価値蜂蜜のビジネスチャンスとして、日本ミツバチの蜜は希少性・風味の面で魅力がある。

◎ 生態系保全・地域貢献の観点で、在来種養蜂を通じて地域の自然や生物多様性を守るといった社会的意義も強い。

国や養蜂業界の動き

最近、国や業界レベルで「在来種（特に、日本ミツバチを含む花粉媒介昆虫）」を支援・活用する方向で、いくつか対策が進んだり提案されたりしている動きがある。ただし、「完全に在来種ミツバチ養蜂だけを大きく促進する」政策というよりは、広く花粉交配用昆虫（ミツバチ・マルハナバチなど）を安定確保する枠組みの中で、在来種を含めた多様性を重視する支援が出てきている、という段階と見るほうが実態に近い。次に、主な最近の動きと、課題・限界を整理する。

（1）農林水産省による「持続的生産強化対策」

令和5年度・令和6年度ともに、農林水産省が「持続的生産強化対策事業」の中で 養蜂等振興強化推進（地域公募型）をおこなっており、これは花粉交配用昆虫（ミツバチ・マルハナバチなど）を安定的に確保するための支援を目的としている。

◎この公募事業は、園芸産地と養蜂家との連携を支援、蜜源植物の植栽、花粉交配の体制づくりなどが補助対象になる。

◎公募主体には「在来種マルハナバチを利用する団体」なども含まれており、在来の花粉媒介昆虫利用を広げる枠組みが明示されている。

(2) 花粉交配用昆虫の安定確保

◎農林水産省は、交配用昆虫（ミツバチ、マルハナバチ、ビーフライなど）を「省力化＋受粉確保」の観点で重要視しており、政策資料でも「花粉交配用昆虫の安定確保」を掲げている。

◎特に、在来マルハナバチを試験的に利用する場合の経費支援がある、と明記されている。

◎ただし、この支援スキーム自体は「在来種（日本）ミツバチ」だけを対象にしているわけではなく、より広い交配昆虫の一部として位置づけられている。

(3) 市民参加型の保全調査

◎国立環境研究所などの研究グループが、市民参加型データを使って日本ミツバチ（およびマルハナバチ類）の分布や送粉機能の分布をモデル化・推定するプロジェクトを進めている。

◎これは純粋な「養蜂振興」よりも「生物多様性保全＋生態系サービス（受粉機能）」の観点が強い。

◎こうした科学的基盤が強まれば、将来的に保全政策や支援制度の優先地域を定める際の根拠になる可能性がある。

(4) 学術・現地レベルでの養蜂者の声

◎対馬の日本ミツバチ養蜂者を対象にした研究で、里山環境や社会環境の変化が養蜂の持続に与える影響が報告されており、地域政策や支

援の必要性が指摘されている。

◎これは「養蜂を続ける担い手＋地域の自然環境をどう結びつけて守っていくか」という課題を浮き彫りにしていて、政策・支援の議論材料になる可能性がある。

(5) 課題・限界

◎在来ミツバチ特化の補助制度は限定的……現時点では、農水省の補助金制度は「花粉交配用昆虫全体（ミツバチ＋マルハナバチなど）」を対象にしており、明確に「日本ミツバチを増やす／在来ミツバチ養蜂を拡大する」ためだけの大規模な予算というよりは、より広い交配昆虫活用の枠での支援という位置づけである。

◎技術・知見の普及……日本ミツバチは管理が難しいという養蜂家の声もあり、効率的な養蜂技術を持つ人や当てはまる地域に限られる可能性がある。

◎生態系とのバランス……在来種ミツバチを増やすこと自体は望まれるが、植生変化や土地利用変化、気候変動への対応が必要である。市民参加型の分布調査はよいが、政策に落とし込むには時間がかかる。

◎経済性……日本ミツバチは西洋ミツバチに比べて採蜜量が少ない傾向があるため、商業養蜂として拡大する場合、経済的な成果報酬（インセンティブ）をどうつくるかが課題となる。

[考究] 蜂場権の慣行

「転地（移動）養蜂」における「蜂場権（縄張り）」の慣行については、本シリーズの『日本の養蜂歴史概観』p.138～141でも、「ミツバチ不足は養蜂業界の『縄張り意識』が原因？」として採りあげた。

その際には、2009（平成21）年10月開催の同年度日本地理学会秋季学術大会で発表された「なぜミツバチ不足は生じたのか？—養蜂業におけるなわばり問題からの考察—」（発表者：北海道大学大学院、^{ゆ ほら} 柚洞一央、『日本地理学会発表要旨集』76号、「抄録」p.130）から、要点を抜粋する形で紹介した。

この研究発表後15年以上を経過した今日、果たして指摘されていた課題は円滑に改善されているであろうか。そうあると願いながら、若干の検討をさらに加えた。

2025（令和7）年10月時点で、公立鳥取環境大学大学院の准教授である柚洞は、以前から国内外での聞き取り調査を中心として、養蜂業における花蜜資源利用の実態について明らかにしてきた。学位論文題名が「日本の養蜂業における自然資源利用の動態」であり、いくつかの関係論文を発表している。現在も「養蜂からみる人と自然のつながり」などを研究テーマとしている。

ここでは、「蜂場権（縄張り）」の慣行について、さらに検討範囲を広げ、深掘りの考究を試みたいと挑戦してみた。

古くて新しい、避けて通れない課題か

約70年も前の古い文献の中から1つの具体的見解を紹介することから始める。それは、次の月刊誌記事である。

松田正義著「續・炉辺蜂談」『月刊ミツバチ』10巻3月号（No.108）、1957（昭和32）3月1日発行、p.65～73の70～71（蜂場問題）。

【松田は、現在の「株式会社クインビーガーデン」（本社・静岡県静岡市清水区）の創始者。1931（昭和6）年8月1日、静岡県清水市で創業。経験豊かな転地養蜂家であった】

少し長くなるが、文意をそこなわないように、原文のまま、部分転載したものである。

蜂場権

花と蜂と人が養蜂生産事業の3条件である。花は蜂場であり、蜂は蜜蜂であり、人は養蜂家である。三位一体でどの1つが欠けても養蜂生産事業は成立しない。とくに花は第1条件であつて、蜜源花こそ養蜂業の基本である。従って「蜜源花にとり囲まれた蜂場の有無が養蜂家経済の基礎である。そのため、「蜂場」こそ蜂飼が血まなこになつて求め、生命がけで確保しようとするのも当然である。有利な蜂場が確保されない養蜂業は絶対経済的には成立しないのである。蜂場が保証されなければ年間の養蜂計画は立てられない。よい蜂場がなければどんな充実した蜂群を持ち、どんなに優秀に養蜂技術を持つていても何にもならない。蜂場の確保ができぬとなると、その人は養蜂を放棄せねばならない。

いつどれだけくるかわからない蜂群をあてにしさへ蜂場権があるに

かわらず、作付反別のわかっている養蜂に蜂場権が確立されていないのがおかしいのである。とくに花粉交配量でなく、蜜源花に反比例する採蜜量で養蜂経済が成立っている日本では全く蜂場権というものが真剣に考えられるべきものかもしれない。もつともこれはあくまで養蜂者同志の内部で調整されれば文句はないが、おそらく1人の横車をおす人間があればダメになってしまうから結局転地規制の省令や条例の力をかり業者内部の規正をせぬとそれこそ蜂の巣をついたようになるだろう。だからこの蜂場問題が公平にしかも養蜂振興法の精神にそって解決されぬと日本の養蜂の基礎は根底からくつがえり、団体の強化等はとうてい望むべきもない。

養蜂業者の争いの主因

一定地域の蜜源花の量がきまっている。その定量の花から他の人よりも沢山採蜜しようとすれば、他の蜂飼がなるべく遠くへ行って自分だけがその中心に入りたいというのは人情だ。そのため近くへよつてくる蜂飼に対して好ましくない感じをもち始めるのは当然である。ましてや自分が多年排蜂と斗つて開拓した蜂場へ一片の挨拶なくおしかけてきたりしたら目のかたきに考えるのも当然だ。又1年の中でその1花だけを主要蜜源として楽しみにしていたところへ何百の蜂を隣ヘデンとおかれたら1カ年の苦労も水泡にきして全くエサばかり与える養蜂になってしまう。こうした定地対転域は転地家同志の争い、有限の蜜源に対して蜂合せして常に白眼視しているのが養蜂業である。だから蜜源花のはなれた養蜂家同志はなかなか仲がよいが近いほど仲が悪い。これが養蜂団体がまとまりにくい主因である。自分の生活権にむすびついた利害関係で争った感情のもつれが共通の大問題があつても協

力して仲よく立上れない原因である。(以上が引用転載)

昔から、養蜂家仲間はいかんともしがたい悩みを抱えていた。

蜂場権の概要

次に、蜂場権（いわゆる「縄張り」）、つまり、養蜂業における花蜜資源の利用権について、5つの観点からごく簡単に概説する。

(1) 蜂場権とは何か

蜂場権とは、養蜂家が特定の土地や地域において、花蜜・花粉などの蜜源植物を利用してミツバチを飼育する事実上の権利（慣習上の利用権）を指す。法的には明確な物権・債権として規定されていないものの、長年の慣行に基づき、「先占優先」「地域的な縄張り」として尊重されてきたケースが多い。

(2) 蜂場権の発生起源

蜂場権の起源は、近代養蜂が日本各地に広まった明治末期から大正期の転地養蜂の発達にある。転地（移動）養蜂が盛んになると、同一地域で複数の養蜂家が競合するようになり、蜜源の取り合いやハチの混群・病気感染のリスクを避けるため、地域ごとの「先来者優先」の慣行が自然発生的に形成された。

(3) 蜂場権の歴史概要

戦前・戦後を通じて、蜂場権は地域共同体や養蜂組合内での慣習的調整ルールとして維持されてきた。特に、昭和中期（1950～70年代）には、果樹園・牧草地などとの共存のため、農家と養蜂家との協定が進み、蜂場の使用料や範囲の取り決めが行われるようになった。ただし、法的保護が曖昧なため、紛争が生じた際は、慣行・地域協定・民事上の不法

行為などを根拠に個別判断されてきた。

(4) 昨今の法制定と蜂場権

2020年代に入り、『養蜂振興法』（旧『養ほう振興法』の改正）や『家畜伝染病予防法』などの整備によって、転飼届・設置届の義務化や地域調整が制度化されて整備されつつある。しかし、「蜂場権」そのものを法的権利として明文化する規定は存在しない。

現行法は主に「届出制度」「衛生・安全管理」「地域調整」を目的としており、蜂場の優先使用权や慣行的縄張りは、依然として「事実上の権利（慣習権）」の域にとどまっている。

(5) 現今の転飼における蜂場権の諸問題

現代の養蜂では、①蜜源の減少（里山・野草地の減少）、②大規模営蜂業者の進出、③異業種（果樹授粉依頼など）との競合、④環境配慮・景観問題などが複合的に影響し、蜂場の確保をめぐるトラブルが増えている。特に、届出制と慣行権との齟齬（届出を先にした新規業者と、昔から利用してきた先占者との対立）や、行政による調整の限界が課題である。そのため、今後は、地域協定・組合調整・行政指導などによる「地域ルールの特明確化」が求められている。

要するに、蜂場権は、法的権利ではなく慣習的・事実上の使用权として成立・維持されてきたものであり、現代の転飼養蜂においては、環境変化と法制度のはざまで、新たな調整メカニズムの確立が課題となっている。

蜂場権（縄張り）の慣行は「必要悪」か

地域・制度・養蜂規模によって事情が大きく異なるが、以下に一般的・

概念的な論点を示してみる。

(1) 慣行が「必要」とされる理由（肯定的立場）

◎養蜂効率と蜜源確保……例えば、移動養蜂（転地養蜂）に関するハンガリーの調査によると、移動を行う群では1コロニーあたりの収量が高かったという報告がある。その中で、「養蜂家が土地所有者の許可を得て蜜源地（bee pasture）を使う際に、しばしば蜜あるいはギフトを土地所有者に渡す」という慣行が確認されている。つまり、移動養蜂を効率的に行うためには、「どこに蜂場を設けるか」という場所の確保が鍵になり、そのための慣行（「この土地を使わせてください」「代わりにギフトを差し上げます」）が構築されてきたわけである。

◎土地所有者・地域との関係性の維持……養蜂家が単にどこでも蜂箱を置くと、土地所有者・地域住民とのトラブルになりがちである。実際、養蜂雑誌などでは「土地所有者に対してギフトとして蜂蜜を渡すのが標準的慣行である」と紹介されている。このような慣行があることで、土地使用・設置場所に対する地域住民・所有者の理解が得やすくなり、結果的に養蜂事業を継続しやすくなるという意味で「必要」と言える。

◎養蜂場の混雑・競合回避……蜜源が限られている地域では、複数の養蜂家のコロニーが集まると、蜜源の競合や健康リスク（飢餓・病害）などが起きやすくなる。移動養蜂をする上では、適切な「場所」を確保し、他者との競合を避ける「縄張りの」な調整が実務上必要とされてきたという背景もある。例えば、ハンガリーの調査では、蜂場使用料としてギフトを支払う養蜂家の割合が高く、「場所使用」の暗黙的調整が行われていたことが確認されている。

(2) 慣行が「悪（または問題）」とされる点・懸念

◎所有・使用の不透明さ／公平性の問題……「土地を使わせてもらう代わりにギフトを渡す」慣行は、形式的には合意のもと行われていても、法的・制度的な裏付けが弱い場合がある。土地所有者・養蜂家・地域住民の間で認識が異なれば、後でトラブルに発展する可能性がある。また、養蜂家が強い立場にあれば「事実上の縄張り」を確保し、他の養蜂家の参入を阻むという構図になると、公平な競争や地域の養蜂産業の活性化を阻む側面も考えられる。

◎環境・生物多様性のリスク……蜂場が固定的に「この場所は俺の場所」というような状態になり、蜜源が偏ったり過剰利用されたりすると、蜜源植物への影響、生態系への負荷、あるいは養蜂場間の蜜源競争が激化して健康リスク（飢餓・病害）を高める可能性がある。移動養蜂の議論では、養蜂場の設置・移動・群数・蜜源管理・病害防除など、場所使用のルール整備が課題とされている。

◎地域・住民との紛争・調和負担……蜂を置くことで近隣住民にとっての「蜂の飛翔・刺傷・騒音・水源競合」等の不安が生じる場合がある。養蜂場の場所利用を「慣行上暗黙に認められた権利」として扱うと、住民との合意・説明責任・安全対策がおろそかになり、地域トラブルの原因になりやすい。実際、蜂場設置に関して「隣接地の住民が刺された」「飛行ルートが歩行者に近い」などの報告もネット上にある。つまり、「慣行ゆえに放置された場所利用」が地域の良好な関係を損なう可能性がある。

◎規制とのズレ・制度化の遅れ……養蜂場の移動・設置・群数・蜜源利用・土地使用についての法制度・規制が地域によって整備途上な場合がある。例えば、蜜源地利用や蜂場設置の明確な権利・契約・料金体系・

衛生・バイオセキュリティのルールが不十分なまま「慣行」で運用されていると、将来的に制度化の波（例えば、環境保護・土地所有者保護・地域住民の安全）との間で摩擦が生じる可能性がある。

(3) まとめの整理：必要悪か、慣行としてどう捉えるか

転地養蜂における蜂場権（縄張り）の慣行は、養蜂を続けていくために実務上“仕方なく”生じてきた合理的な慣行であり、言ってみれば「必要な悪」と捉える側面も確かにある。ただし、単に「仕方ない慣行」だったからと言って無批判に維持すべきというわけではなく、制度化・透明化・地域調和の観点から改善・再整理が求められているとも言える。

これらのことは、次のように整理できる。

◎長所……①養蜂家に蜜源地を確保する手段を提供し、移動養蜂の効率化に寄与している。②土地所有者・地域住民との関係を潤滑にする慣行として機能している。

◎短所・リスク……①所有・使用権が曖昧、恣意的・競合的になりうる。②生態・環境・地域調和の観点で制御が弱いとトラブルになりやすい。③法制度・契約・地域ルールとの整合性が取れていない地域がある。

ゆえに、養蜂事業を持続可能に、かつ地域と共生して行くなれば、「慣行」から「明文化された合意・ルール・契約」に移行していくのが望ましいと思われる。

A I モードによる蜂場権問題の整理

人工知能（A I）に、転地養蜂における蜂場権（縄張り）問題の整理を求めると、次のようにまとめられた。

転地養蜂における蜂場権（縄張り）は、蜜源の確保と養蜂家同士の

トラブル回避という点では合理的な側面がある一方で、新規参入の障壁や硬直化した業界構造につながるという側面もあり、「必要悪」とも捉えられる複雑な問題である。

(1) 蜂場権が必要とされる背景

◎蜜源の有限性……特定の地域で、ニセアカシアやレンゲといった蜜源植物の花が咲く時期は限定されている。無秩序に養蜂家が集中すれば、蜜源が不足し、蜂蜜の採取量が減るだけでなく、ミツバチ同士の競争が激化して群が弱るリスクが高まる。

◎トラブル回避……蜂場の場所が重なると、蜜源をめぐる争いや、病気の蔓延、農薬被害といった問題が発生する可能性がある。転地養蜂を行う養蜂家同士が話し合い、それぞれの蜂場の配置を決めることで、こうしたトラブルを未然に防ぐ。

◎経営の安定化……経験を積んだ専業養蜂家が長年の実績に基づき、優良な蜜源を確保できることは、経営の安定につながる。

(2) 蜂場権の「悪」とされる側面

◎新規参入の障壁……長年の慣行として暗黙の了解で成立している蜂場権は、新規に養蜂を始めたい人にとって大きな障壁となる。良い蜜源の場所はすでに古参の養蜂家によって押さえられていることが多く、競争力の低い場所しか確保できないことがある。

◎硬直化した業界構造……蜂場権が優先されることで、実力のある養蜂家が新しい場所に進出することが難しくなり、業界全体の活性化を阻害する可能性がある。

◎ミツバチ不足と蜜源の減少……養蜂家の高齢化と減少、そして開発による蜜源植物の減少が深刻な問題となる中、蜂場権が新規参入を妨

げること、問題の解決を遅らせる要因となりうる。

(3) 今後の展望

この「必要悪」とも言える慣行を乗り越えるためには、養蜂家同士の協調と、蜜源をめぐる新しいルール作りが求められている。

◎情報の共有と適正配置……地域ごとの蜜源情報やミツバチの飼育状況を共有する仕組みを作り、より効率的で公平な蜂場の配置を検討する。

◎多様な養蜂の普及……従来の採蜜を目的とした養蜂だけでなく、農作物の受粉を目的とした養蜂（花粉交配用ミツバチ）の需要が高まっている。これにより、蜜源の取り合いを回避し、養蜂家の多様な活動を促進することができる。

◎ルール整備……農林水産省などが関与して、転飼許可制度をより実態に合わせた形に見直すなど、法的な側面からのルール整備も必要とされる。

結論として、蜂場権はこれまでの養蜂業界を支えてきた慣習であるが、持続可能な養蜂産業を築くためには、その負の側面を克服するための変革が必要とされている。

トラブル回避のため、養蜂家に求められる事項

転地養蜂において、実務レベルで「合理性を守りつつトラブルを避ける」ために、養蜂家に求められる（求められてきた）事柄は何か。ここで、改めて問い直しておきたい。以下に、養蜂家に求められる主な項目を整理して示す。

◎法令・届出の遵守……養蜂振興法により、養蜂者は飼育届を出す義

務がある。例えば、各都道府県では「毎年1月末日までに届出」する必要がある。また、他県間での蜂群の移動（転飼）については、都道府県知事の許可を必要とする。ポイントは、届出・許可を適切に行うことで、行政・地域・他の養蜂者から信頼を得やすくなる。

◎土地・設置場所・使用許諾の確認……蜂場（巣箱を据える場所）を設ける際には、土地所有者や管理者の了解・同意を得ておくべきである。例えば、都道府県から毎年、「巣箱を配置する場所の地主の了解を得るとともに、近隣の住民や他の蜜蜂飼育者とのトラブルが発生しないよう十分配慮してください」との告示が出される。ポイントは、土地所有者・地域住民・他の養蜂者との事前コンセンサスがトラブル防止につながるからである。

◎周辺環境・近隣との配慮……巣箱設置にあたっては、「周辺住民への刺されるリスク」「蜂の飛翔・糞害・蜜源の競合」など配慮を促すガイドラインがある。例えば、都道府県は、「新たに巣箱を設置する際は、周辺住民への危害や糞害の発生防止および周辺の飼育者との蜜源植物の競合防止に努めてください」とする。ポイントは、近隣住民に対して説明をおこなったり、位置選定・飛行ルート・蜂群数を工夫したりすることが大事だからである。

◎衛生管理・病害防除の実践……養蜂振興法改正後、「ミツバチを飼育する者は、衛生的な飼養管理を行う等ミツバチの適切な管理に努めるものとする」との規定がある。他の蜂群・野生蜂・蜜源植物との接触を通じて病害が伝播するおそれがあるため、移動養蜂においても特に注意が必要である。ポイントは、定期的な健康観察、病害発見時の迅速な対応、転地先環境の衛生チェックが欠かせないからである。

◎蜜源管理・環境資源との調和……蜜源（花・植物）の状況・配置・競合状況を把握することが、蜂群の健全な活動と周辺環境との共存につながる。例えば、「蜜源をめぐるトラブルの発生防止」が養蜂の環境課題として挙げられている。ポイントは、転地養蜂の場合、「移動先になぜその場所を選んだか」「蜜源の状況」「他の養蜂家との群数バランス」などを事前に確認しておくことが合理的といえる。

◎他の養蜂家・地域との協調・情報共有……蜂場配置・転地移動などでは、地域内の他養蜂家や行政、土地所有者などとのあらかじめの相談・合意がトラブルを防ぐために重要である。例えば、群配置の適正化を「飼育届の内容について事前に地域の蜜蜂飼育者と調整を行いましょう」とする自治体もある。ポイントは、例えば、移動スケジュール・設置場所・群数などを地域で共有し、重複・競合を避けると安心である。

◎透明性・説明責任……養蜂家が設置・移動を行う際、地域住民や土地所有者に対し「なぜこの場所か」「蜂群数・飛翔範囲・刺傷リスク」「蜂の管理方針」などを説明できると、信頼関係を生みやすい。ポイントは、パンフレット、掲示、説明会などを用意しておく、またトラブルが発生した際の対応もスムーズになる。

これらの確実な実践のためには、次のようなチェックリストを用意しておいて確認するのが有効なコツだとされている。

◎チェックリスト例（転地養蜂特有の観点も含めて）

- ☐移動先選定時に、土地所有者・管理者の同意取得、設置位置・アクセス・蜂の飛行経路を確認。
- ☐現地の蜜源状況を事前に視察し、他養蜂家の状況・群数のバランス

を把握。

□転地予定の日時・群数・設置数を地域・関係者に予告・共有。

□巣箱設置後、近隣住民に対して挨拶・連絡先掲示・問い合わせ窓口を確保。

□養蜂群の衛生チェックを定期実施（病害、蜂数、群勢など）。

□周辺住民からの苦情（蜂の飛来・刺傷・糞など）に迅速に対応する仕組みを準備。

□群数増減・移動の予定変更があれば、地域や行政に速やかに報告。

□蜜源が枯渇・競合激化・環境変化が起きそうな場合は、早期に別の場所または群数削減を検討。

□記録を残す（設置場所、日時、群数、移動ルート、関係者同意書など）。

以上を実践することで、「慣行としての蜂場権・縄張り慣習」に依存しつつも、トラブルを最小化し、移動養蜂の合理性を高めることが可能である。

多いトラブルと新たな調整メカニズムの確立の方向性

次に、蜂場権をめぐる実際に多く発生したトラブル例と、そうした問題を踏まえた新たな調整メカニズムの方向性を整理してみる。

（1）蜂場権をめぐる主なトラブル例

◎先占者と新規転入者との対立……内容：昔から地域で養蜂を続けてきた先占者がいる場所に、新規の養蜂家が行政届を出して蜂箱を設置。／結果：蜜源の奪い合い・群の混入・病気感染などが発生。／原因：行政の「届出順」優先と、地域慣行の「先占優先」が食い違う。

◎蜜源地・農地の利用権限をめぐる摩擦……内容：果樹園や休耕田を借りて蜂箱を設置したが、地主が他の業者にも許可を出し、複数養蜂家が同じ範囲で蜜源を共有。／結果：花粉交雑・農薬散布のタイミングなどで衝突。／原因：土地所有者の理解不足と、養蜂の空間的影響の認識欠如。

◎移動・転飼時の調整不足による地域紛争……内容：他県・他地域から移動してくる転飼養蜂家が、地元組合への事前連絡なく設置。／結果：「外来業者が地元蜜源を荒らす」との不満や、地域組合による排斥。／原因：組織的な連絡網の欠如・地域調整ルールの不統一。

◎環境・景観・観光との摩擦……内容：観光地や住宅地近くでの蜂場設置により、住民苦情（刺傷・恐怖感・景観悪化など）。／結果：行政指導や撤去要請。／原因：養蜂の社会的説明責任の不足・地域合意形成の欠如。

◎気候変動・蜜源減少による過密配置問題……内容：気候変動で蜜源開花期がずれ、限られた期間に蜂群が集中。／結果：採蜜量の低下・蜂のストレス増加・採算悪化。／原因：蜜源資源の分布変化に対し、従来の蜂場慣行が機能しなくなる。

(2) 新たな調整メカニズム確立の方向性

◎「地域協定型」調整の制度化……①養蜂組合や自治体単位で、「蜂場利用調整協定」を締結。②その内容は、蜂場の範囲・先占優先期間・届出手順・病気防除・農薬使用情報の共有。③法的位置づけとして、行政協定（地域計画）や生産組合協定として準法的拘束力を持たせる。

◎「届出＋地域同意」二段階制……①現行の「行政届出」だけでなく、設置予定地の地元養蜂者・組合への事前協議を義務化。②これにより、

届出先と地域慣行の調整を公式手続に組み込む。

◎「デジタル地図」・「蜜源情報共有システム」の構築……①各自治体・組合が蜂場位置をGIS（地理情報システム）で可視化。②蜜源植物の開花予測・農薬散布情報を共有し、過密配置やリスクを防ぐ。

◎「養蜂・農業・環境」三者連携による地域管理体制……①養蜂家、農家（果樹・野菜生産者）、自治体・環境団体の三者で協議会を設置。②花粉媒介サービスと蜜源保全を両立させる「協働型農業モデル」を推進。

◎法的裏づけを持つ「地域慣行の明文化」……養蜂振興法や条例レベルで、①先占優先慣行の尊重、②地域協定の法的効力、③紛争調停手続（行政調整会議）を位置づける方向が望ましい。

以上をまとめると、蜂場権をめぐる紛争は、「慣行」と「法制度」のズレ、「個人」と「地域」の調整不足から生じている。

今後は、①届出制度の透明化、②地域協定の制度化、③情報共有のデジタル化、④多主体協働による花蜜資源管理が、持続可能な養蜂と地域共生の鍵となる。

「蜂場調整協定（案）」の地域協定文例

最後に、以上の考え方をもとに、実際に地域で活用できるように整理した「蜂場調整協定（案）」のテンプレート（地域協定文例）を示してみたい。

地域の養蜂組合・自治体・農業者などが共同で取り決めることを想定して、基本条例案をChatGPTに依頼し作成した（次ページ参照）。これを基に、各地の実情も加味した実際の協定が作成されるよう期待したい。

「蜂場調整協定」 （案）

第1条（目的）

本協定は、当地域における養蜂活動の円滑な運営と、花蜜資源の持続的利用を図るため、蜂場の設置・転飼・利用に関する基本的事項を定め、関係者間の調和を保つことを目的とする。

第2条（定義）

1. 「蜂場」とは、蜜蜂の飼育・採蜜のために一定期間使用される場所をいう。
2. 「養蜂者」とは、本地域内で蜂群を設置・管理する者をいう。
3. 「先占養蜂者」とは、当該蜂場を前年または継続的に使用している養蜂者をいう。
4. 「転飼」とは、他地域から本地域に蜂群を移動させて飼育することをいう。

第3条（蜂場の利用原則）

1. 養蜂者は、「先占優先」の原則に基づき、既存蜂場利用者の承諾を得てから設置するものとする。
2. 養蜂場の新規設置は、蜜源状況・環境条件・周辺住民への影響を考慮し、過密配置を避けるよう努める。
3. 養蜂者は、環境保全・農薬管理・病気防除において地域ルールを遵守する。

第4条（届出および協議）

1. 養蜂者は、転飼または新規設置を行う場合、行政への届出に先立ち、組合・地元関係者に事前協議を行う。
2. 組合は、届出内容を確認のうえ、他養蜂者との調整を行い、地域調整

表に記録する。

3. 行政は、届出を受理する際、組合確認書を添付書類として求めることができる。

第5条（蜂場範囲の調整）

1. 各蜂場の配置間隔は、原則として半径〇〇メートル以上を確保する。
2. 同一花蜜資源を共有する複数養蜂者がいる場合、採蜜期間・群数・利用時間の分担調整を行う。
3. 蜜源過密が予想される場合、組合は利用制限または分散配置を勧告できる。

第6条（紛争の処理）

1. 養蜂者間または関係農家との間に紛争が生じた場合、まずは当事者間の協議によって解決を図る。
2. 協議で解決しない場合は、組合内調整会議または行政（農政課等）による仲裁を求めることができる。
3. 本協定に反する行為があった場合、組合は是正を勧告し、必要に応じ行政指導を要請する。

第7条（情報共有）

1. 組合は、蜂場位置・設置時期・群数・蜜源植物・農薬散布情報をデジタル地図（GIS）にて共有する。
2. 養蜂者は、感染症や蜂群異常が発生した場合、速やかに組合および関係機関に報告する。

第8条（環境・住民への配慮）

1. 養蜂者は、住宅地・観光地付近では十分な距離を保ち、必要に応じて防風垣・表示看板等を設置する。
2. 住民からの苦情等が発生した場合、組合は迅速に調整・説明を行う。

第9条（協定の見直し）

本協定は、蜜源環境・法制度・地域状況の変化に応じて、毎年または必要に

応じて見直しを行う。

第10条（発効）

本協定は、令和○年○月○日から施行する。

署名者および同意者は、本協定の趣旨を理解し、誠実に遵守する。

【署名欄】

- ○○養蜂組合 代表 _____
- ○○町農業協同組合 代表 _____
- ○○町長（または農政課長） _____
- 地元代表者（自治会長等） _____

（補足）活用上のポイント

- 行政の届出制と連動させることで、実効性を持たせる。
- 各条文の「距離」「期間」「群数」などは地域の実情に応じて設定する。
- 紛争調整条項（第6条）は、準司法的な地域ルールとして機能する。

第7条の情報共有をデジタル化（地図化）することで、近隣養蜂者・行政・農家の連携を強化できる。

奥付・付記

〔書 名〕 **日本の養蜂よもやま話**（ミツバチと蜂蜜の真情報シリーズ）

〔初版発行〕 **2025（令和7）年12月10日**

〔著 者〕 **白 佐 俊 憲**（しらさ・としのり）

1937（昭和12）年10月生まれ。北海道北竜町出身。

北海道大学教育学部教育学科卒業。

現在、札幌市厚別区在住。蜂蜜研究家、文筆家。

〔監修者〕 **正 倉 一 文**（まさくら・いちぶん）

1958（昭和33）年7月生まれ。東京都品川区出身。

北海道大学経済学部経済学科卒業。

現在、川崎市麻布区在住。随筆春秋事務局長。文筆家。

〔発行元〕 **随筆春秋ポータル**（電子出版）

〔印刷委託先〕 **製本直送ドットコム**（希望者へ有料印刷可能）

〔出版形態〕 電子出版（無料閲覧・ダウンロード可能）

〔収録先〕・国立国会図書館デジタルコレクション及び同サーチ

- ・随筆春秋ポータルサイト「飯名碧水の部屋」
- ・白佐俊憲マイポータル（科学技術振興機構）、ほか

